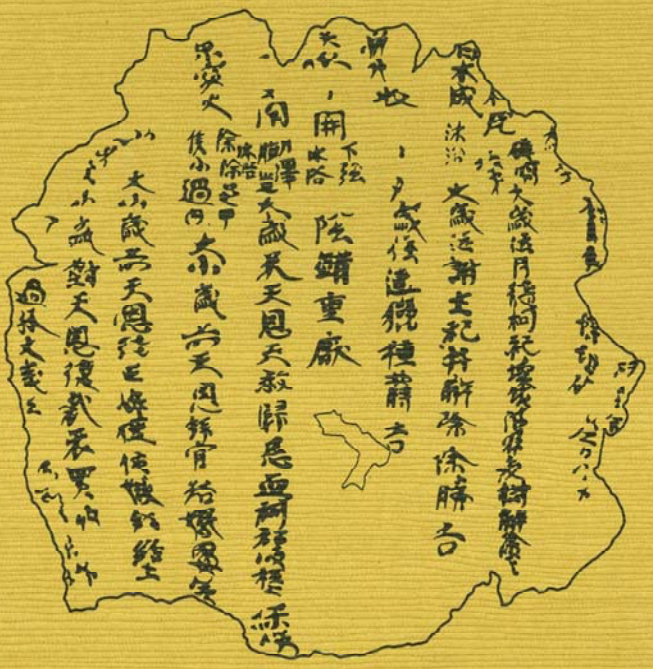
米沢市埋蔵文化財調査報告書　第36集

K－532

大　浦

大浦B遺跡発掘調査報告書



AN２出土の漆紙文書実測図

平成５年３月

1993

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書　第36集

大　浦

大浦B遺跡発掘調査報告書

平成5年3月

1993

米沢市教育委員会

序　　文

大浦ｂ遺跡では，平成元年度に，店舗新築工事に伴う緊急発掘調査により，奈良・平安時代の官衙跡とみられる遺構や漆紙文書が発見されたことから，翌，平成２年度から３ヵ年間，この遺跡の全体像を把握するため調査を進めて参りましたが，これら４ヵ年にわたる調査の成果をとりまとめたのがこの報告書です。

平成元年度の調査では，東西約46m，南北が39mの柵列の中に，奈良時代の中葉から末葉のものとみられる二時期にわたる掘立建物跡群が確認され，その配置関係から官衙跡であると考えられております。さらに，土壙内から漆紙文書が出土し，国立歴史民俗博物館の平川　南教授に鑑定していただいたところ，延暦23年（西暦８０４年）の12月18日から同月28日までの具注暦であることがわかりました。漆紙文書の具注暦は県内では初めての発見であり，その保存状態も極めて良好で，古代の社会制度の解明や文字資料として貴重な資料であるとの評価をいただいております。

このような発見により，国庫補助事業として，翌，平成２年度から３ヵ年にわたり，継続調査を進めて参りました。新たな柵列や建物跡の確認，さらには「二面硯」の発見など，着々とその成果を残してきております。

今後も，この遺跡の全容解明に向け尽力する所存ですので，関係各位のなお一層のご理解とご指導をお願い申し上げます。

最後になりましたが，これまで数次にわたる調査に際し，ご指導賜りました文化庁の河原主任調査官，並びに県教育庁文化課，そして多大なるご協力を賜りました地権者の遠藤庄四郎氏，有限会社ロンダード，加藤正吉，加藤吉宏両氏，さらに，漆紙文書の解読と玉稿を賜りました平川教授に対し，心から御礼申し上げます。

平成５年３月

米沢市教育委員会

教育長　小口亘

例　　言

1．本報告書は，米沢市教育委員会が，個人の店舗建設に伴う，緊急発掘調査として平成元年（1990）に実施した第Ⅰ次調査と，翌，平成２年度から平成４年度までの３ヵ年にわたって国庫補助事業として実施した第Ⅱ次から第Ⅳ次調査の成果をまとめたものである。

2．遺跡の所在地は下記の通りである。

第Ⅰ・Ⅱ次調査区　山形県米沢市中田町字大浦一405他
第Ⅲ次調査区　山形県米沢市中田町字芦付二290－2他
第Ⅳ次調査区　山形県米沢市中田町字芦付二290－1他

3．調査期間

平成元年度（1990）平成元年11月６日～同年12月15日
平成２年度（1991）平成２年４月12日～同年４月20日
同年７月18日～同年７月23日
同年９月４日～同年10月31日
平成３年度（1992）平成４年３月10日～同年３月30日
平成４年度（1992）平成４年12月８日～同年12月25日
（延べ日数101日）

4．調査体制

○平成元年度（1990）

調査主体　米沢市教育委員会
調査総括　二宮幸雄（社会教育課長）
調査担当　手塚　孝
調査主任　菊地政信
調査副主任　金子正廣
作業員　小林理香，原　三郎，藤守伊知郎
中島国雄，勝見文男，佐藤由美子
堤　吉郎
事務局　梅津幸保，小林伸一，山田　隆
山口恵美子

○平成２年度（1991）

調査主体　米沢市教育委員会
調査総括　小関　薫（文化課長）
調査担当　手塚　孝
調査主任　菊地政信
調査副主任　山田　隆，赤木博幸
作業員　原　三郎，皆川清助，五十嵐　拓
伊藤竜也，佐藤祐史，水野　哲
中島国雄，柴崎　造，出口孝蔵
遠藤とみの，小関とき子，赤木みや
情野敬子，金子伸子，中村雄大

舟越　充，渡邊智夫，高木　均
水口卓児
事 務 局　木村琢美，小林伸一，船山弘行

○平成３年度（1992）

調査主体　米沢市教育委員会
調査総括　小関　薫（文化課長）
調査担当　手塚　孝
調査主任　菊地政信
調査副主任　月山隆弘
作 業 員　原　三郎，加藤三郎，皆川清助
遠藤忠一，小関晴雄，沢根英夫
中島国雄，松本三郎，武田房次郎
小浦文吉，黒田よし子，安部ふみ子
事 務 局　木村琢美，小林伸一，平間洋子

○平成４年度（1992）

調査主体　米沢市教育委員会
調査総括　木村琢美（文化課長）
調査担当　手塚　孝
調査主任　菊地政信
調査副主任　月山隆弘
作 業 員　遠藤忠一，小浦文吉，加藤文教
沢根英夫，羽賀二雄，松本三郎
穴沢茂雄，菊地芳子，鈴木由美子
富樫福次，諸橋正一，黒田よし子
武田房次郎
事 務 局　我妻淳一，小林伸一，平間洋子

調査指導　河原純之，加藤　稔，川崎利夫，平川　南，吉沢幹夫，文化庁，山形県教育庁文化課，国立歴史民俗博物館，東北歴史資料館，山形県立博物館
調査協力　遠藤庄四郎，加藤正吉，加藤吉宏，水野　哲，地元中田町町内会各位，有限会社ロンダード
（敬称略）

５．大浦遺跡群はＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄの４地区からなるが，発掘回数を累計しているために大浦Ｂ遺跡での平成元年度の調査は第４次調査，平成２年度は第７次調査，平成３年度は第９次調査，平成４年度は第10次調査としている。本報告においては大浦Ｂ遺跡としてまとめ，平成元年度を第Ⅰ次調査にし次に平成２年度を第Ⅱ次調査，平成３年度を第Ⅲ次調査，平成４年度を第Ⅳ次調査とした。なお，大浦遺跡群はＤ地区を除き，官衙推定地として包括されるので大浦遺跡と呼ぶことにする。

６．挿図縮尺は，$\frac{1}{40}$，$\frac{1}{60}$，$\frac{1}{80}$，$\frac{1}{100}$，遺物については，$\frac{1}{2}$，$\frac{1}{4}$を基本とし，それぞれスケールで示した。但し，遺構図面中の遺物については縮尺不同である。写真図版の完形復元土器は縮尺不同，他はスケールで示した。図示した遺物の番号は実測図，写真図版，遺構出土の遺物と対応

している。

7．文中，挿図中の記号は，Ｇ－グリット，ＢＹ－掘立柱建物跡，ＤＹ－土壙，ＫＹ－溝状遺構，ＰＹ－ピット，ＴＹ－柱穴，ＤＮ－井戸跡，ＯＮ－柵列，ＨＹ－竪穴住居跡，ＡＮ－焼土遺構，ＡＺ－土器，ＤＺ－鉄製品，Ｆ－覆土，Ｓ－礫を示す。

8．柱穴の平面図，土層断面図で使用したスクリーントーンは，柱痕跡が明確なものに砂目を使用した。なお，掘立柱建物跡平面図のスクリーントーンは，各図の中で，関連しない柱跡（掘り方も含む）や土壙，ピットについて使用した。

9．挿図中の方向は真北に合わせ，グリットの各マス目の番号は西北の数字で表わす。掘立建物跡の真北に対しての角度については各挿図に示した。（例として　Ｎ－４°－Ｗは真北に対して西へ４度傾いていることを示す。）

10．土師器，須恵器に関する調整手法の分類基準は，米沢市埋蔵文化財報告書第７集「笹原」に掲載したものに加筆修正し，新に作成した。

11．本調査により出土した遺物については整理，復元し，米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200）に一括保管している。

12．本報告書の作成については，手塚　孝，菊地政信が担当し，月山隆弘が補佐した。編集については菊地が行ったが，全体は手塚が総括した。責任校正は小林伸一がその責務にあたった。

13．漆紙文書については，国立歴史民俗博物館の平川　南教授，東北歴史資料館学芸部資料管理課の吉沢幹夫氏よりご教示を賜った。さらに，平川　教授からは特別寄稿を賜った。記して感謝したい。

本　文　目　次

（表紙題字は米沢市教育委員会教育長　小口　亘による）

序　文

例　言

目　次

第Ⅰ節　遺跡の概観と調査の経緯……1

1．遺跡の立地と環境……1

2．調査に至るまでの経過……1

3．調査の経過……3

第Ⅰ次調査……3

第Ⅱ次調査……3

第Ⅲ次調査……5

第Ⅳ次調査……5

第Ⅱ節　検出された遺構……6

1．遺構の概要……6

2．Ⅰ期の遺構……6

HY141，142……6

HY257，258，258……11

3．Ⅱ期の遺構……11

BY1，2，3……11

BY4，10，11，12，13，14……15

BY18，15，36，37，DN262……15

KY3，340，ON233……15

ON548，ON571……23

4．Ⅲ期の遺構……23

BY8，9……23

BY19，5，6，7，20，21……38

BY22，23，24，26，33，34……38

BY35，DN261，260……39

ON233……39

ON548，571，17，25……41

KY355，344，450，488……41

5．Ⅳ期の遺構……41

BY16，27，28，29……41

DY147，168，146，251，167

DY144，145，61，218，217

DY172，239，169，236，480

DY481，483，489，KY18……41

AN1，2，3，4……41

CN234，235……41

6．Ⅴ期の遺構……41

第Ⅲ節　検出された遺物……60

1．出土土器の分類……60

A類土器……60

B類土器……65

C類土器……71

D類土器……71

E類土器……71

F類土器……71

2．その他の遺物……90

3．出土土器の年代……90

第Ⅳ節　総括……91

1．大浦遺跡の遺構……92

2．出土遺物……93

3．大浦遺跡の性格……93

参考文献……94

挿　図　目　次

第１図　大浦B遺跡位置図……2
第２図　大浦B遺跡グリット配図……4
第３図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査HY141, 142平面図（Ⅰ期）(1)‥7
第４図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査HY257平面図（Ⅰ期）(2)……8
第５図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査HY258平面図（Ⅰ期）(3)……9
第６図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査HY259平面図（Ⅰ期）(4)……10
第７図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY１平面図（Ⅱ期）(1)……12
第８図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY２平面図（Ⅱ期）(2)……13
第９図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY３平面図（Ⅱ期）(3)……14
第10図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY平面図（Ⅱ期）(4)……16
第11図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY10, 11, 18平面図（Ⅱ期）(5)17
第12図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY12平面図（Ⅱ期）(6)……18
第13図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY13平面図（Ⅱ期）(7)……19
第14図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY14平面図（Ⅱ期）(8)……20
第15図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY15平面図（Ⅱ期）(9)……21
第16図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査BY36, 37平面図（Ⅲ期）(10)……22
第７図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査BY34, 35平面図（Ⅱ期）(11)……24
第18図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY５平面図（Ⅲ期）(12)……25
第19図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY６平面図（Ⅲ期）(13)……26
第20図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY７平面図（Ⅲ期）(14)……27
第21図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY８平面図（Ⅲ期）(15)……28
第22図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY９平面図（Ⅲ期）(16)……29
第23図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY19平面図（Ⅲ期）(17)……30
第24図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY20平面図（Ⅲ期）(18)……31
第25図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY21, ON25平面図（Ⅲ期）(19)32
第26図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY22平面図（Ⅲ期）(20)……33
第27図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY23平面図（Ⅲ期）(21)……34
第28図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY24平面図（Ⅲ期）(22)……35
第29図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY26, ON17平面図（Ⅲ期）(23)36
第30図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査BY33平面図（Ⅲ期）(24)……37
第31図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY16平面図（Ⅳ期）(25)……40
第32図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY27平面図（Ⅳ期）(26)……42
第33図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY28平面図（Ⅳ期）(27)……43
第34図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY29平面図（Ⅳ期）(28)……44
第35図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査AN1, 2, DY461, 462平面図(1)45
第36図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査KY18, DY168平面図(2)……46
第37図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査AN3, 4, DY466, 467平面図(3) 47
第38図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY144, 167平面図(4)……48
第39図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY169, 172, 236平面図(5)……49
第40図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY144, 167平面図(6)……50
第41図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY217, 218平面図(7)……51
第42図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DN260, 261平面図(8)……52
第43図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査CN234, 235, DY270, 337……53
第44図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DN240, 241, 244, 268, 272, 320, 321平面図(10)……54
第45図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査DY480, 486, 522平面図(11)……55
第46図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査DY480, 486, 522平面図(12)……56
第47図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査DY481平面図(13)……57
第48図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査DY489平面図(14)……58
第49図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区遺構変容図……59
第50図　大浦B遺跡出土遺物実測図(1)……62
第51図　大浦B遺跡出土遺物実測図(2)……63
第52図　大浦B遺跡出土遺物実測図(3)……64
第53図　大浦B遺跡出土遺物実測図(4)……66
第54図　大浦B遺跡出土遺物実測図(5)……67
第55図　大浦B遺跡出土遺物実測図(6)……68
第56図　大浦B遺跡出土遺物実測図(7)……70
第57図　大浦B遺跡出土遺物実測図(8)……72
第58図　大浦B遺跡出土遺物実測図(9)……73
第59図　大浦B遺跡出土遺物実測図(10)……74
第60図　大浦B遺跡出土須恵器拓影図(1)……75
第61図　大浦B遺跡出土須恵器拓影図(2)……76
第62図　大浦B遺跡出土須恵器拓影図(3)……77
第63図　大浦B遺跡出土遺物実測図(11)……78
第64図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(1)……79
第65図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(2)……80
第66図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(3)……81
第67図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(4)……82
第68図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(5)……83
第69図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(6)……84
第70図　米沢盆地出土土師器編年図……88
第71図　米沢盆地出土須恵器編年図……89

付　表　目　次

第１表　土器調整手法分類表……61
第２表　大浦B遺跡出土土器計測表……85
第３表　大浦B遺跡出土土師器編年表……91
第４表　大浦B遺跡出土須恵器編年表……91

図　版　目　次

巻頭図版一　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区全景(上空より望む)
巻頭図版二　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区近景(南東より望む)
大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区近景(東方より望む)
第一図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区
(Ⅱ期遺構全景・上空より望む)
(Ⅲ期遺構全景・上空より望む)
第二図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区
(HY141,142完掘状況,南方より望む)
(HY256完掘状況,西方より望む)
第三図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区
(BY1,BY8全景,南方より望む)
(BY2,BY19全景,南方より望む)
第四図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区
(BY5,BY10,BY11,BY18,KY335,KY344全景,東方より望む)
(BY1,BY2,BY3,BY8,BY9,BY19を東方より望む)
第五図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区
(BY7全景,西方より望む)
(BY13,BY20全景,東方より望む)
第六図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区
(南門跡,BY15,26を北方より望む)
(棚列跡,ON233を北東コーナー部より西方を望む)
第七図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査
(棚列跡,ON233を北東コーナー部より南方を望む)
第八図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区
(DN260,井戸跡セクション状況)
(DN262,井戸跡セクション状況)
第九図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区
(AN3,AN4完掘壮況,南東より望む)
(KY18セクション状況,北方より望む)
第十図版　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区
(KY18遺物出土状況,南方より望む)
(KY18遺物出土状況,北方より望む)
第十一図版　大浦B遺跡第Ⅲ次調査区
(遺構全景,上空より望む)
第十二図版　大浦B遺跡第Ⅲ次調査区
(BY33全景,北方より望む)
(BY34,BY35全景,南方より望む)
第十三図版　大浦B遺跡第Ⅲ次調査区
(DY489遺物出土状況,東方より望む)
(KY488より出土の二面硯出土状況,南方より望む)
第十四図版　大浦B遺跡第Ⅳ次調査区(遺構全景,南方より望む)
(棚列跡,ON571近景,北方より望む)
第十五図版　大浦B遺跡出土土器(1)　土師器甕形土器,土師器坏
第十六図版　大浦B遺跡出土土器(2)　土師器蓋,土師器坏
第十七図版　大浦B遺跡出土土器(3)　土師器蓋,須恵器蓋
第十八図版　大浦B遺跡出土土器(4)　須恵器坏
第十九図版　大浦B遺跡出土土器(5)　須恵器坏
第二十図版　大浦B遺跡出土土器(6)　須恵器坏,二面硯
第二十一図版　大浦B遺跡出土土器(7)　須恵器甕形土器
第二十二図版　大浦B遺跡出土土器(8)　須恵器甕形土器
第二十三図版　大浦B遺跡出土土器(9)　須恵器雍形土器
第二十四図版　大浦B遺跡出土土器(10)　須恵器坏,土師器坏底部,円面硯破片
第二十五図版　大浦B遺跡出土漆紙文書

付　図　目　次

付図1　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査遺構全体図
付図2　大浦B遺跡第Ⅲ次調査遺構全体図
付図3　大浦B遺跡第Ⅳ次調査遺構全体図
付図4　大浦A・B遺跡遺構全体図
付図5　大浦遺跡Ⅱ期遺構全体図
付図6　大浦遺跡Ⅲ期遺構全体図

附　章

米沢市大浦B遺跡出土の漆紙文書について……1　第一図版
大宝　2年　壬寅　儀鳳暦……10　第二図版
神亀　2年　乙丑　儀鳳暦……11　第三図版
延暦　23年　甲申　大衍暦……12　第四図版
天長　5年　戊申　大衍暦……13　第五図版
大宝　元年　辛丑　儀鳳暦……14　第六図版
天応　元年　辛酉　大衍暦……15　第七図版
延暦　23年　甲申　大衍暦……16　第八図版
元慶　8年　甲辰　宣明暦……17　第九図版
第十図版

巻頭図版一　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区全景

▲大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区近景（南東から望む）

▲大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区近景（東方から望む）

第Ⅰ節　遺跡の概観と調査の経緯

1．遺跡の立地と環境（第1図）

本遺跡は米沢市役所から北東2㎞の中田地区に位置し，遺跡の西を堀立川，南には吾妻山を源とする松川（最上川），東を羽黒川が流れ，遺跡の南約400ｍの地点で合流する。さらに東方約600ｍの地点では羽黒川が合流している。

北側にも，西から東に流れる小規模な河川があり，緩やかな自然堤防状の河岸段丘を形成している。これらの大小の河川に囲まれた，自然堤防上に遺跡は立地し，標高は234ｍを測る。南東部との北高差は約5ｍある。南東部の低地は旧河川跡であり，現在は水田で占められる。大浦Ｂ遺跡の位置する地点は最も標高が高く，東西に緩やかに傾斜している。

大浦遺跡群はＡ～Ｄ遺跡の4箇所から形成するが，一連の調査によりＤ遺跡（中世が主体）を除くＡ，Ｂ，Ｃの3遺跡は，奈良，平安が主体を示すことを考慮し，包括して，大浦遺跡と呼ぶ事にした。この範囲は郡衙推定域としてもとらえることが可能である。

遺跡周辺の環境としては，水田や畑など残ってはいるが，市街地からの道路が開通したことに伴い，米沢市街地への北側玄関口として，市内でも交通量が多く，郊外型の店舗進出に伴い，年ごとに環境が変容している地域のひとつと言えよう。

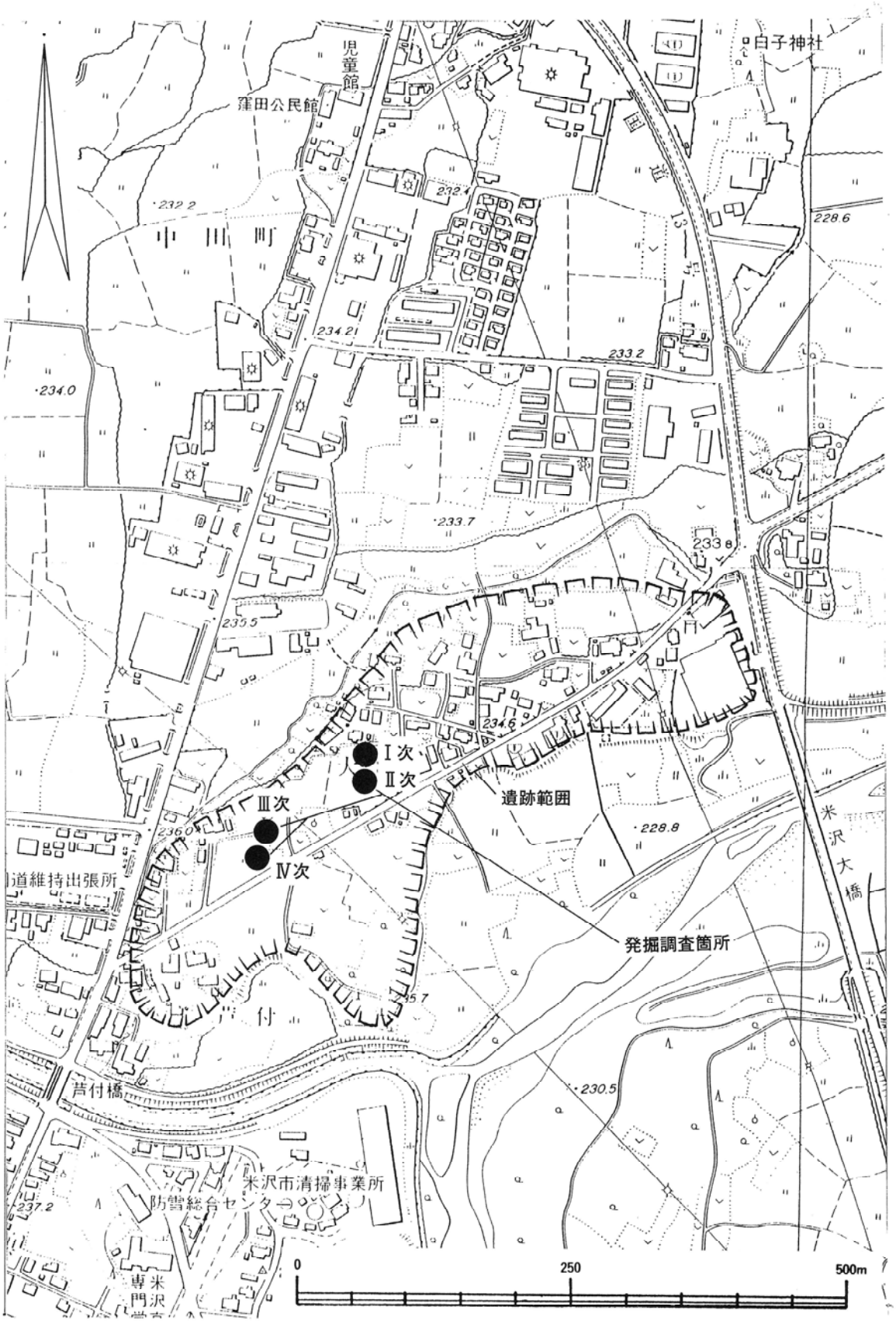
2．調査に至るまでの経過（第2図）

大浦遺跡群が初めて，発見されたのは昭和59年（1984）6月である。中田町の遠藤庄四郎氏が駐車場造成工事の際に偶然に通りかかった調査員が，削平した面から遺物や遺構を確認したことにより，遺跡として認識されるに至った。この地点は本遺跡群の東端部に位置し，現在は大浦Ｃ遺跡と呼ばれる地域である。

この箇所の発掘を第1次調査として実施した。その結果，木簡や布目瓦が出土したことによって，注目されるようになる。これらの遺物は重複して確認された溝跡からであり，さらにこの遺構が西方及び南方に延びる事から，遺跡の範囲が想定でき，地形から判断して，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの4箇所に分けて米沢市の遺跡分布図に登録した。

その後も大浦Ａ遺跡が金池第2土地区画整理事業に伴なう緊急発掘調査として昭和60年12月に第2次調査として実施している。平成元年（1989）4月には第3次調査，そして今回の報告書としてまとめる大浦Ｂ遺跡の調査が，同年11月に第4次調査として実施された。この第4次調査が本遺跡にとっては始めての発掘であり，大浦Ｂ遺跡の第1次調査にあたる。

Ｄ遺跡を除く，大浦遺跡群としては現在までに第10次調査まで数えるが，大浦Ｂに関しては第4次，7次調査を第Ⅰ次，Ⅱ次調査，第9次調査を第Ⅲ次調査，第10次調査を第Ⅳ次調査とした。



第１図　大浦Ｂ遺跡位置図

3．調査の経過（第２図）

第Ⅰ次調査（平成元年度）　〔大浦遺跡第４次調査〕

発掘調査は店舗及び駐車場新設工事に伴う緊急発掘調査として平成元年11月６日から同年12月15日の期間で開始した。発掘前に聞いた地権者の話によると，この地域はホップ畑であり，すでに地山まで攪乱を受けており，遺物についても表採したことがないとのことであり，当初はこの日程で終了する予定であった。

その話の先入観から表土剝離によって，確認された柱穴群を「ホップ支柱跡」と思った時もあったが，配置関係や覆土からこれらの遺構は，大型の掘立柱建物跡と認識するに至った。年代は奈良・平安時代に位置することが調査の進行によって明確になってきた。

表土剝離の拡大にともなって，図で示す全域に亘って遺構が確認され，予定した期間での終了は困難となった。遺物として漆紙文書の発見もあり，文化庁，山形県教育庁文化課の指導のもと地権者，施行者の協力により，次年度の雪どけをまって調査を続行することになった。

平成元年度の成果は中間報告会として，同年12月25日（月）午前10時30分より，文化センターの203研修室で行った。発掘現場が降雪のために，現場での説明会を断念したことによる。この中間報告会では，主に土壙より出土した漆紙文書について説明した。

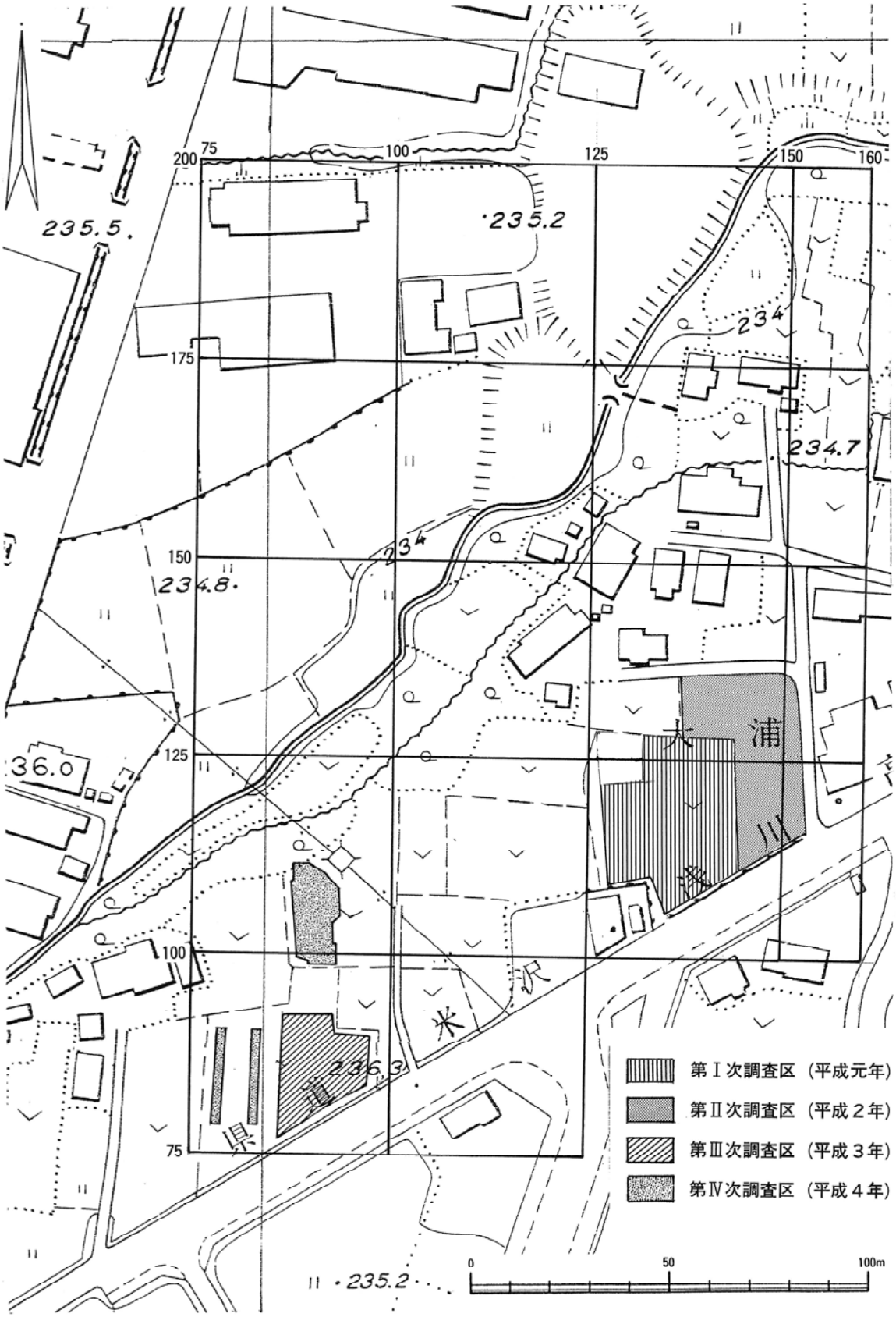
第Ⅱ次調査（平成２年度）〔大浦遺跡第７次調査〕

昨年の第Ⅰ次調査区の他に北側と東側に約700㎡をあらたに調査区に加え，昨年の未調査を含めた約2,200㎡を調査対象面積とした。表土剝離から進め剝離した土砂はダンプカーを使用して遺跡の南方約100ｍ地点に運搬する。この作業を４月12日から４月18日の期間に行った。その後，他の遺跡との発掘調査の関係から中断し，同年７月18日から再開する。

まず雑草の除去から開始し，７月18日～７月23日までの期間は大浦Ａ遺跡（第６次調査）と並行して実施した。調査は昨年度確認した遺構群の再確認を重点に進めた。また今年度に表土剝離をした箇所には遺構が少ないことがわかった。これは柵列の外が第Ⅱ次調査区であり，当然の結果である。同年の10月16日までに遺構掘り下げ，精査を終了した。この日にリモコンヘリコプターにカメラを装着して上空より，遺構全体図の写真撮影を実施する。午後より，各掘立柱建物跡の柱穴半裁を各建物群について２基単位で行い，掘り方や重複関係を確認した。

調査期間中は全体的に雨天の日が少なく，雨天のため発掘調査を中止した日は，まったくないといってよい程，天候に恵まれた年であった。調査区は水はけが良く，雨がほしい位であった。

平行して遺構実測図を作成する作業に開始し，10月29日までにすべての調査を終了した。10月26日には平川　南　教授を招いて，雨の中で現地説明会が行われ，その後，産業会館において漆紙文書について，平川教授より講演していただいた。調査区は11月26日に山砂で埋め戻した。



第２図　大浦B遺跡グリット配図

第Ⅲ次調査（平成３年度）〔大浦遺跡第９次調査〕

本遺跡は第Ⅰ・Ⅱ次調査の結果から奈良時代における官衙（置賜郡衙）の公算が高く，米沢市教育委員会では文化庁と山形県教育庁文化課の指導のもとで，平成２年から国庫補助を受けながら官衙跡確認調査を実施し，今回の発掘は平成３年度事業にあたる。

平成元年度の第Ⅰ次調査（第４次調査），平成２年度の第Ⅱ次調査（第７次調査）を実施しており，棚列内外の遺構確認を主に行なってきたが，今回は大浦Ｂ遺跡，西側の遺構群の広がりを確認する目的で実施したものである。

調査は平成４年３月10日より開始し，約800㎡を対象にした調査区を設定して，除雪，表土剝離を重機で行い３月12日から面整理に入る。14日から精査，遺構確認を行なった結果，掘立柱建物跡や大型の土壙，溝跡が検出された。16日より遺構の掘り下げを土壙，溝跡，柱穴の順で進めた結果，二面硯がＢＹ33に伴なうＫＹ488の東南より出土した。ＢＹ33は南に延びる掘立建物跡であり，その方向は現在，道路であることから全容を明確にする事は断念せざる得なかった。

土壙内からも鉄製の鋤，刀子，須恵器坏等が検出されたことから慎重に掘り下げ，23日に遺構の掘り下げをほぼ終了する。次いで24日からは遺構の平面図作成，写真撮影，セクション図作成を26日まで行い，27日で調査を完了した。25日に上空撮影，27日に現地説明会を実施した。説明会終了後，埋め戻して現況保存をしている。調査面積は約600㎡であった。

第Ⅳ次調査（平成４年度）　〔大浦遺跡第10次調査〕

今回の調査区は第Ⅲ次調査区の北方部に位置し，大浦遺跡範囲の西端部にあたる。また国庫補助事業としての最終年度でもあり，郡衙推定地の範囲を確認する目的で調査区を設定した。さらに第Ⅲ次調査区の西側にもトレンチ２本を配し，遺構の広がりを確認することにする。その結果トレンチの箇所には，数点の遺物は認められたが，遺構は確認されなかった。

第Ⅳ次調査は，平成４年12月８日から開始し同日に器材の搬入を行い，12月９日に重機による表土剝離を実施した。グリットは第２図で示すように第Ⅰ次調査区から延長して設定し，位置関係がわかるようにしてある。12月10日より面整理に着手，南方部に竪穴住居跡と思われるプランを確認したことから，調査区を拡張して精査ところ，土壙が重複するプランであると判明した。

12月16日より，遺構掘り下げを開始し，ＯＮ571の南北に延びる柵列を中心に進める。その後ＯＮ571と重複するＯＮ572を中心に進め，覆土や重複関係からＯＮ571は奈良時代，ＯＮ572は中世と判明した。他の土壙，ピット群は精査の結果，近世に位置するものであり，ＯＮ571の西側には，奈良時代の遺構は存在しないことも確認した。現地説明会は吹雪のため上中田公民館で12月25日に実施した。説明はスライドを使用し，第Ⅰ次～第Ⅳ次の全般に亘っておこなった。説明会終了後，発掘器材の撤去し，今回の発掘調査を終了した。

第Ⅱ節　検出された遺構

第Ⅰ・Ⅱ次調査区より479基，第Ⅲ次調査区より91基，第Ⅳ次調査区より32基の総計602基の遺構が確認された。第Ⅰ次調査から第Ⅳ次調査までの遺構については，通し番号を使用した。これらの遺構の大半は掘立建物跡を構成する。柱穴跡で占められる。遺構に記入した通し番号は確認した順にすべての柱穴跡にもつけたものであり，明確に掘立建物跡を構成する柱穴群を差し引いた数を記す。掘り方が明確でない小規模な柱穴跡はピットと称した。確認した遺構は第Ⅰ次調査区から第Ⅳ次調査区まで，総括して述べる。

1．遺構の概要

平成元年，同2年に調査を実施した官衙域を主体にして，柱穴（ＴＹ）27基，ピット（ＰＹ）203基，土壙（ＤＹ）62基，溝状遺構（ＫＹ）８基，竪穴住居跡（ＨＹ）５棟，焼土遺構（ＡＮ）５基，柵列（ＯＮ）７基，土器焼成遺構（ＣＮ）２基，掘立柱建物跡（ＢＹ）34棟であった。

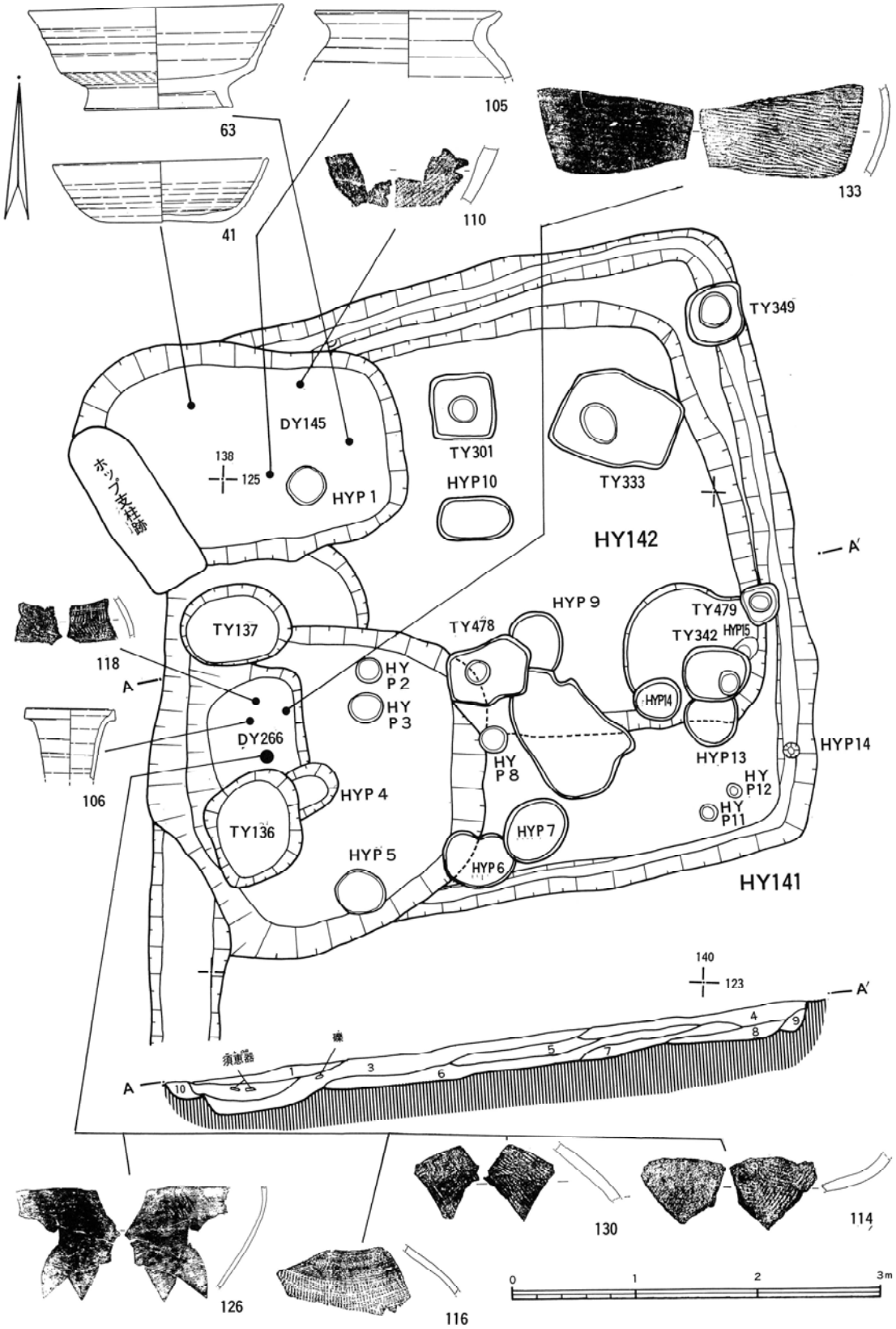
これらの遺構群は重複関係や出土遺物から概ね５時期に分けられ，年代順にⅠ期～Ⅴ期に区分される。Ⅰ期は８世紀中葉以前，Ⅱ期は８世紀中葉，Ⅲ期は８世紀後半，Ⅳ期は９世紀初頭，Ⅴ期は13世紀以降となる。官衙が存続したのはⅡ・Ⅲ期の遺構群と考えられる。各時期別に，分けて説明を加えたい。

2．Ⅰ期の遺構（第３図～第６図，第二図版）

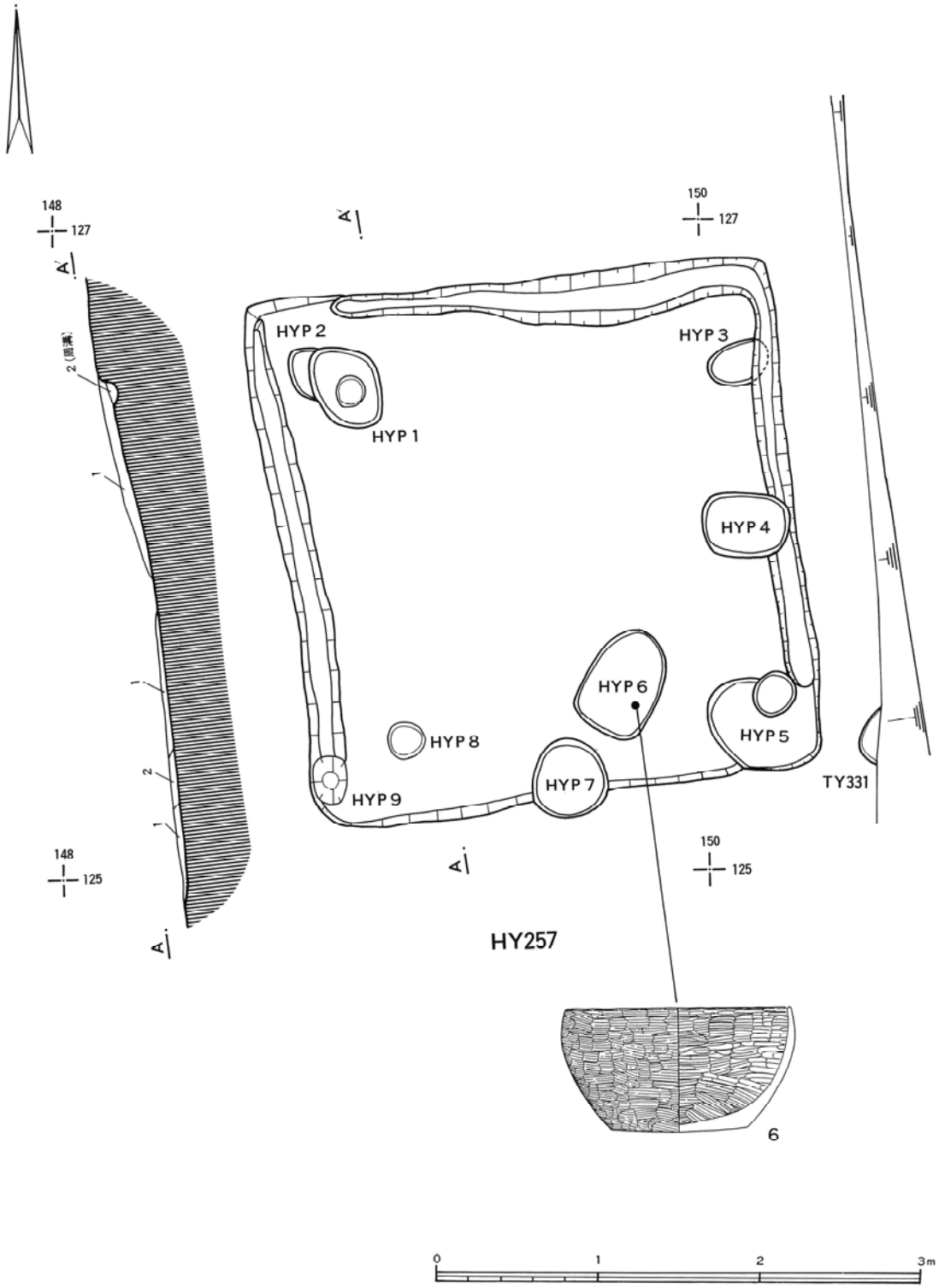
調査区の東側から北西にかけて５棟の竪穴住居跡を確認した。セクション図で示すように覆土は人工堆積状況を呈し，意図的に埋め立てられた様相をすべての竪穴住居跡に認められる。遺物も少量しか認められなかった。ＨＹ141，142，257はⅡ・Ⅲ期遺構と重複している。竪穴住居跡群は，官衙施設の建設に伴って，移転した可能性が強い。

竪穴住居跡の平面形状は方形プランを呈し，ＨＹ141，142とＨＹ258の２棟は後世の拡張を示す建て替えが認められる。住居跡の大きさはＨＹ258が6.6m×6.8mを有し，竈を南側に設置している。他の住居跡の竈は破壊された状況であった。ＨＹ258は6.60m×6.80m　ＨＹ142が5.10m×4.90m，ＨＹ295が4.30m×4.30m，ＨＹ257が3.30m×3.20mで，すべての竪穴住居跡に周溝が認められた。大浦遺跡群からは他に大浦Ａより１棟確認されており，大浦Ｂ遺跡の竪穴住居跡と同様な状況を呈していた。これらの事から，本遺跡を中心に中規模な集落跡が官衙建設以前に構成していたものと思われる。

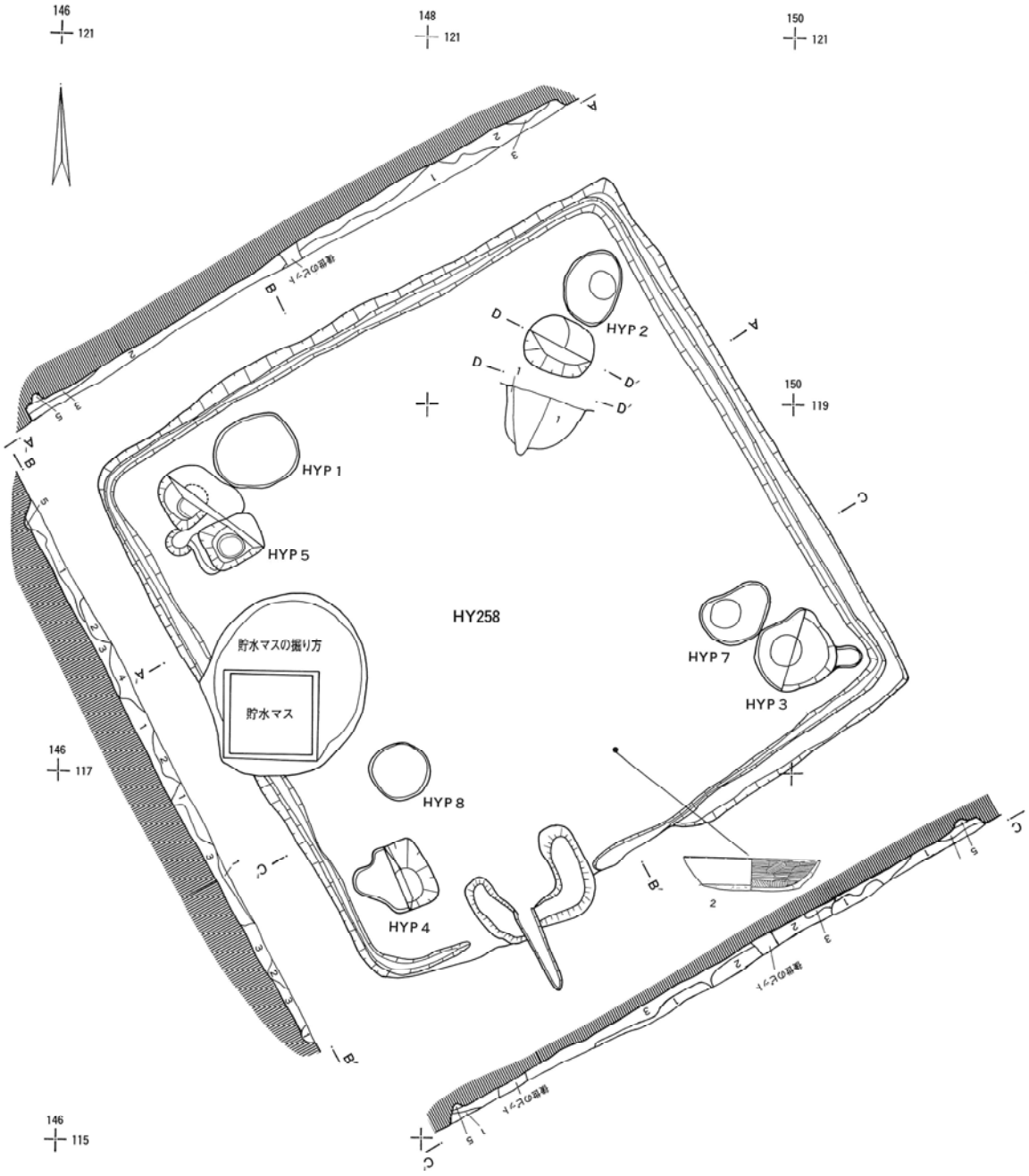
出土遺物は複元土器について挿図に示した。破片としては，ＨＹ141から土師器甕形土器片549点，土師器坏片44点，土師器取手坏１点，ＨＹ142から土師器甕形土器片８点，土師器取手



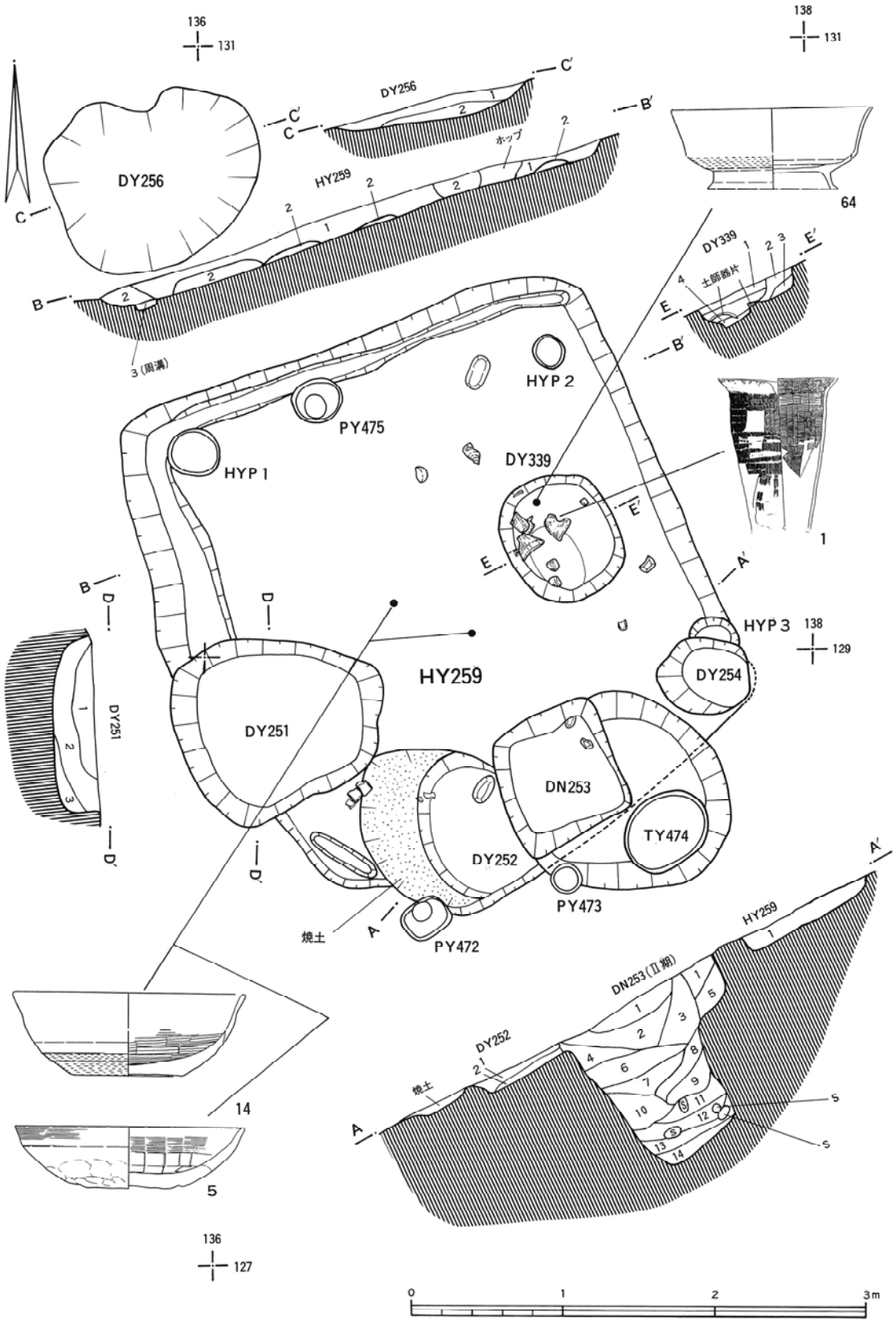
第３図　大浦Ｂ遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査HY141・142平面図（Ⅰ期）(1)



第４図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査HY257平面図(Ⅰ期)(2)



第５図　大浦Ｂ遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査ＨＹ258平面図(3)



第６図　大浦Ｂ遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査HY259平面図(Ⅰ期)(4)

坏１点であった。ＨＹ 257 からはＡ４類に分類した土師器坏１点，ＨＹ 258 からはＡ１類１点の他に土師器甕形土器片 110 点，土師器坏片２点，須恵器坏片２点，土師器両黒坏片４点が認められた。ＨＹ 259 からはＡ３類１点，Ａ７類１点，土師器甕形土器片49点，須恵器甕形土器片３点と土師器坏片８点，土師器蓋片６点が出土している。Ａ７類土器は覆土上面からの出土であり，ＨＹ 259 に伴なうものではない。また，ＤＹ 339 も床面上部から掘りこまれたものである。遺物はⅠ期に編年されるものが主体をなす。竪穴住居跡は８世紀中葉以前から存在し，８世紀中葉をもって廃絶し，廃絶と同時位にⅡ期の掘立柱建物群が建立されたと考えられる。

３．Ⅱ期の遺構（第７図～第16図，付図２，３，第三図版～第七図版）

第Ⅰ次調査区から第Ⅳ次調査区の全域に亘って認められた。遺構別に列挙すると掘立建物跡（以下建物跡という）ＢＹ１～４，10～14，18，南門，ＢＹ15，井戸，ＤＮ 262，馬屋（廐）ＢＹ36，37，柵列，ＯＮ 233，548，511，溝状遺構，ＫＹ 340 がある。

南に南門を置き，一辺39ｍ×46ｍ位（推定）の柵列で区画された範囲にＢＹ１～ＢＹ３の３棟の建物を中心にして，10棟の建物群と１基の井戸が主要な遺構であり，ＢＹ13を除けば平均Ｎ－５°－Ｗを示しており，企画的に配置されている。柱穴を構成する掘り方は３棟（ＢＹ１～３）は１ｍ前後，柱痕も30～40cmある。他の建物群は掘り方45～80cm，柱痕も20cmを示すものが大半である。以上が第Ⅰ・Ⅱ次調査区におけるⅡ期の遺構の概要である。第Ⅲ，Ⅳ次調査区におけるⅡ期の遺構概要としては，第Ⅲ次調査区のＢＹ36，37，ＯＮ 548，第Ⅳ次調査区においてはＯＮ 571 がある。このＯＮ 571 の柵列西側には，近世の遺構群が認められた。この事から想定すると，第Ⅳ次調査区の箇所は官衙域の，北西部に位置すると考えたい。以下，各遺構群を説明したい。なを間尺については柱痕の中心から中心を測定値とし，柱痕が確認できなかった柱穴間の間尺については（•）印で示す。間尺は（ｍ）単位で記した。

○ＢＹ１建物跡（第７図，第三図版）

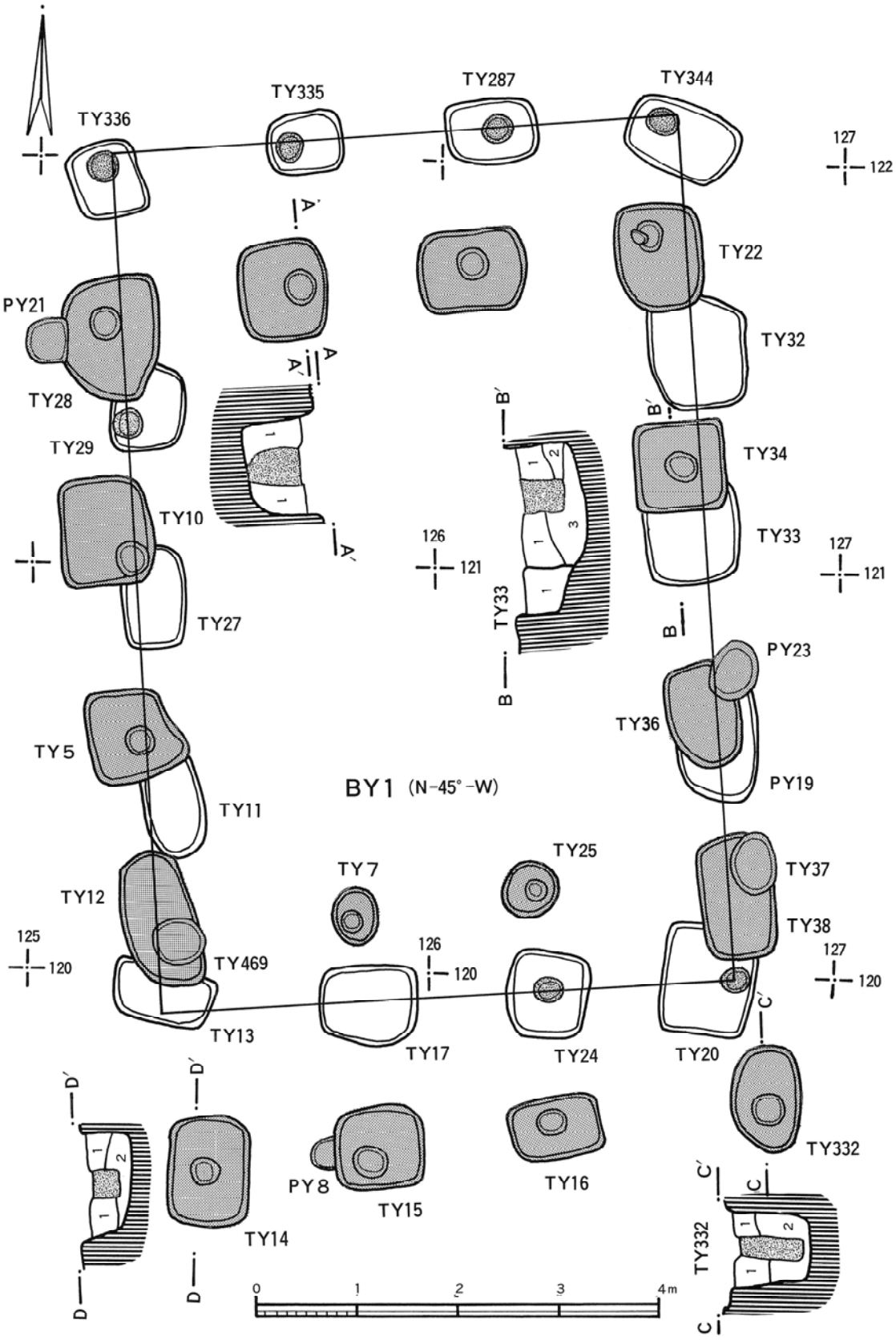
柵列内の北西部に位置し桁行南北４間（2.50ｍ×•2.12ｍ×•2.12ｍ×•2.12ｍ），梁行東西３間であり，（1.65ｍ×2.0ｍ×1.9ｍ）の規模である。ＢＹ８，27と重複する。

○ＢＹ２建物跡（第８図，第三図版）

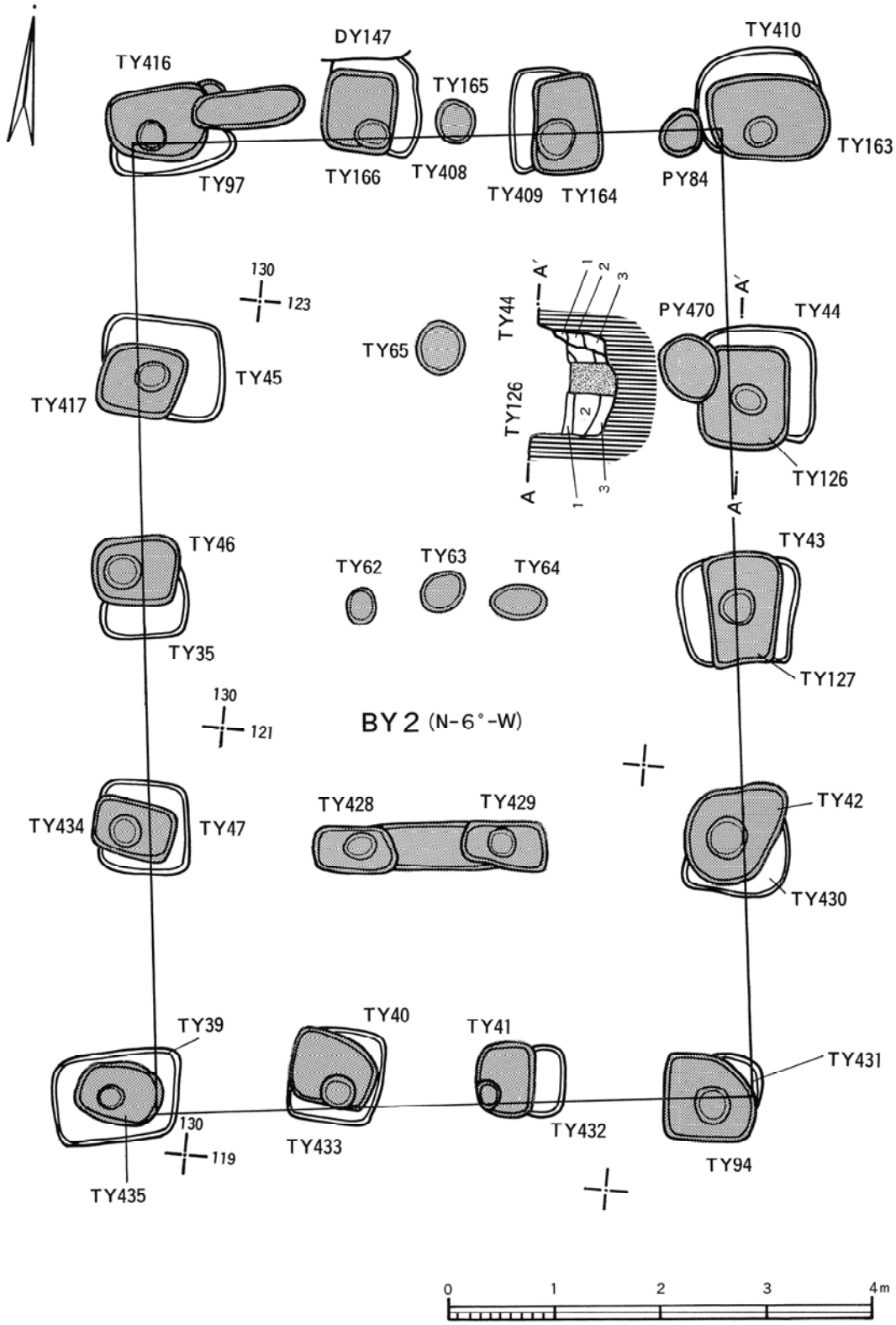
柵列内の北方部中央に位置し，南門に面している。東にＢＹ３，西にＢＹ１が同門隔で立ち並ぶ構成である。桁行南北４間（•2.27ｍ，等間隔），梁行東西３間（•1.80ｍ，等間隔）から成る。ＢＹ19と重複する。北方に位置するＤＹ 147 が掘り方を切って，構築している。

○ＢＹ３建物跡（第９図，第四図版）

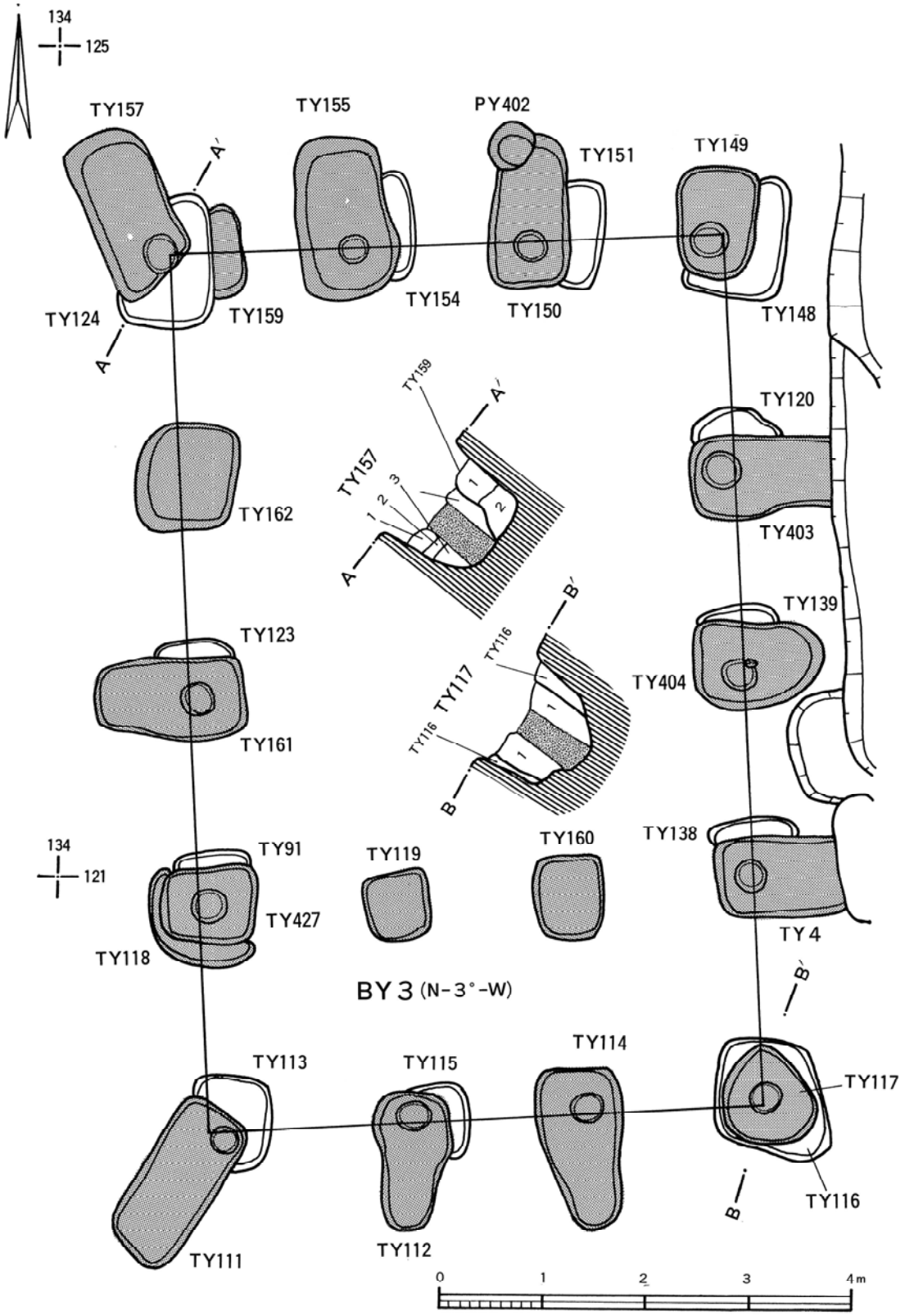
大型の建物で，３棟の中で東側に位置し，Ⅲ期のＢＹ９と重複する。ＢＹ１，２と同様な規模を有す。桁行南北４間（•2.12ｍ等間隔），梁行東西３間（•1.78ｍ等間隔）である。



第７図　大浦Ｂ遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査ＢＹ１平面図(Ⅱ期)(1)



第８図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY２平面図(Ⅱ期)(2)



第９図　大浦Ｂ遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査ＢＹ３平面図(Ⅱ期)(3)

○ＢＹ４建物跡（第10図）

柵列の北東コーナー部に位置する小規模な建物で，ＨＹ141，142を埋めた後に構築されている。桁行南北２間（1.90m×2.40m），梁行東西２間（1.80m×1.85m）である。

○ＢＹ10建物跡（第11図，第四図版）

総柱で構成される建物であり，倉庫と推測される。桁行南北２間（1.6m×1.5m），梁行東西（1.5m×1.5m）で，ほぼ正方形を呈す。倉庫は他にＢＹ13，14，18の計４棟がある。

○ＢＹ11建物跡（第11図，第四図版）

ＢＹ18の西側に位置す。桁行南北２間（・2.05m×・2.05m），梁行東西２間（・1.8m×・1.8m）である。当初総柱と思われたが，中央の柱跡は確認されなかった。

○ＢＹ12建物跡（第12図）

南門跡の北方８m地点に位置し，桁行南北２間（1.94m×2.50m），梁行東西２間（1.8m×・1.8m）を有す建物で，ＢＹ11と同様に中央の柱跡は確認できず，両者とも倉庫ではない。

○ＢＹ13建物跡（第13図，第五図版）

桁行南北２間（1.20m×・1.20m），梁行東西２間（・1.92m×・1.92m）の総柱である。

○ＢＹ14建物跡（第14図）

西側が未調査なので想定の間尺である。桁行南北２間（2.14m×・2.14m），梁行東西も２間（2.14m×・2.14m）と想定される。Ⅲ期の溝を有す建物ＢＹ21と重複する。

○ＢＹ18建物跡（第11図，第四図版）

掘り方が重複しており，Ⅰ期の範疇で修復したと想定される。桁行南北２間（1.75m×2.0m）梁行東西２間（・1.75m×・1.75m）の総柱建物で，ＢＹ11の東側に位置している。

○ＢＹ15南門跡（第15図，第六図版）

柵列に付随する四脚柱の南門である。南北の柱穴間は，1.20mを測る。Ⅲ期のＢＹ26と重複している。東西は，・2.20mあり，Ｎ－13°－Ｗに構築されている。

○ＢＹ36建物跡（第16図）

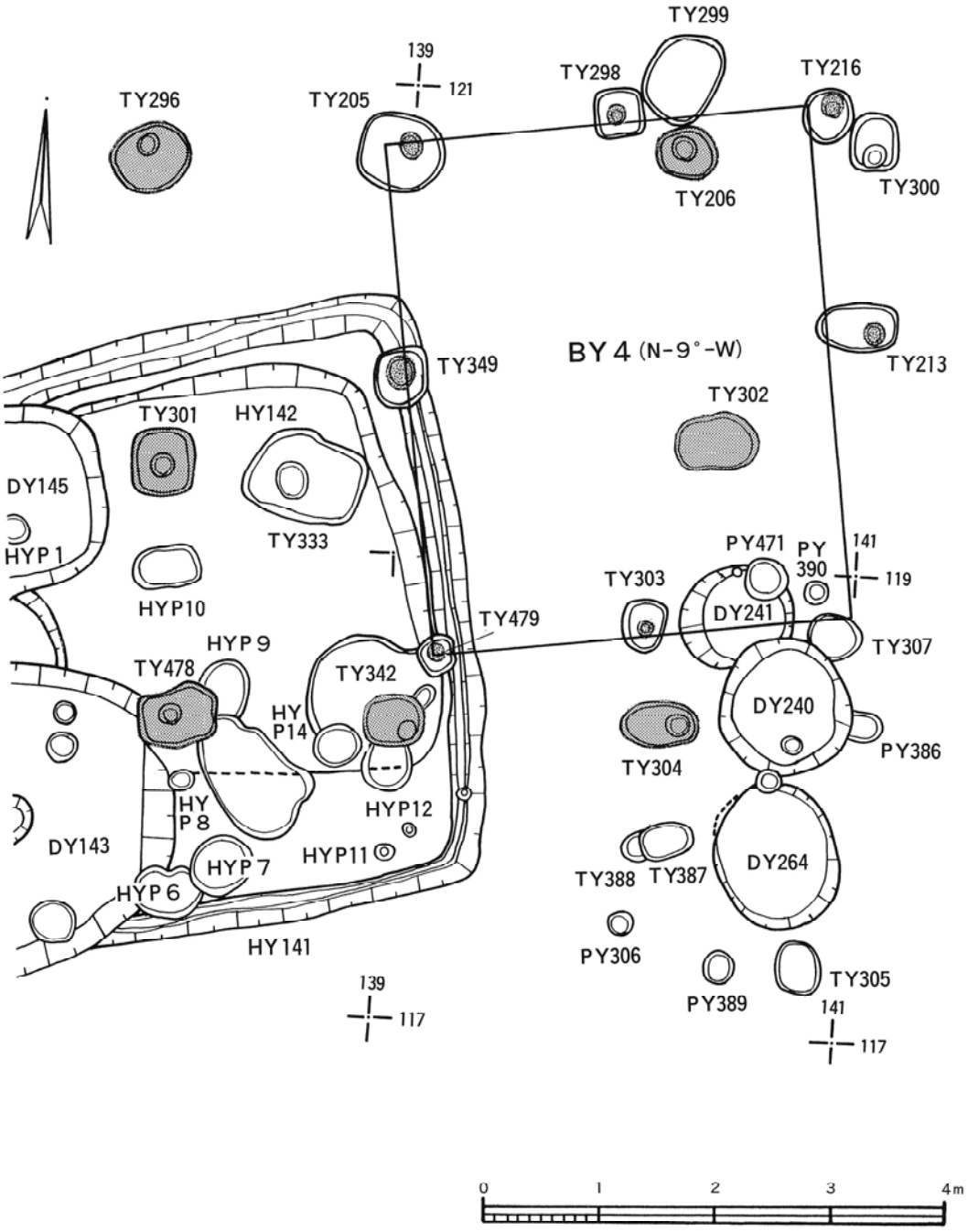
桁行南北２間（1.50m×1.90m）の小規模な建物である。ＢＹ37や34，35と同一方向に構築されている。馬屋（厩）的機能を有すものとみたい。第Ⅲ次調査区，西北部に位置する。

○ＢＹ37建物跡（第16図）

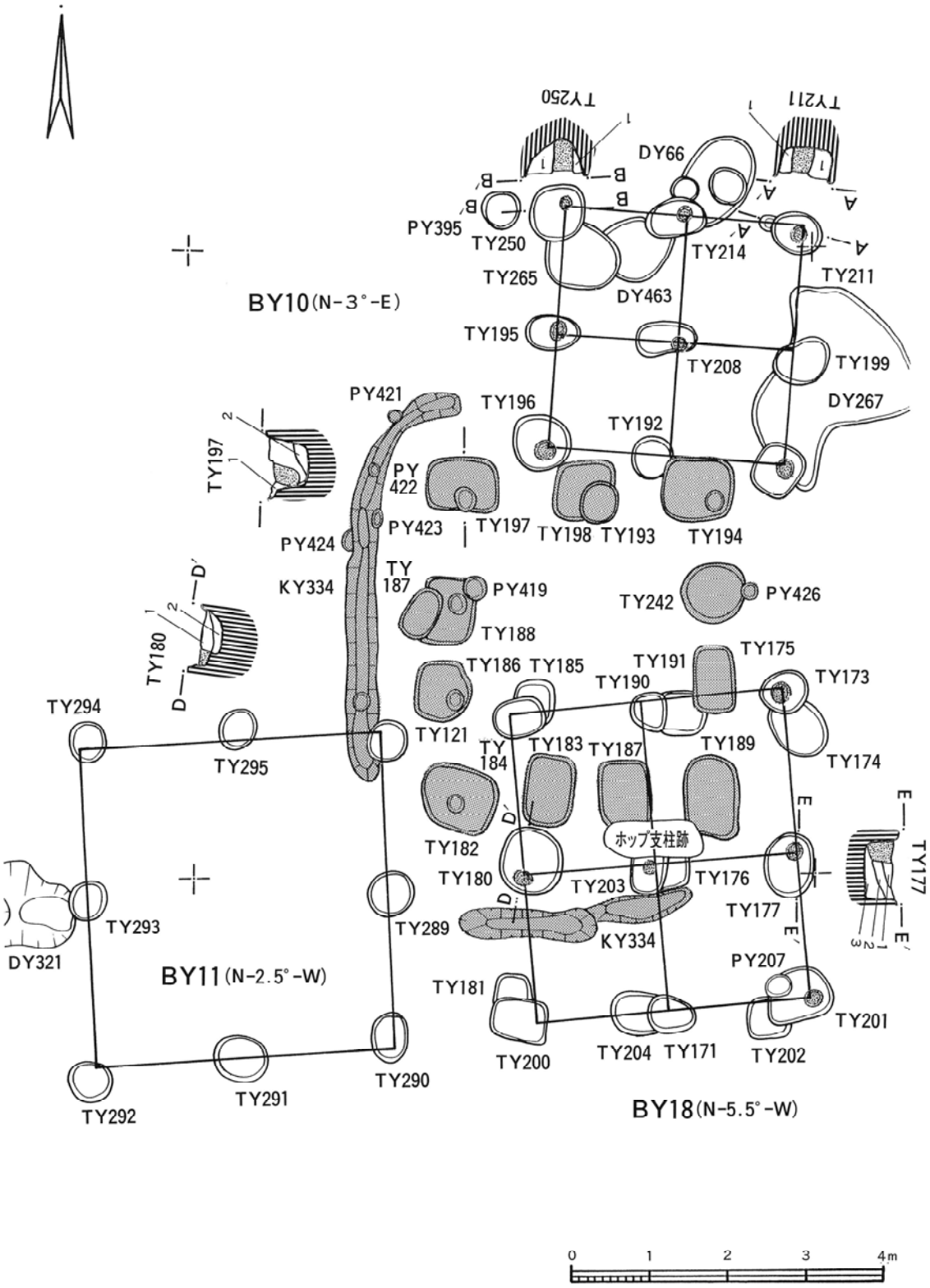
先のＢＹ36建物の東側に位置し，ＢＹ34と重複する。桁行南北３間（・1.50m×・1.80m×・1.80m）と推測される。ＢＹ36，37をⅡ期に伴なう馬屋（厩）と考えたい。

○ＤＮ262井戸跡（第６図）

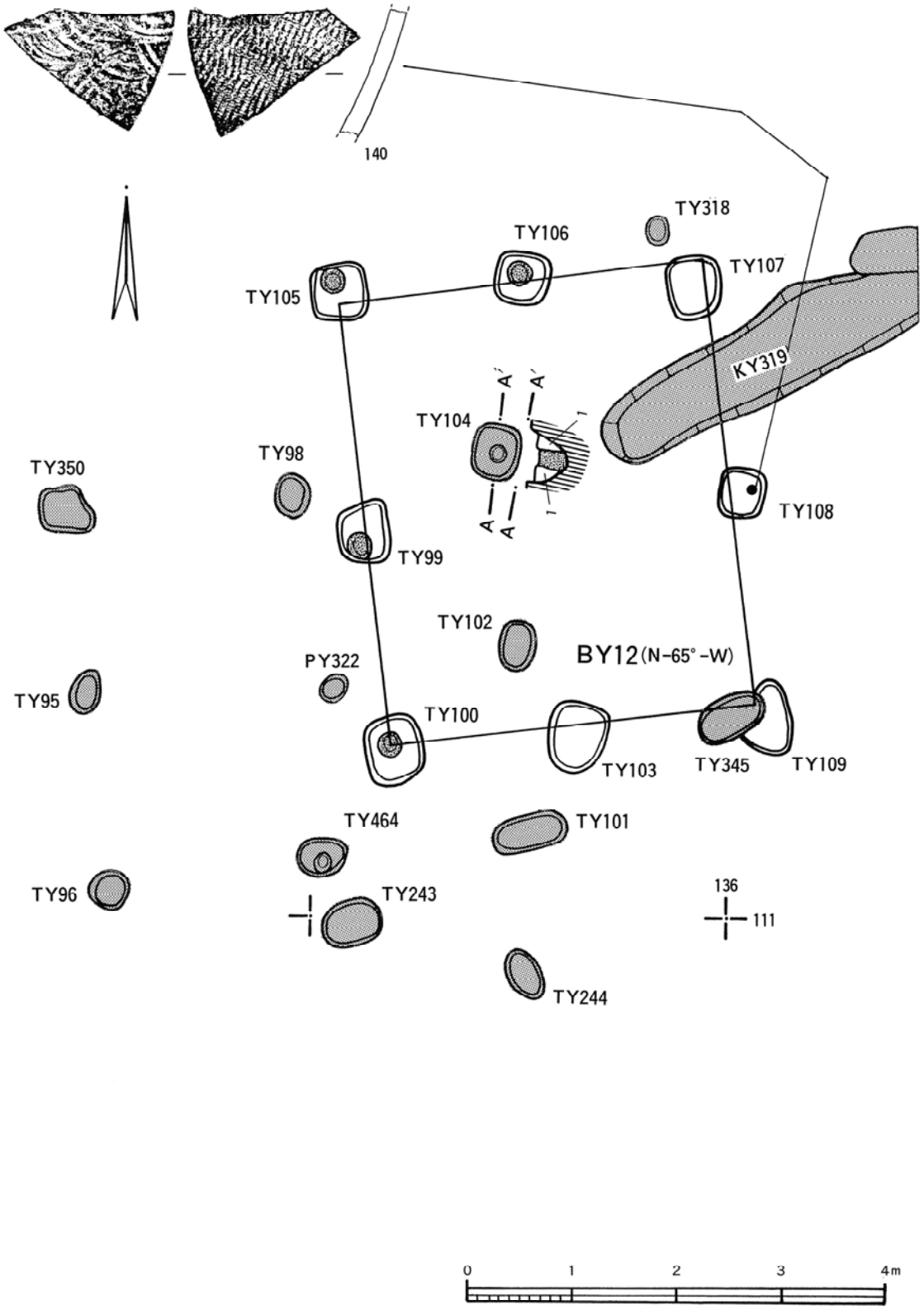
柵列の外側，北方に位置しＨＹ259と重復する。平面形状は方形状を呈し１辺１m×１mを測る。深さは1.20mあり，覆土は人工推積状況を呈し，焼土や炭化物が多量に混入していた。他に



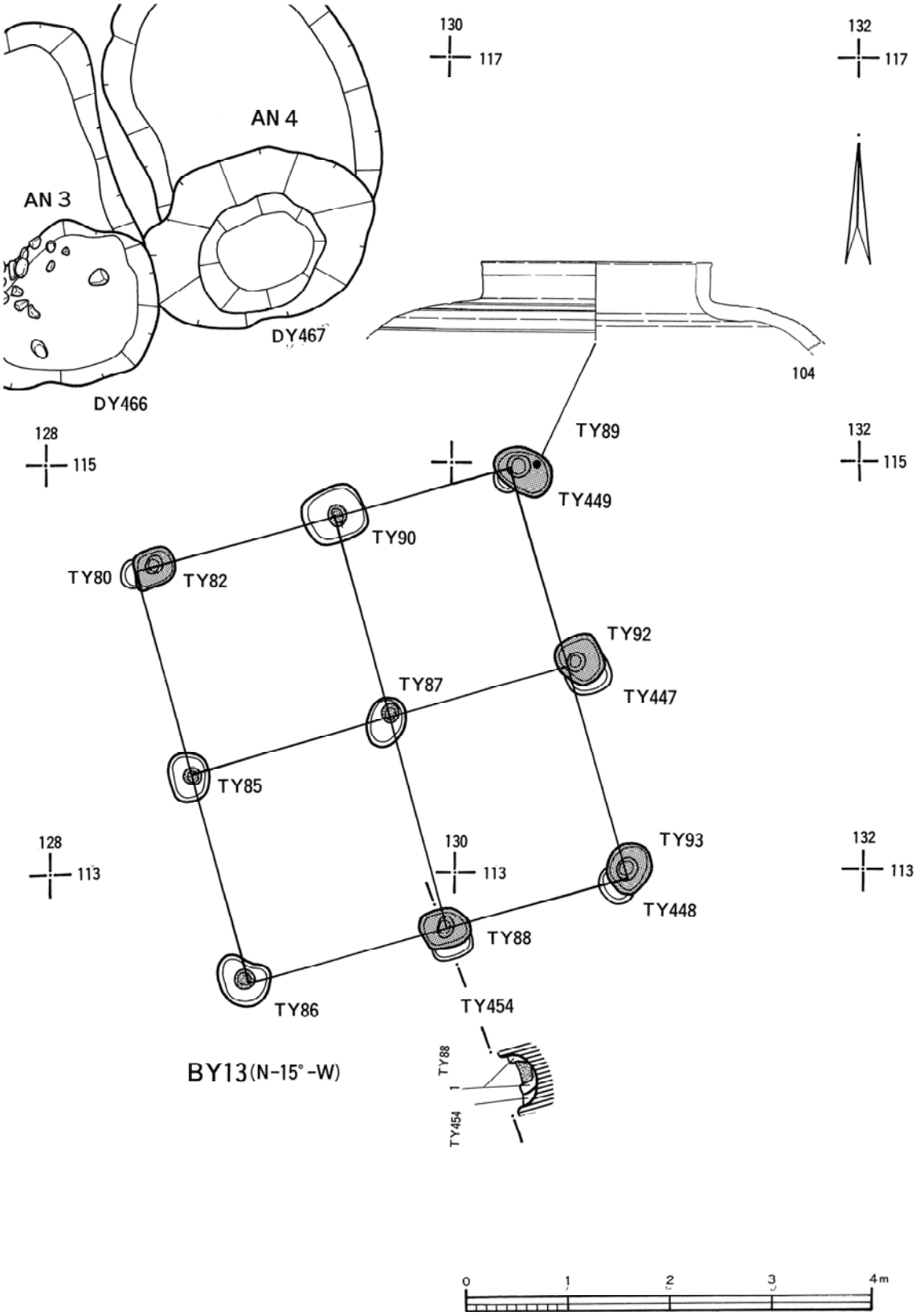
第10図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY４平面図(Ⅱ期)(4)



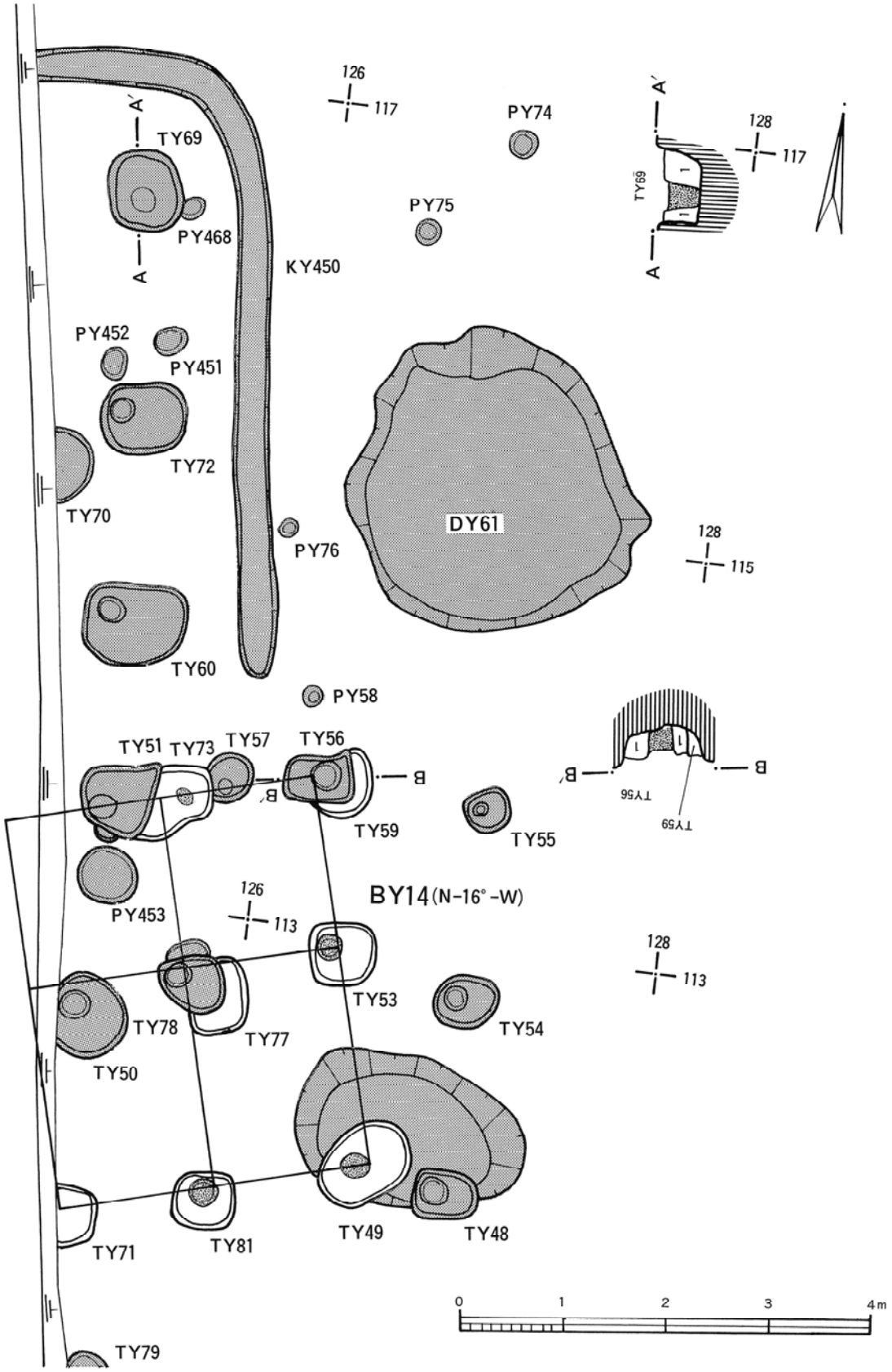
第11図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY10・11・18平面図(Ⅱ期)(5)



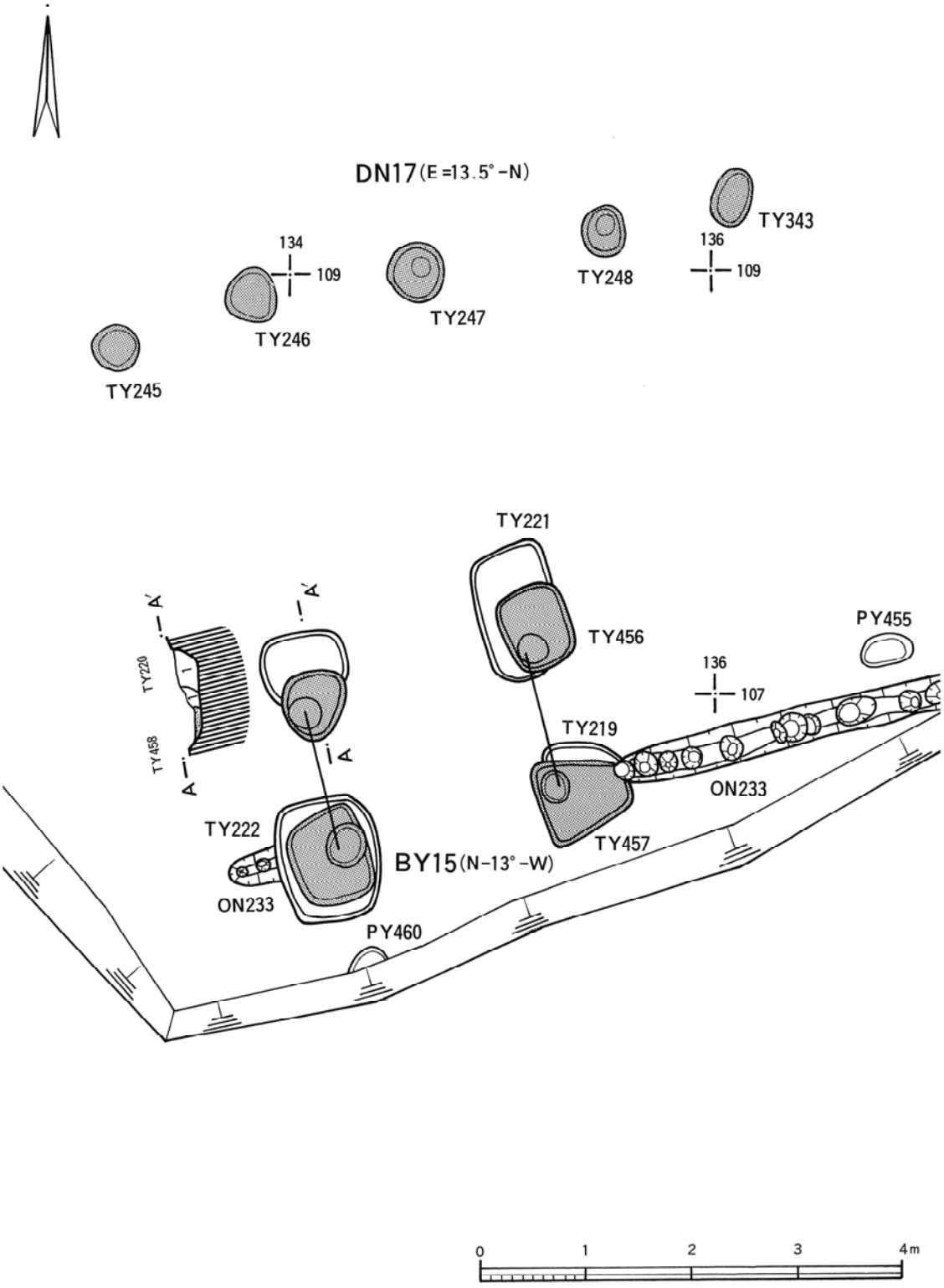
第12図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY12平面図(Ⅱ期)(6)



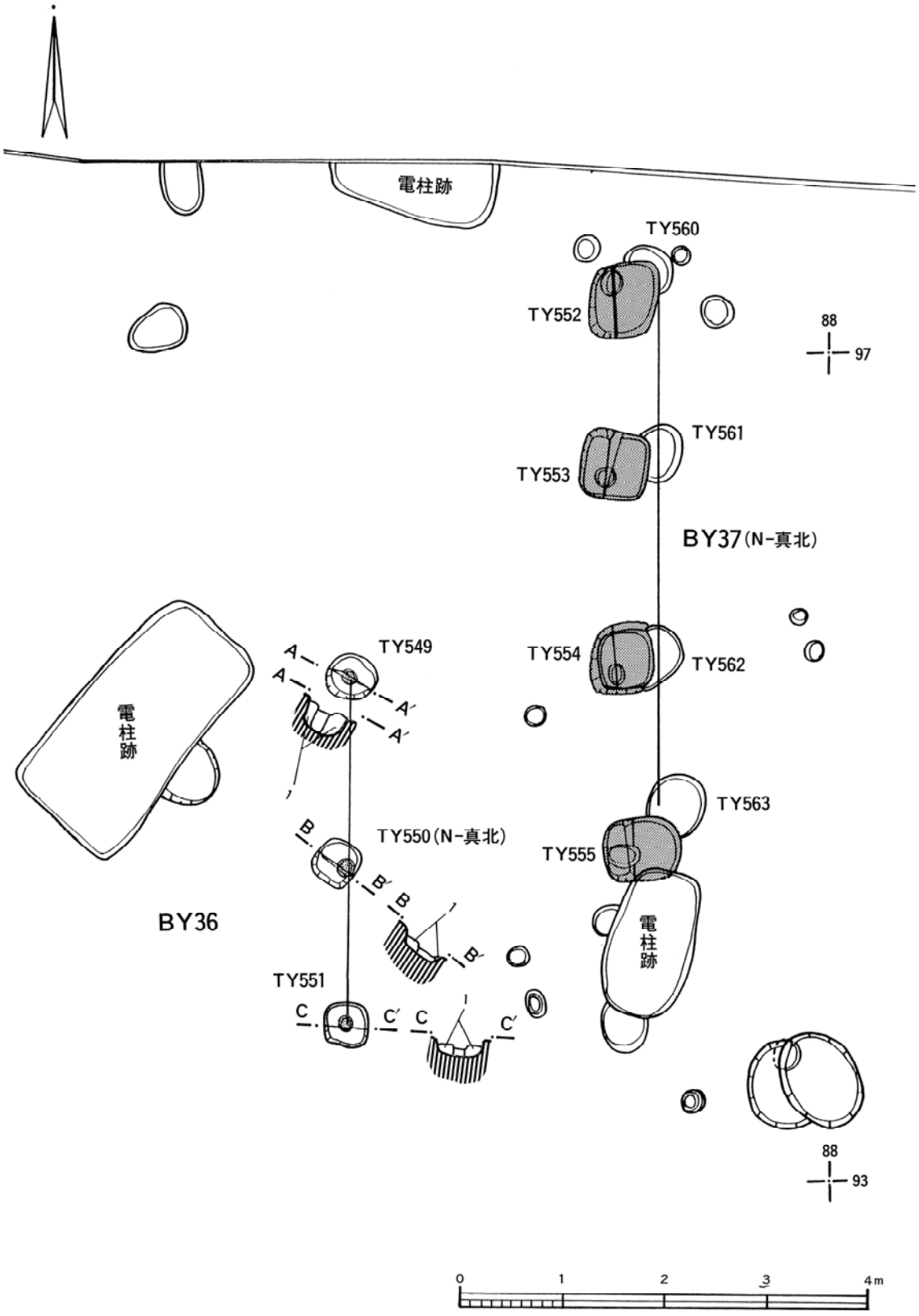
第13図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY13平面図(Ⅱ期)(7)



第14図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY14平面図(Ⅱ期)(8)



第15図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY15平面図(Ⅱ期)(9)



第16図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査BY36・37平面図(Ⅱ期)(10)

底部施設に使用したと思われる河原石６点も混入していた。覆土からは土師器甕形土器片16点が認められた。井戸の周辺施設は認められなかった。井戸は意図的に埋めた状況を示す。

○ＫＹ 340 溝状遺構（付図１）

南から北に延び，確認した長さは23ｍであった。幅は20～50cmを測り，南に行くに従って狭くなる。深さは５～10cmと浅く，遺物は認められなかった。排水を目的とした溝跡であろう。

○ＯＮ 233 柵列跡（付図１・第六，七図版）

Ⅱ，Ⅲ期の主要遺構を区画する柵列であり，全体の約半分が確認されたと想定される。幅が平均約30cmに掘り込んだ溝内に密に柱を配するもので，後述する他の柵列も同様な構築である。

○ＯＮ 548 柵列跡（付図２）

第Ⅲ次調査区より確認された。ＯＮ 233 と同様に，Ⅱ・Ⅲに亘って存在したと想定される柵列である。確認された位置から判断して，官衙跡の外郭線と推測される。

○ＯＮ 511 柵列跡（付図３，第十四図版）

第Ⅳ次調査区より確認され，南北に延びる。長さは23ｍあり，セクションの観察から２期に亘っている。西側が最初の柵列で，Ⅱ期に相当，次いでこれを埋め戻して構築した東側がⅢ期に相当すると推測される。この柵列には長さ1.5ｍに亘り，ピットが切れている箇所があり，出入口と想定される。柵列は東側の主要遺構を遮断する目隠し的施設であろう。

４．Ⅲ期の遺構（第17図～第30図，第三図版～第七図版）

基本的にはⅡ期の建物群と同じであるが，建て替えを行った３棟の大型建物のうちＢＹ８は１間分，南に移動し，中央のＢＹ19と東のＢＹ９に，南１間に対し間仕切りを有すようになる。

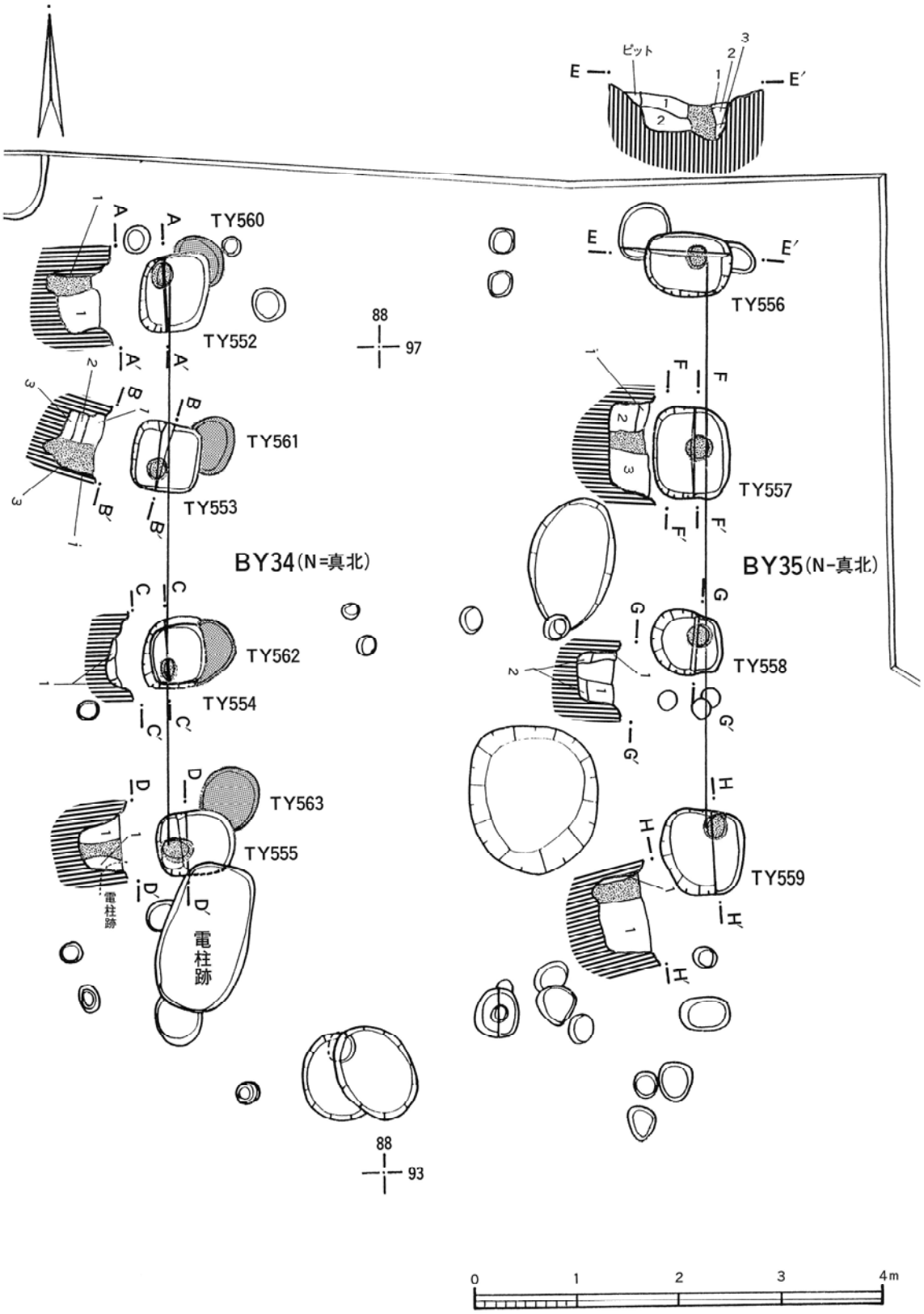
東側の建物もある一定の間隔を保って３棟，南門寄りの建物は南北長から東西長になり，南門跡間に掘立柱列が新たに伴う。さらに西側に溝を有す南北４間の建物の存在やⅠ期には存在しなかった柵列外にも建物が出現し，Ⅲ期に入り，広域に建物群が配置されたことを示している。井戸もＯＮ 260，261 の２基が加わる。第Ⅲ次調査区でも溝を有す建物ＢＹ33が確認された他にＢＹ34，35の廐がある。第Ⅳ次調査区では，ＯＮ 571 東側が付随する。以下，各遺構群について述べる。

○ＢＹ８建物跡（第21図，第三図版）

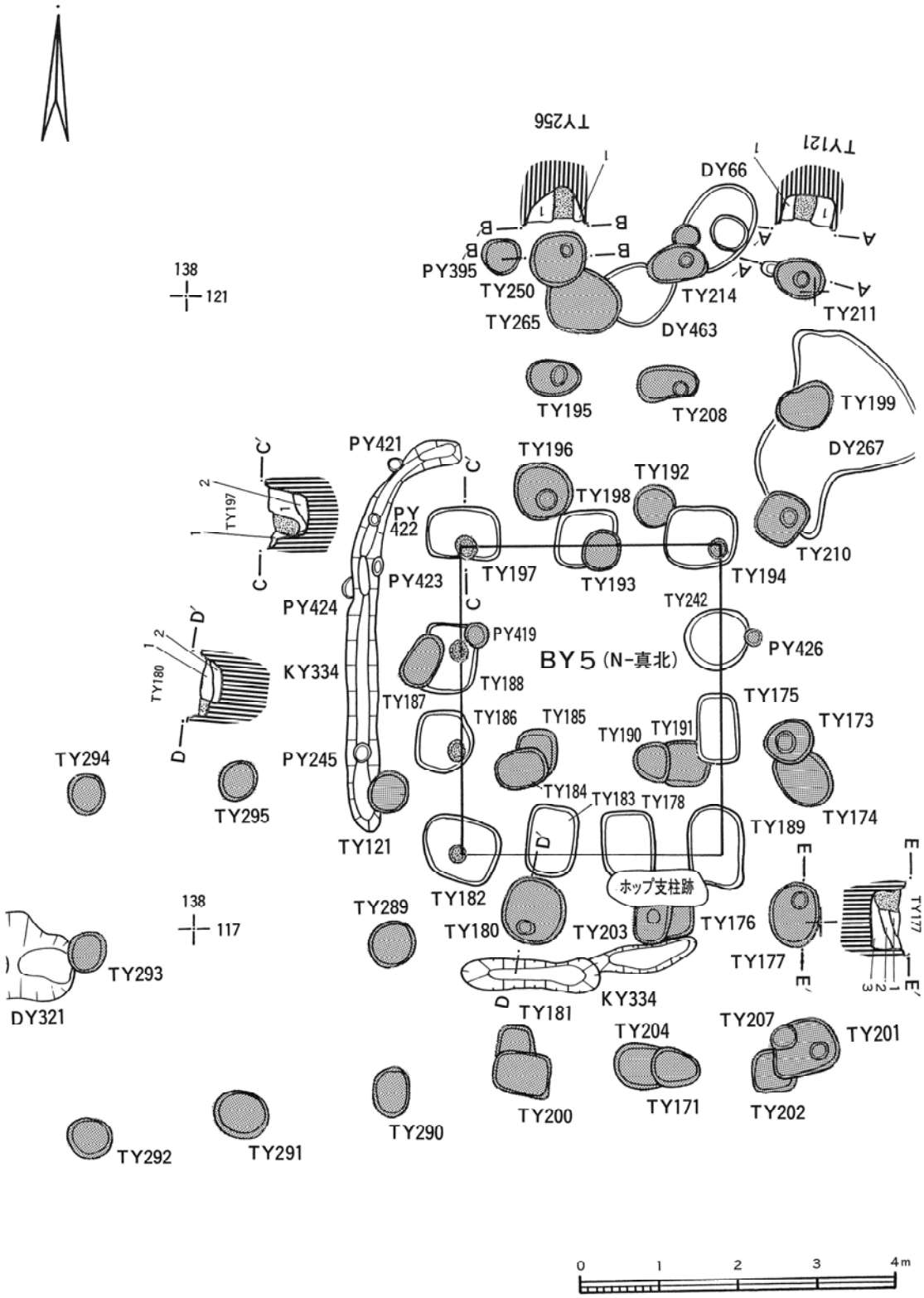
Ⅰ期の建物より，南に１間分移動している。桁行南北４間（•2.10ｍ×•2.10ｍ×1.80ｍ×2.36ｍ），梁行東西３間（2.10ｍ×1.20ｍ×1.20ｍ）である。Ⅰ期のＢＹ１と重複する。

○ＢＹ９建物跡（第22図，第三図版）

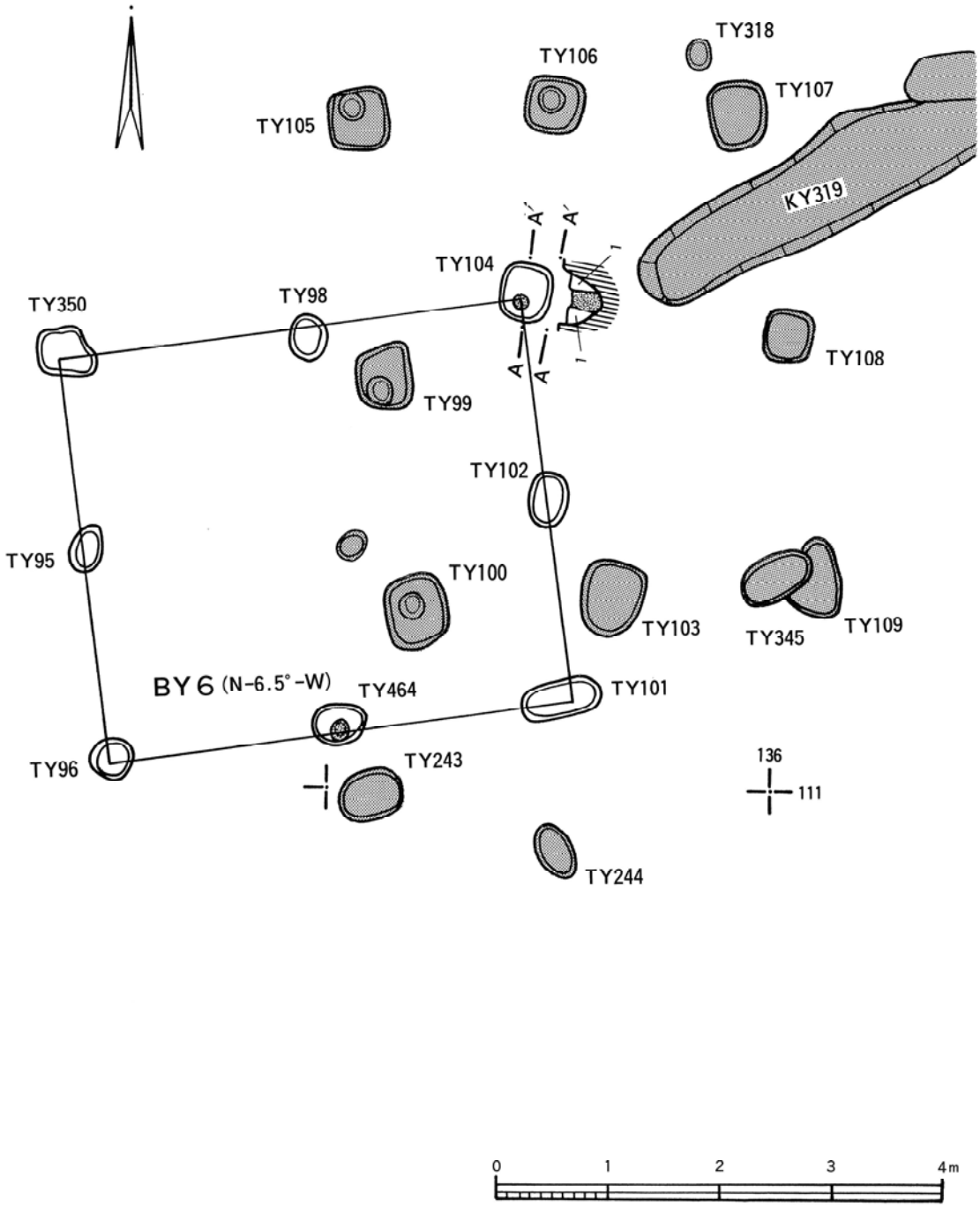
Ⅰ期建物ＢＹ３と重複する建物である。長円形状の掘り方をⅢ期は呈す。Ⅱ期の柱を抜く際に生じた掘り方と想定される。西側の掘り方はⅡ期とあまり大差はない。南１間に対して間仕切



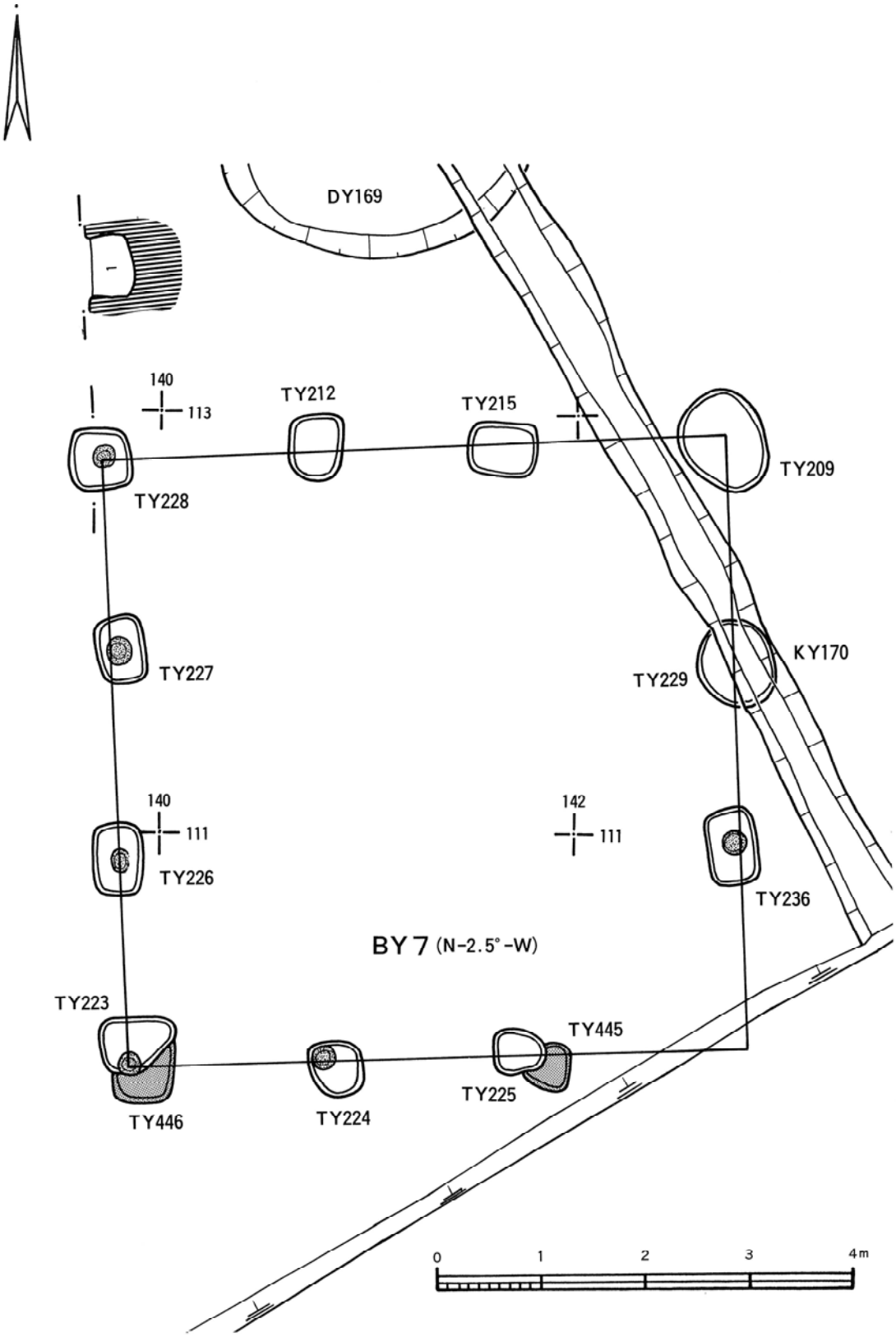
第17図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査BY34・35平面図(Ⅲ期)(11)



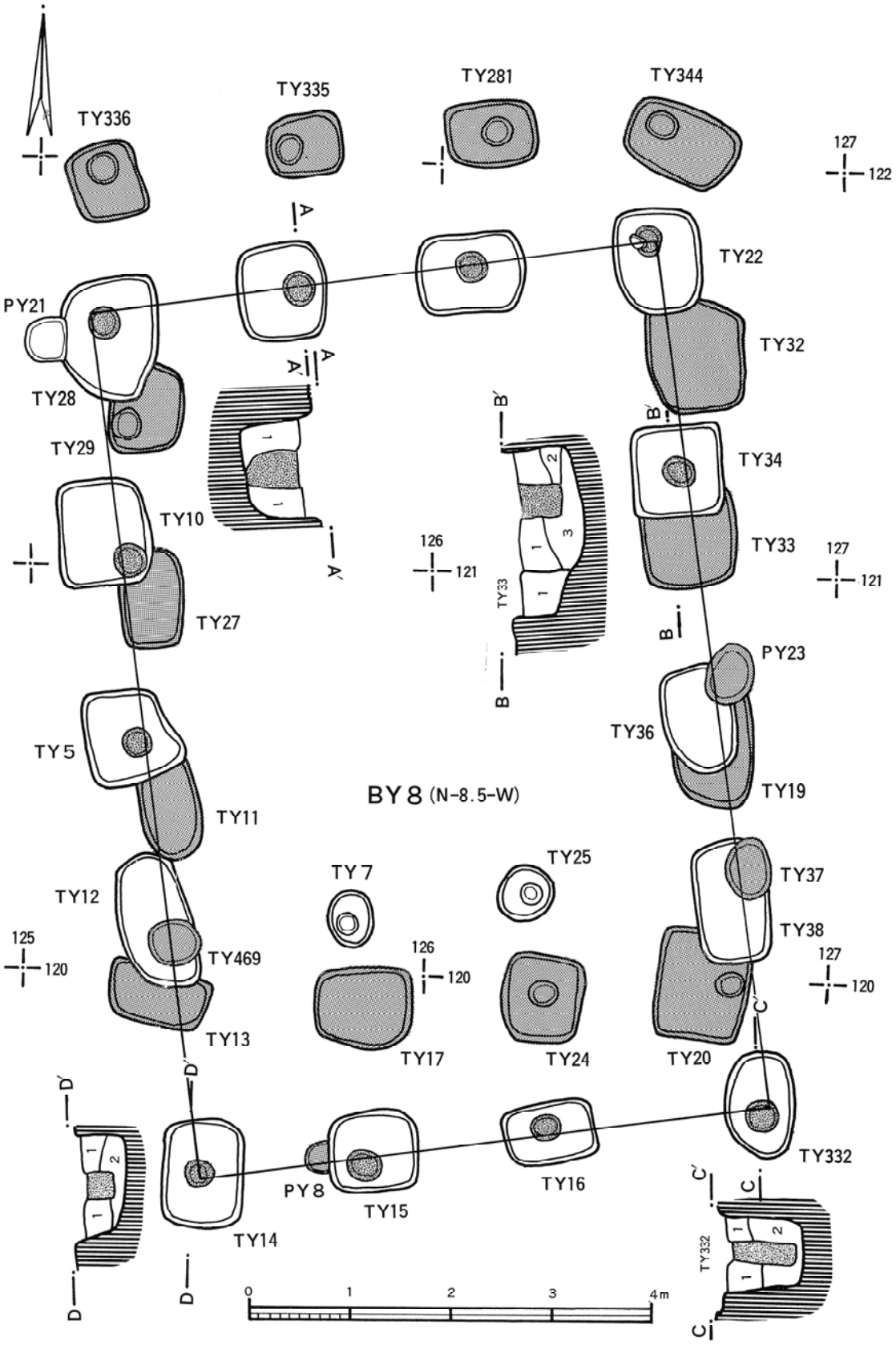
第18図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY５平面図（Ⅲ期）(12)



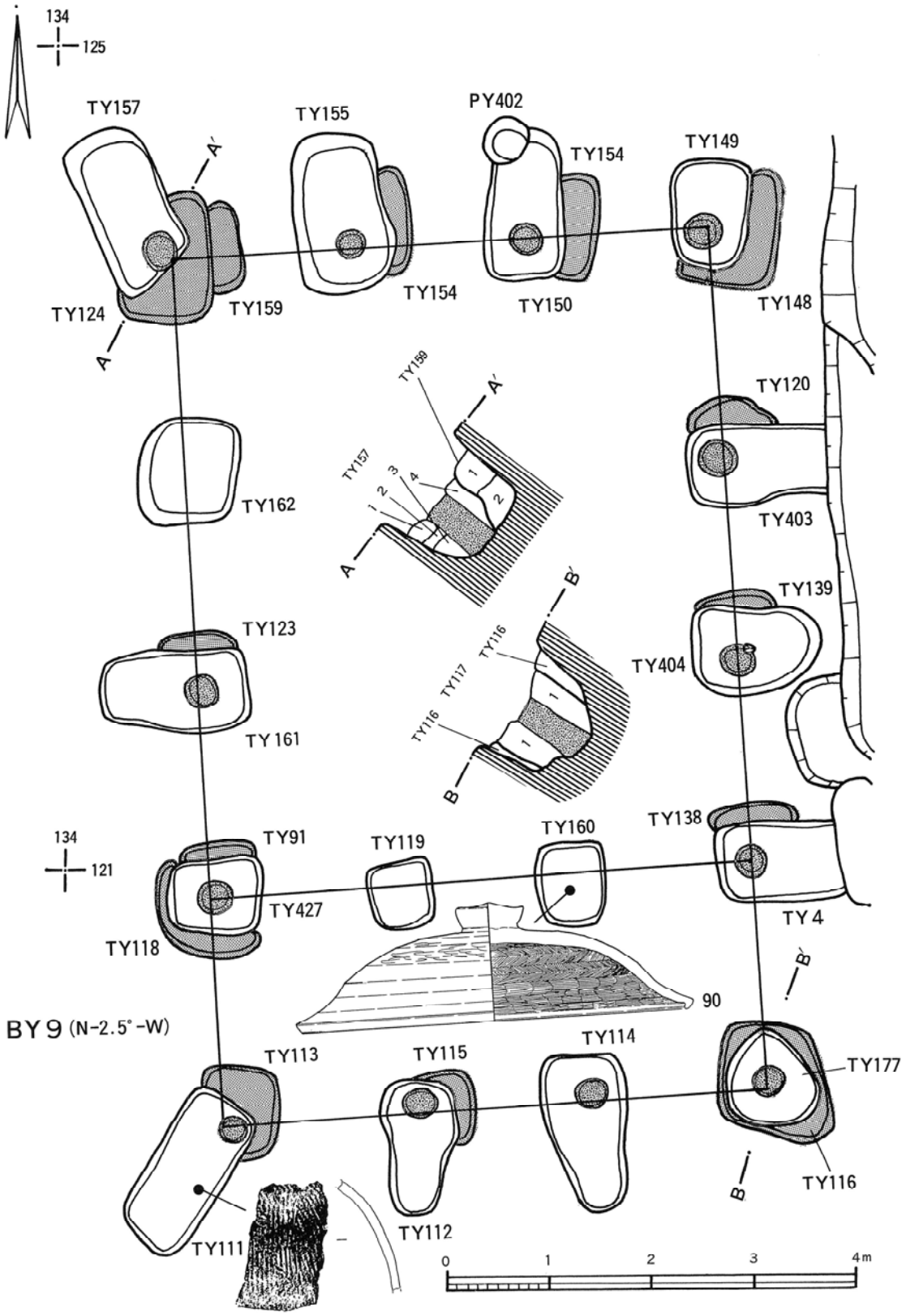
第19図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY６平面図(Ⅲ期)(13)



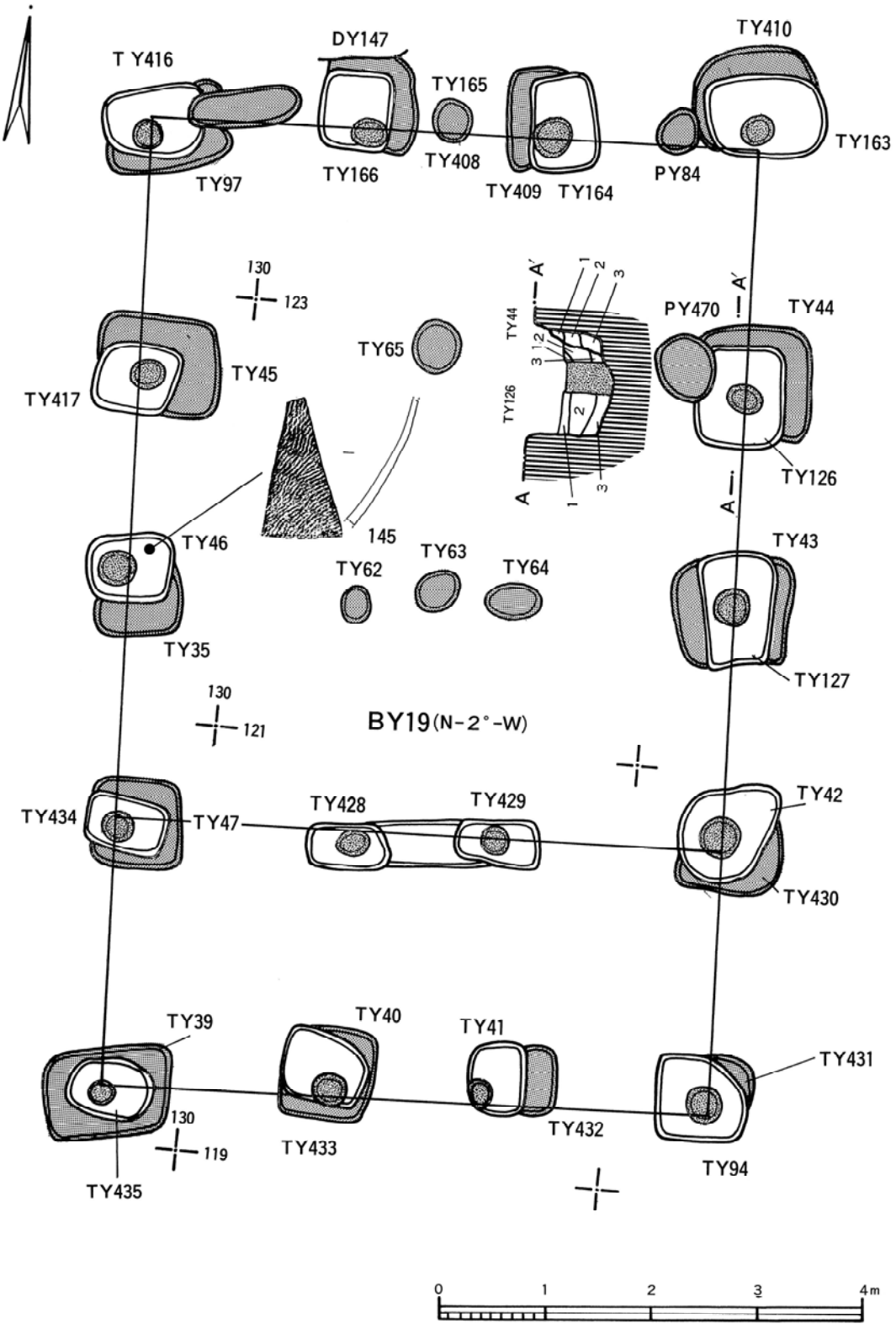
第20図　大浦Ｂ遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査ＢＹ７平面図(Ⅲ期)⑭



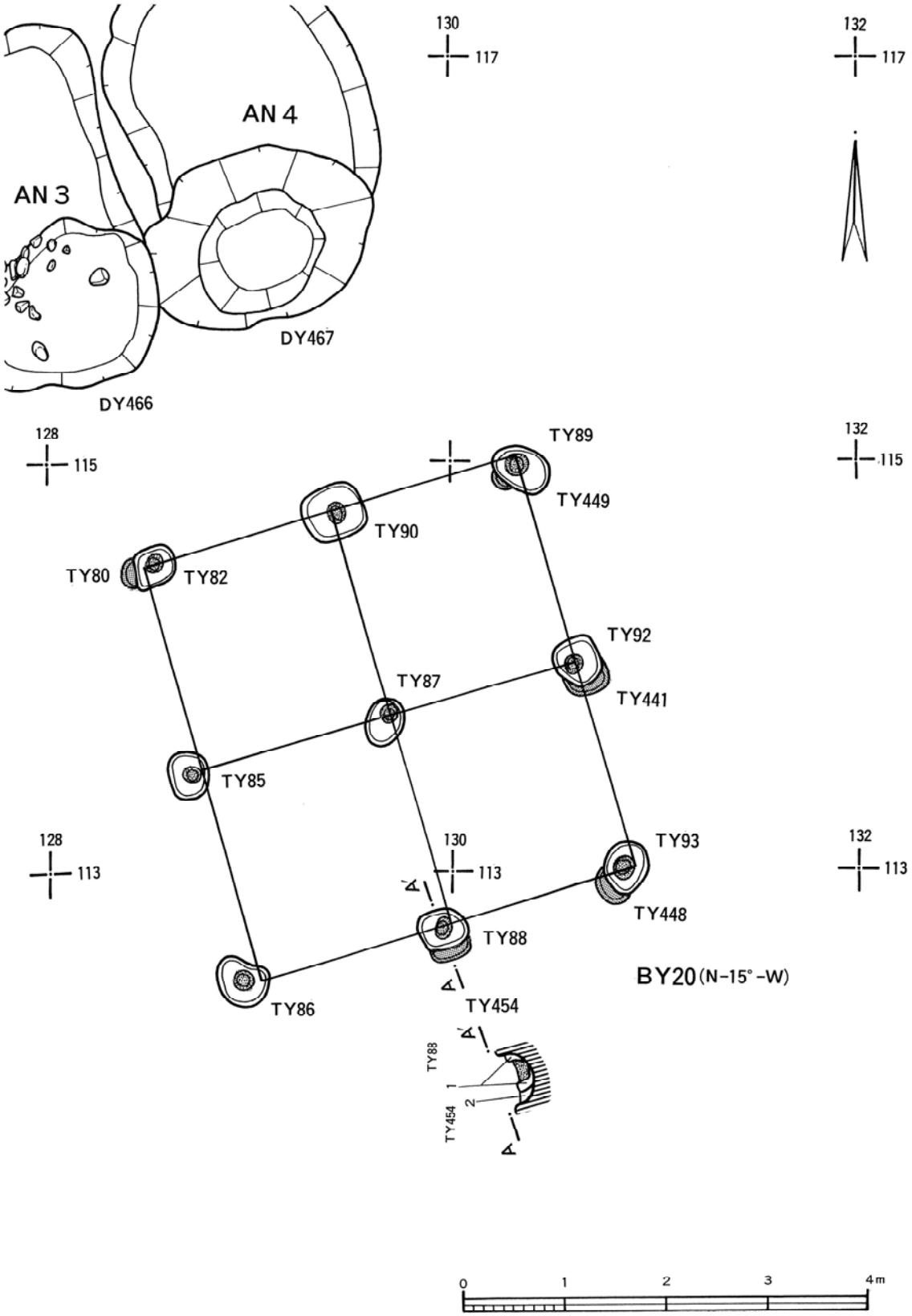
第21図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY８平面図(Ⅲ期)(15)



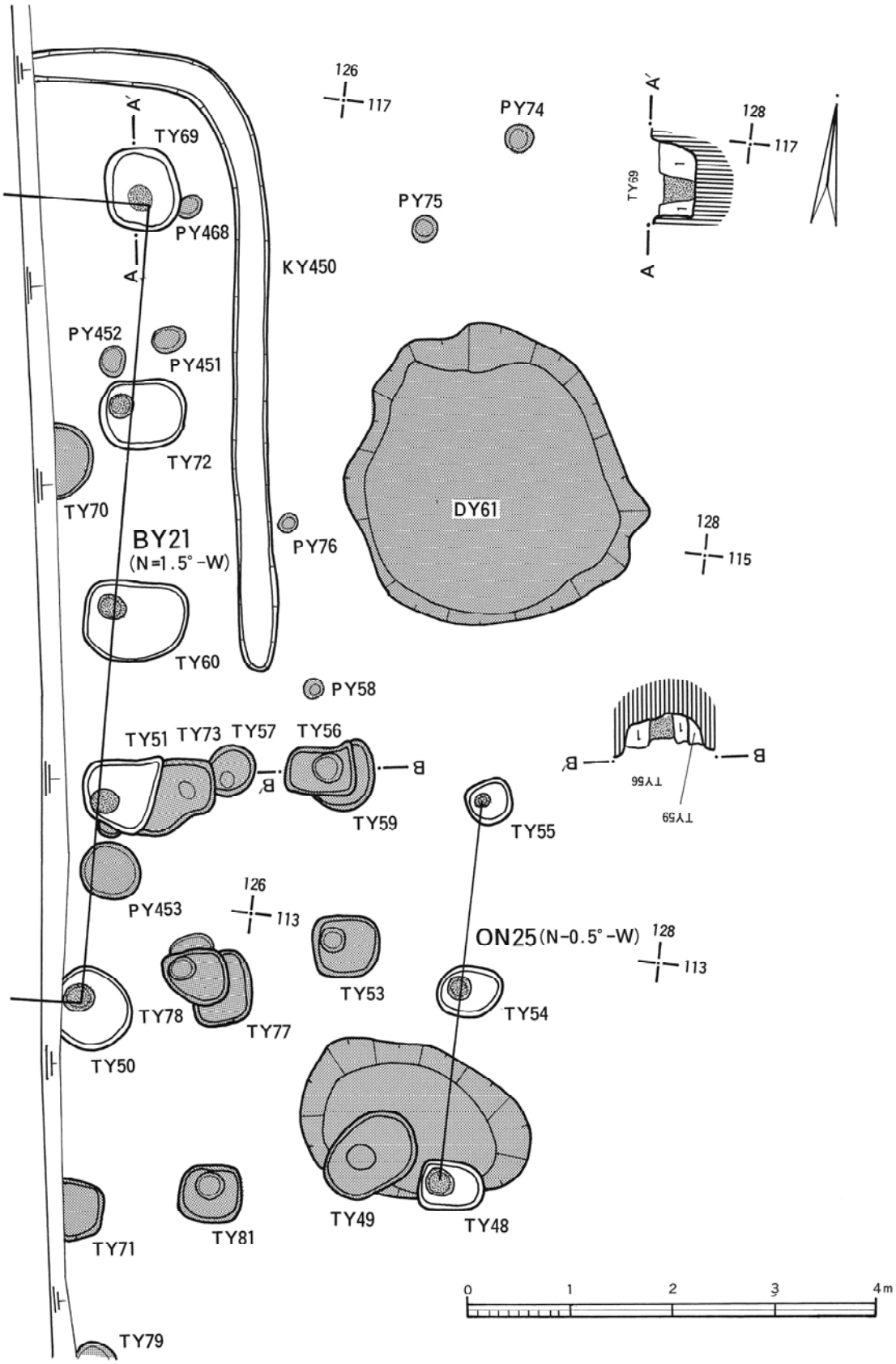
第22図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY９平面図(Ⅲ期)(16)



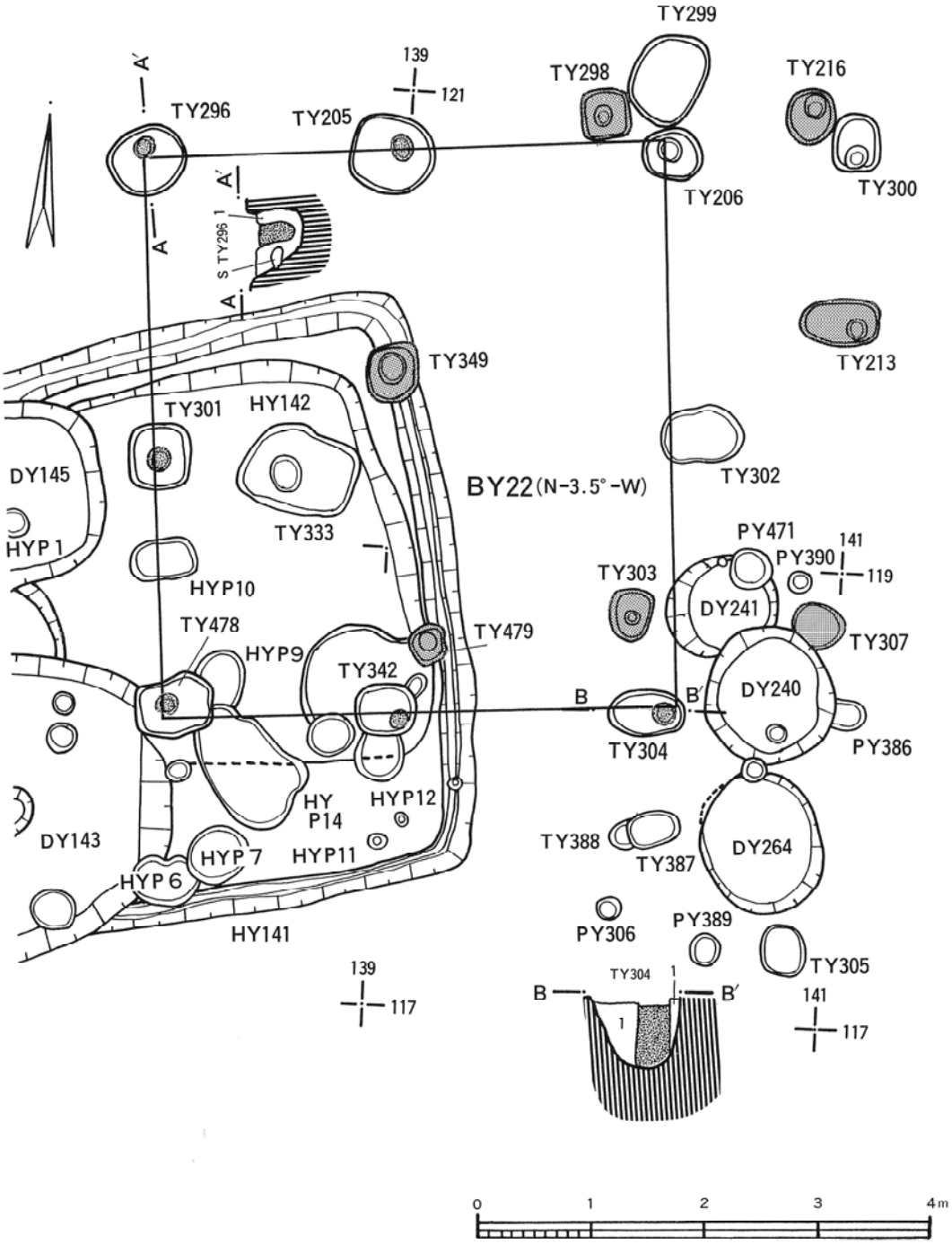
第23図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY19平面図(Ⅲ期)(17)



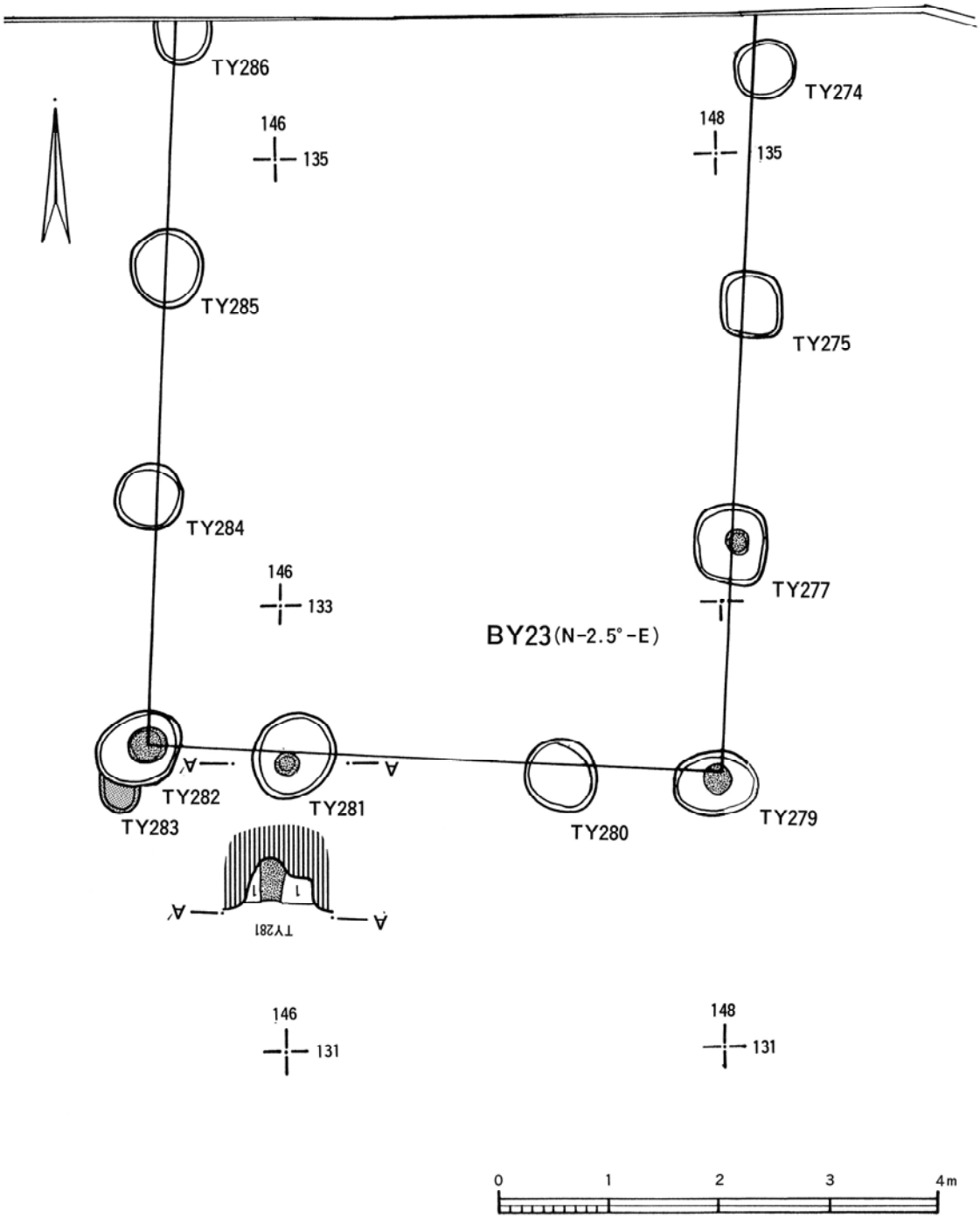
第24図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY20平面図(Ⅲ期)(18)



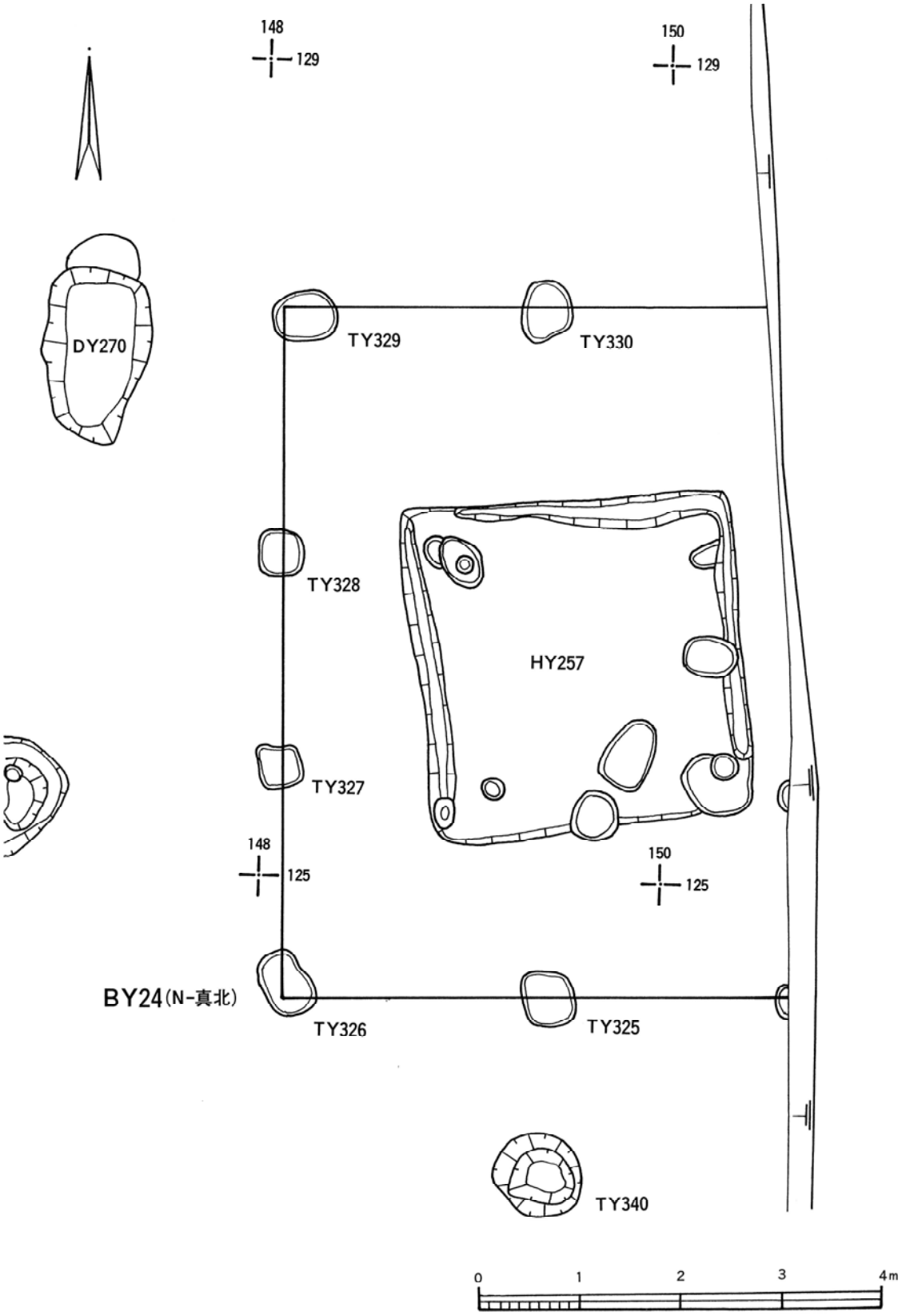
第25図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY21・ON25平面図(Ⅲ期)(19)



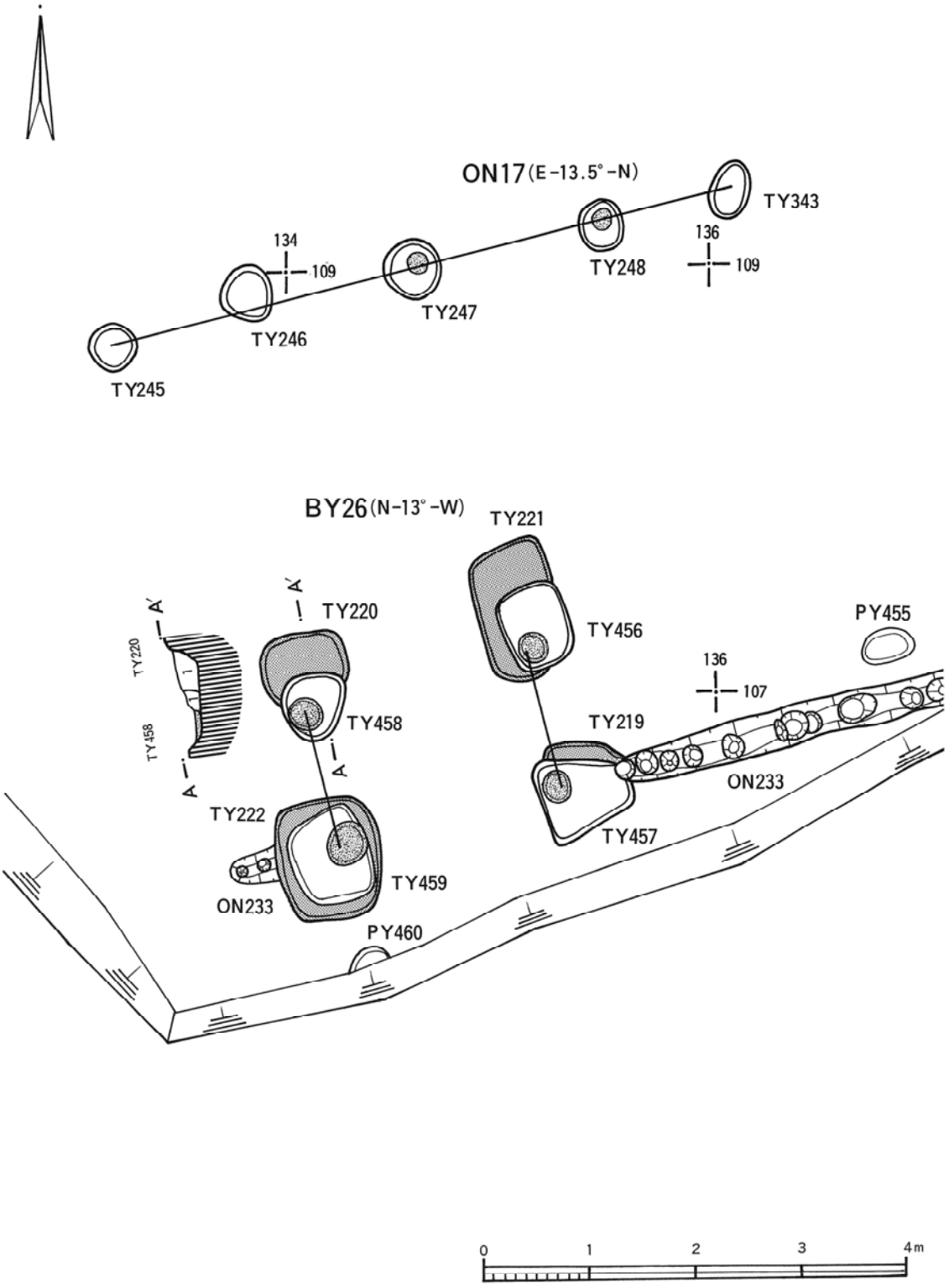
第26図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY22平面図(Ⅲ期)(20)



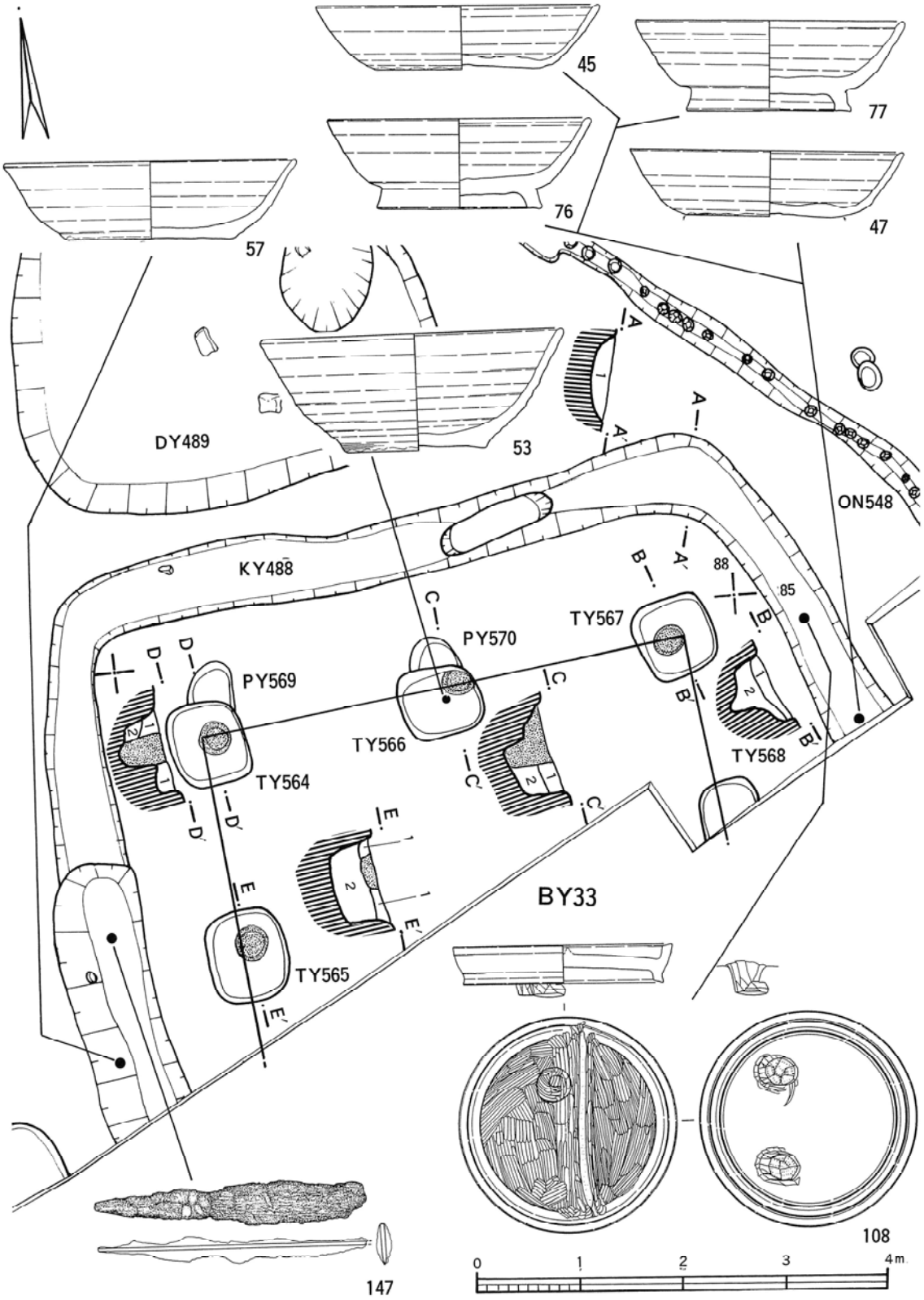
第27図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY23平面図(Ⅲ期)(21)



第28図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY24平面図(Ⅲ期)(22)



第29図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY26・ON17平面図(Ⅲ期)(23)



第30図　大浦B遺跡第Ⅲ次調査BY33平面図(Ⅲ期)(24)

りを有し，桁行は南北４間（2.20m×2.10m×2.00m×2.20m），梁行東西３間（1.70m×1.70m×1.80m）の建物である。図で示めした土師器内黒蓋がＴＹ160の埋土から出土している。

この遺物は編年表のⅠ期に分類されるＣ３類土器である。他の柱穴跡群埋土からも，精査の段階で出土している。土師器甕形土器片，土師器坏片，須恵器甕片の順で少量認められた。

○ＢＹ19建物跡（第23図，第三図版）

Ⅰ期のＢＹ２と重複する建物である。Ⅰ期の掘り方同様に方形状であるが，Ⅰ期よりも一回り小さい掘り方である。西北コーナー部の柱穴ＴＹ146は，ホップ支柱穴によって西側を掘り込まれている。桁行南北４間（2.50m×2.50m×1.85m×2.20m），梁行東西３間（1.90m×1.70m×2.10m）南１間に間仕切り建物である。ＴＹ46より，Ｆ類が出土している。

○ＢＹ５建物跡（第18図，第四図版）

桁行南北３間（1.30m×1.20m×1.30m），梁行東西北側２間（•1.50m×•1.60m），南側梁行東西３間（•1.10m×•0.80m×•1.10m）の間尺を有す建物である。西方及び南方に溝を配す建物であり，ＫＹ344・335が付随すると想定したい。溝は幅30cm，深さは20~30cmを有し，排水路と考えられる。

○ＢＹ６（第19図）

桁行南北２間（•1.80m×•1.80m），梁行東西２間（•2.10m×2.10m）の規模を有す建物であり，Ⅱ期のＢＹ12と一部重複して構築されている。Ⅱ期のＢＹ12と比較すると長軸方向が南北方向から東西方向へと変化している。柱痕跡はＴＹ104とＴＹ464の２箇だけしか確認されなかった。柱痕跡は約20cmでＢＹ８・９・19の大型建物群の約半分の規模である。

○ＢＹ７建物跡（第20図，第五図版）

柵列の南東コーナー部内に位置する建物跡である。東方を中世（Ⅴ期）の溝跡ＫＹ170によって，建物跡を構成するＴＹ229が削平されている。桁行南北３間（1.96m×2.00m×1.90m），梁行東西（•2.10m×•1.86m×•1.86m）に構築されている。

○ＢＹ20建物跡（第24図，第五図版）

Ⅱ期のＢＹ13と重複する建物であり，規模，方向ともⅡ期の建物とⅢ期の建物の相違はない。したがって，重複関係を明確に確認出来なかった柱穴もあった。桁行南北，（1.90m×2.04m），梁行東西２間（2.08m×2.15m）の総柱建物である，倉庫と考えられる。

○ＢＹ21建物跡（第25図）

調査区の西方部に位置し，建物の東側一部を確認したにすぎない。当然，西方に延びる建物である。今回確認した間尺を記しておきたい。桁行南北４間（2.00m×1.90m×1.90m×2.00m），梁行東西は不明としておく。４間を有す建物は大型建物ＢＹ８・９・19に認められる間尺であり，このＢＹ21も大型を呈す建物と考えられる。ＫＹ450も付随すると推測される。

○ＢＹ22建物跡（第26図）

桁行南北（2.16m×2.76m），梁行東西（2.34m×2.10m）の間尺である。ＨＹ141，142を埋め戻して後に構築された建物であり，Ⅱ期のＢＹ４と重複し，柵列北東コーナー部にある。

○ＢＹ23建物跡（第27図）

調査区北東部で確認され，柵列の外に位置す。北方の調査区外に延びる間尺であり，全容は確認できなかった。現況の間尺を記す。桁行南北３間（2.16m×・2.10m×・2.10m），梁行東西（・1.26m×・2.30m×1.26m）で，ＴＹ280とＴＹ281の間尺が長い待徴を有す。

○ＢＹ24建物跡（第28図）

柵列の外側に位置し，東方に延びる。桁行南北３間（・2.30m×・2.10m×・2.30m），梁行東西は現況で２間（・2.60m×・2.60m）である。ＨＹ257を埋め戻した後，構築している。

○ＢＹ26南門跡（第29図，第六図版）

Ⅱ期のＢＹ15の後に立て替えられた四脚南門である。Ⅱ期の掘り方よりも小規模な掘り方である。門尺は南北1.20m（西側），東側も同様であり，柱痕跡は平均30cmを測る。

○ＢＹ33建物跡（第30図，第十二図版）

第Ⅲ次調査区の南側に位置し，ＫＹ488の溝跡によって区画された建物である。梁行東西２間（2.10m×2.40m），桁行南北は１間だけの確認で，間尺は2.06mを測る。ＴＹ566からはＢ８類の須恵器坏が出土している。溝跡からも二面硯をはじめ多量の遺物が確認された。図参照

○ＢＹ34建物跡（第17図，第十二図版）

第Ⅲ次調査区北側より確認された。間尺は南北等間隔で1.90mを測り３間である。ＢＹ34はⅡ期のＢＹ37と重複する。掘り方は方形状でⅡ期よりも規模が大きくなっている。

○ＢＹ35建物跡（第17図，第十二図版）

前述したＢＹ34と平行して構築され，ＢＹ34の東側に位置す。両者の間は5.30mを測る。これらの２棟の建物は馬屋（廐）と推測され，方向は真北を示す建物群である。

○ＤＮ260井戸跡（第42図，第八図版）

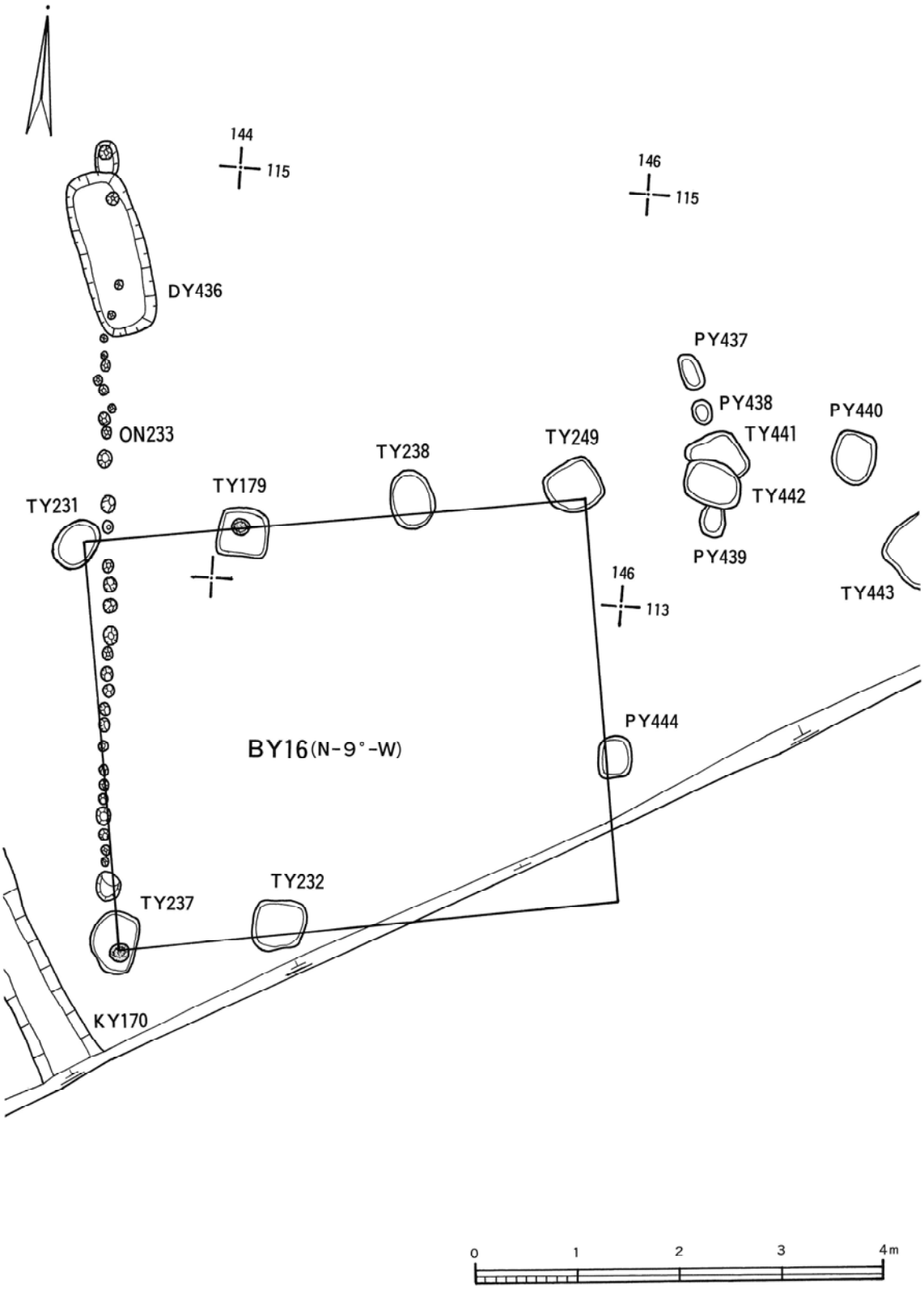
平面形状は円形状を呈す掘り方で，深さは1.5mを測る。覆土は自然推積状況であった。覆土からはＢ２類に分類した須恵器坏の他に土師器甕形土器片10点，須恵器壺片３点が出土した。

○ＤＮ261井戸跡（第42図）

先のＤＮ260の掘り方より，小規模である。底部には河原石を配した痕跡が認められた。覆土は自然推積を示し，須恵器甕形片が出土している。Ｆ類に分類される。

○ＯＮ233柵列跡（付図１・第六，七図版）

Ⅱ，Ⅲ期に亘って，主要遺構を区画した柵列である。建て替え痕跡などは確認されなかったが南門が重複しており，柵列も修復を加えながら機能したものと想定したい。



第31図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY16平面図(Ⅳ期)(25)

○ＯＮ548柵列跡（付図２）

第Ⅲ次調査区より確認された柵列である。Ⅱ・Ⅲ期に亘る柵列と推測される。調査区の南側に位置し，東西に延びている。第Ⅳ次調査の成果から，西側はまもなく終るものと考えたい。

○ＯＮ571柵列跡（付図３，第十四図版）

第Ⅳ次調査区ので東側のピット群で構成される柵列で，目隠し的な施設と推測される。

○ＯＮ17，25，掘立柱列跡（第25，29図）

ＯＮ17は東西４間（•1.20m×1.30m×•1.20m×•1.30m）を有す。位置の関係から目隠し塀と考えられる。ＯＮ25は南北２間（1.80m×1.86m）である。ＯＮ17と同様な施設であろう。

○ＫＹ355，344，450，溝跡488（第18・25・30図，第四・十二図版）

前述したようにいづれも，建物を区画する溝跡群である。Ⅱ期の建物群には見られない施設であり，Ⅲ期の特徴と言えよう。ＫＹ488は不明であるが，全周する溝跡ではない。

５．Ⅳ期の遺構（第31～41図、43図～48図）

官衙の機能を失った（廃絶）直後に構築された遺構群であり，４棟の建物跡（ＢＹ16・27・28，29），溝跡１基（ＫＹ18），土壙18基（ＤＹ，147，168，146，251，167，144，145，61，218，217，172，239，169，236，480，481，483，489），焼成遺構４基（ＡＮ１，２，３，４），土器焼成遺構２基（ＣＮ234，235）がある。

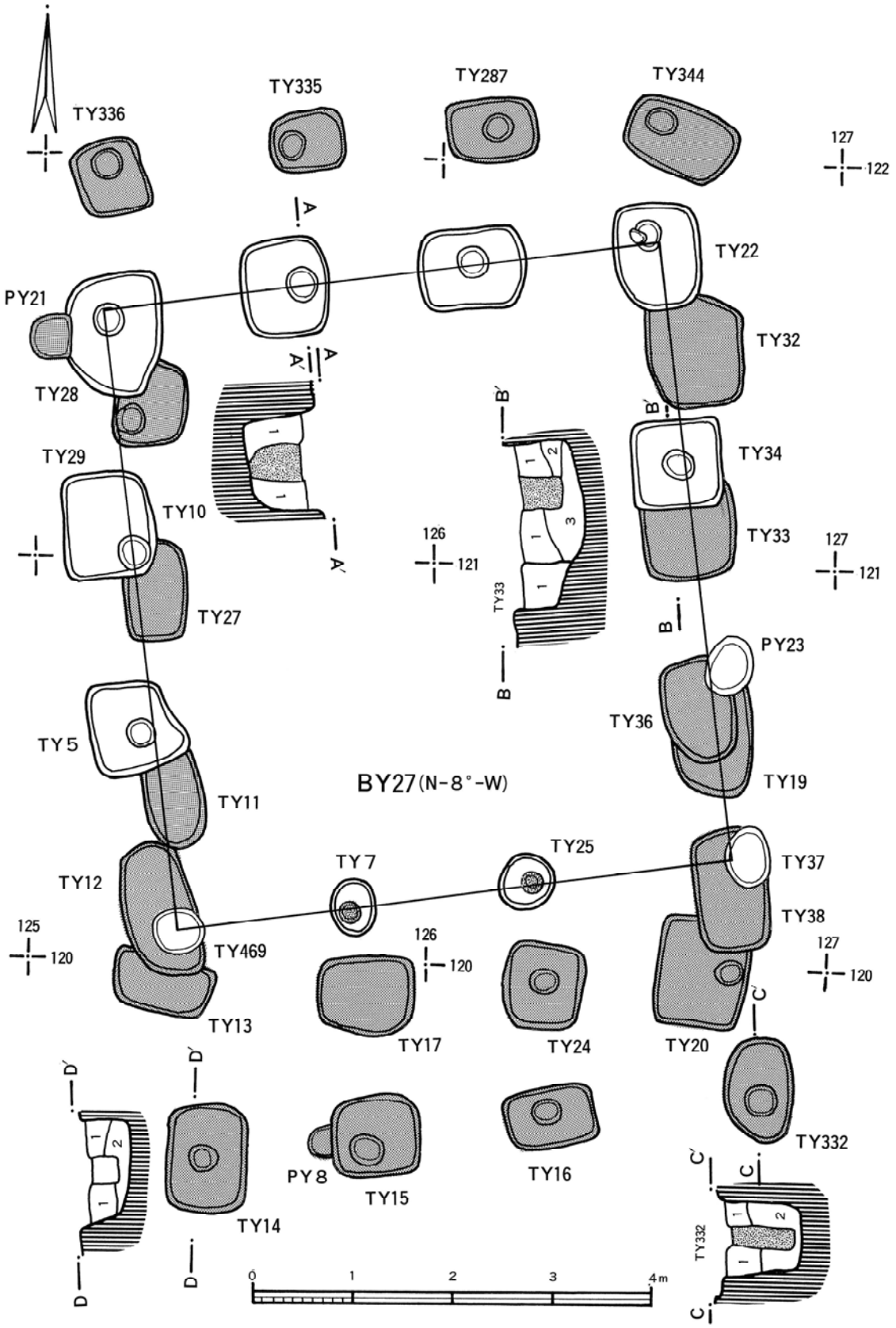
建物は先の官衙施設とほぼ同一方向を示す。柱穴の大きさや掘り方も小規模で柱痕跡も15～20cmである。各建物については第31図～34図を参照願いたい。

土壙は遺物を多量に含むものが多く認められ，出土した遺物のほとんどが土壙内で占められるのが特徴である。これらの土壙群は大型の建物であるＢＹ１，２，３，８，９，19を区画するように「コ」字形に配置され，覆土には多量の木炭や焼土が混入していた。出土した遺物については，各土壙平面図に示した。この土壙群のＡＮ２底面より，漆紙文書１点が出土している。配置関係からすれば，焼成遺構やＫＹ18もこれらの土壙群に付随する施設と思われる。

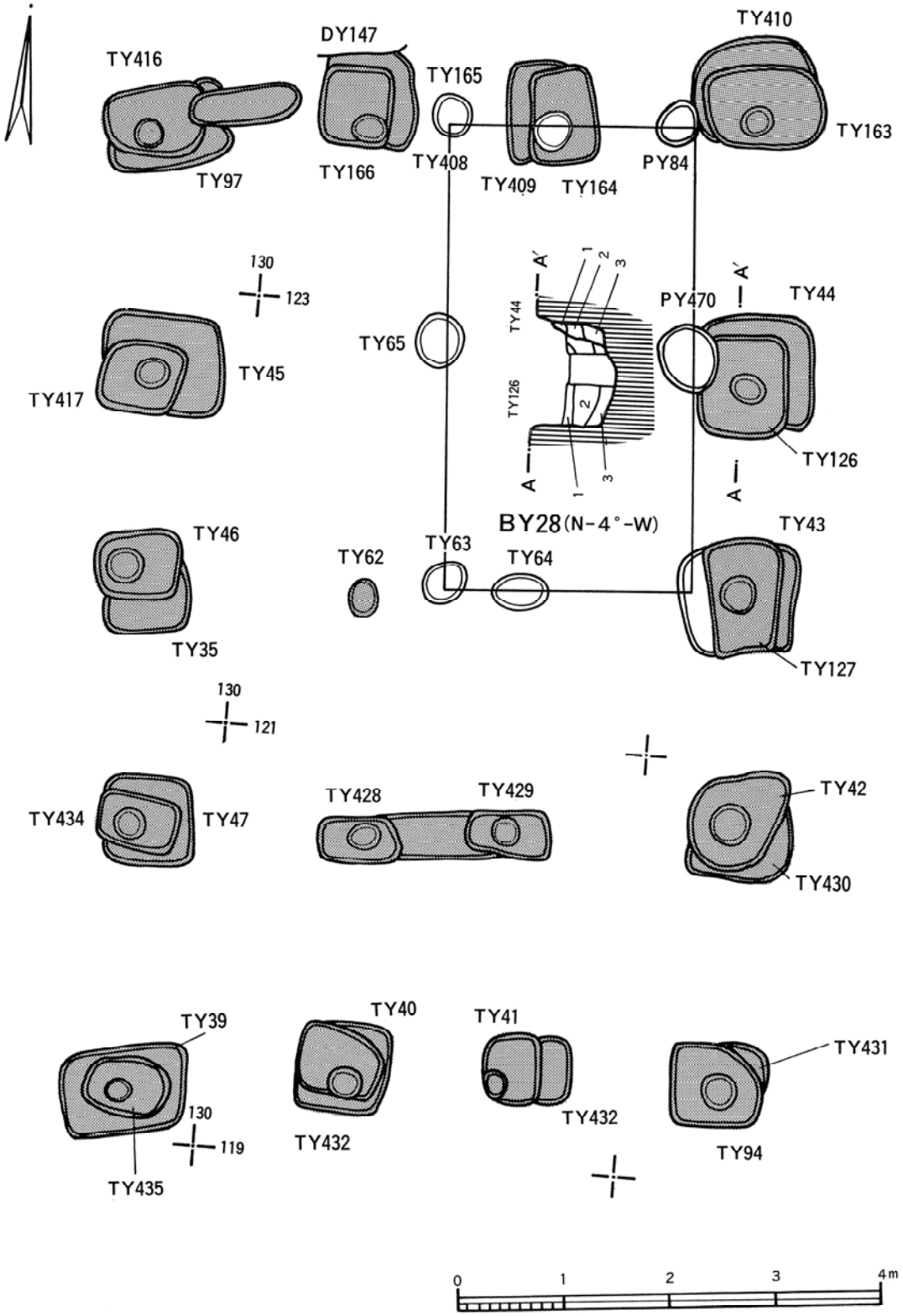
ＣＮ234，235，ＤＹ217，218さらにＤＹ172，251，461，466，467は土師器等を焼く遺構とみられる。この中にはＡＮ２，３，４を切って構築している遺構もあり，他の土壙群より新しい年代に位置すものであろう。ＤＹ489，480，481，483は第Ⅲ次調査区より，確認された土壙群である。前述した分布状況より，この調査区周辺に大型建物の存在を示唆している。

６．Ⅴ期の遺構

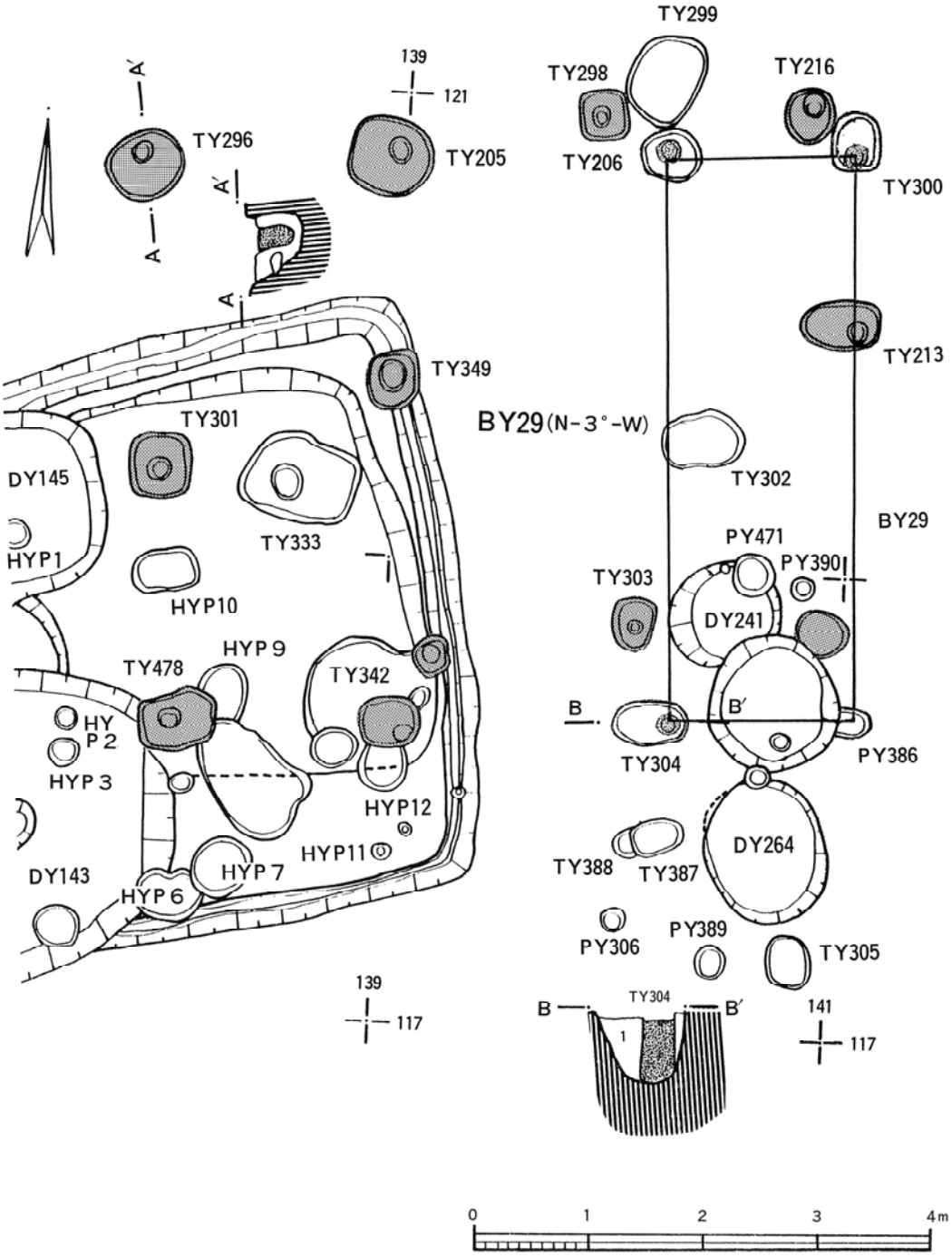
掘立建物２棟，掘立柱列２基，溝状遺構３基，柵列１基が認められた。第Ⅰ次調査区から第Ⅳ次調査区内に広く分布しているが，大浦Ｃ遺跡のように，柱穴が集中す箇所はなかった。



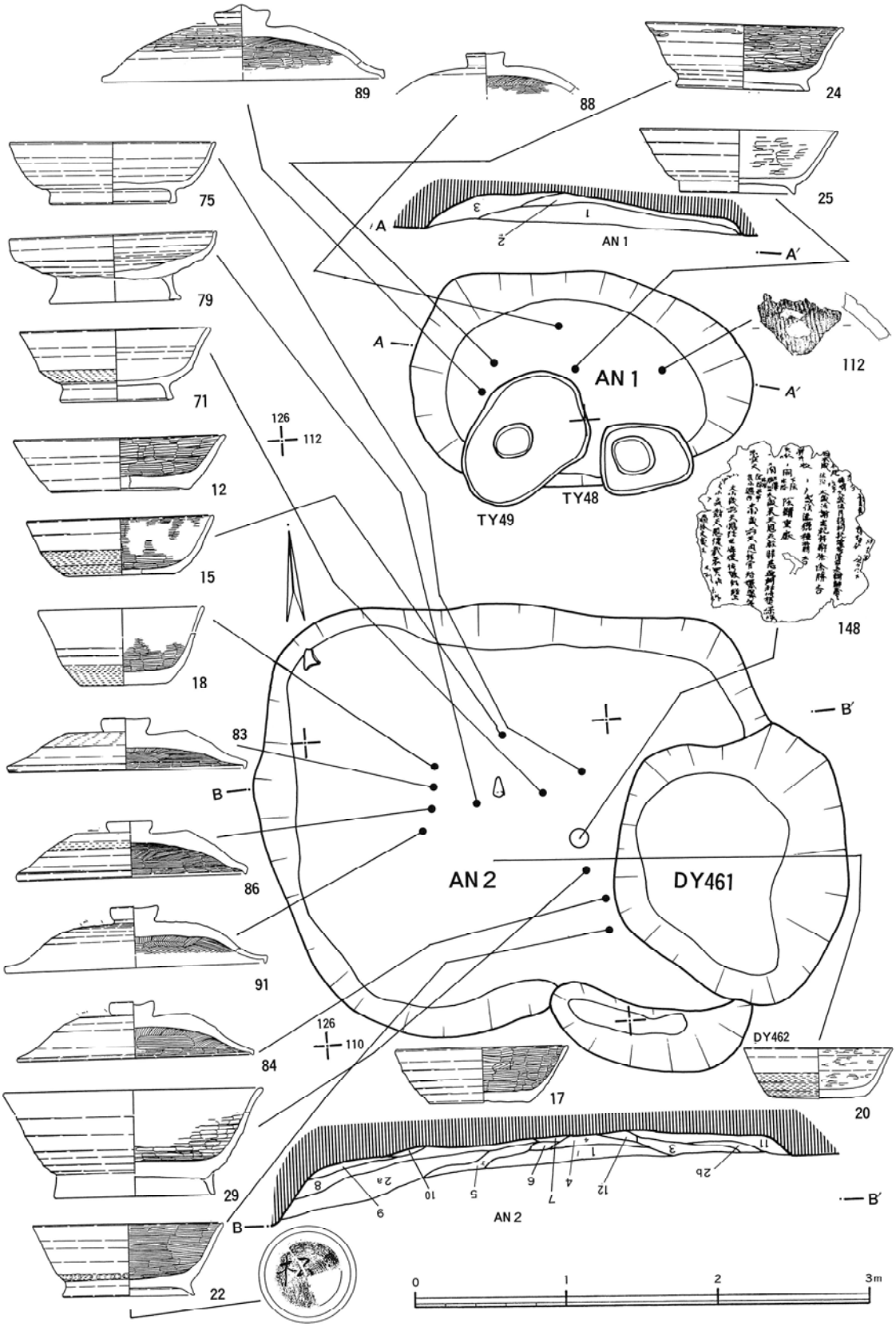
第32図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY27平面図(Ⅳ期)(26)



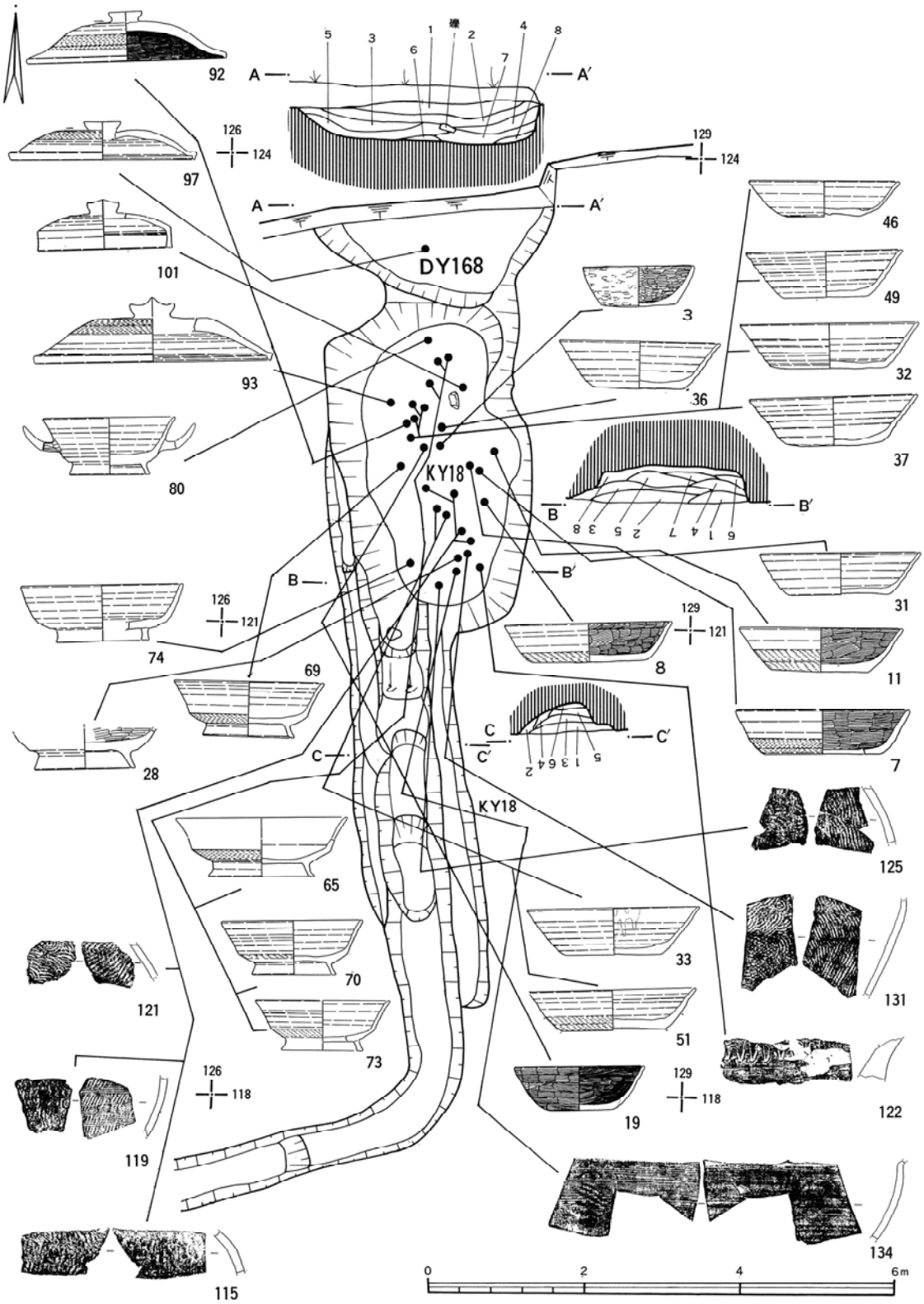
第33図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY28平面図(Ⅳ期)(27)



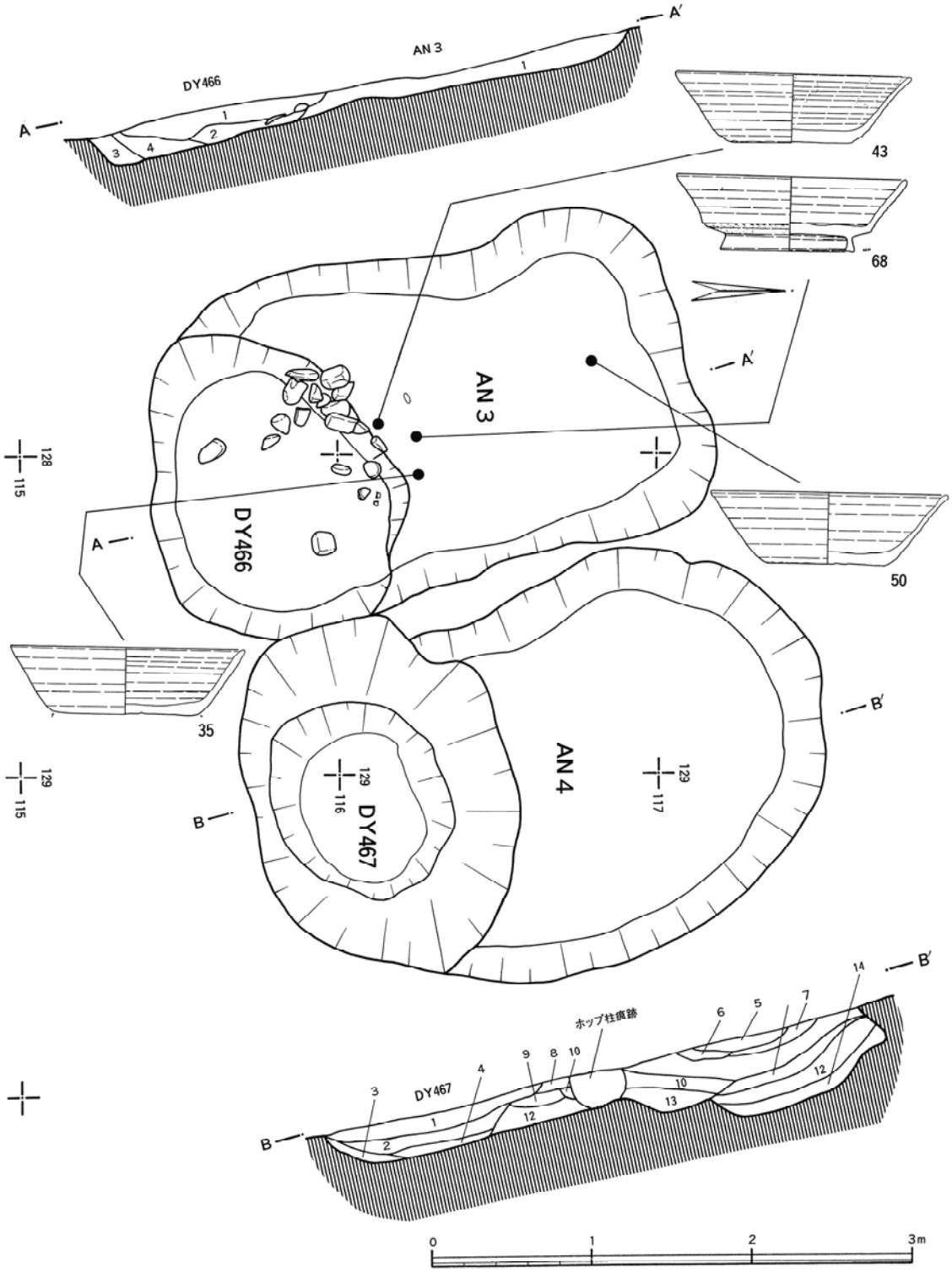
第34図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査BY29平面図(Ⅳ期)(28)



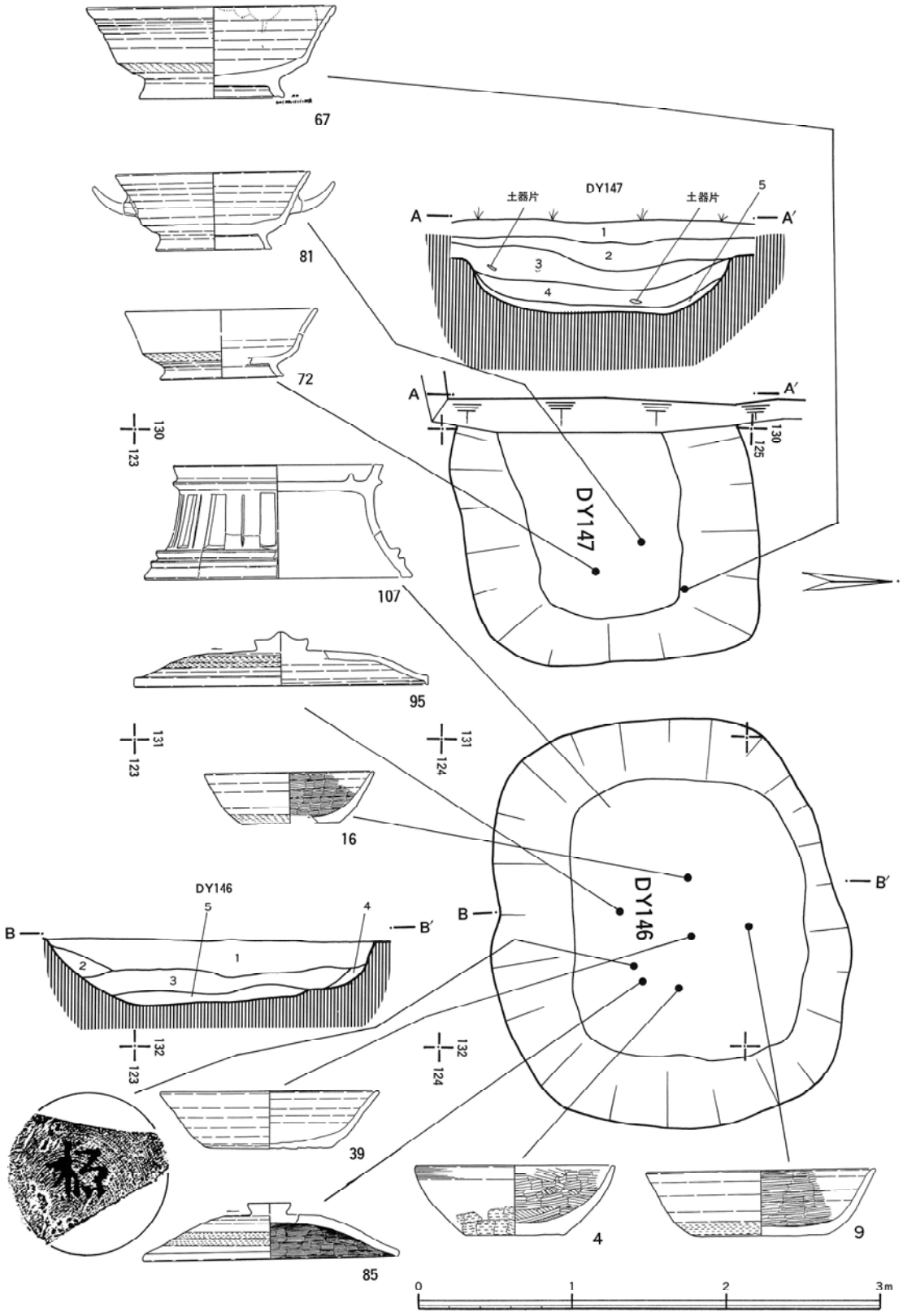
第35図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査AN１・２DY461・462平面図(1)



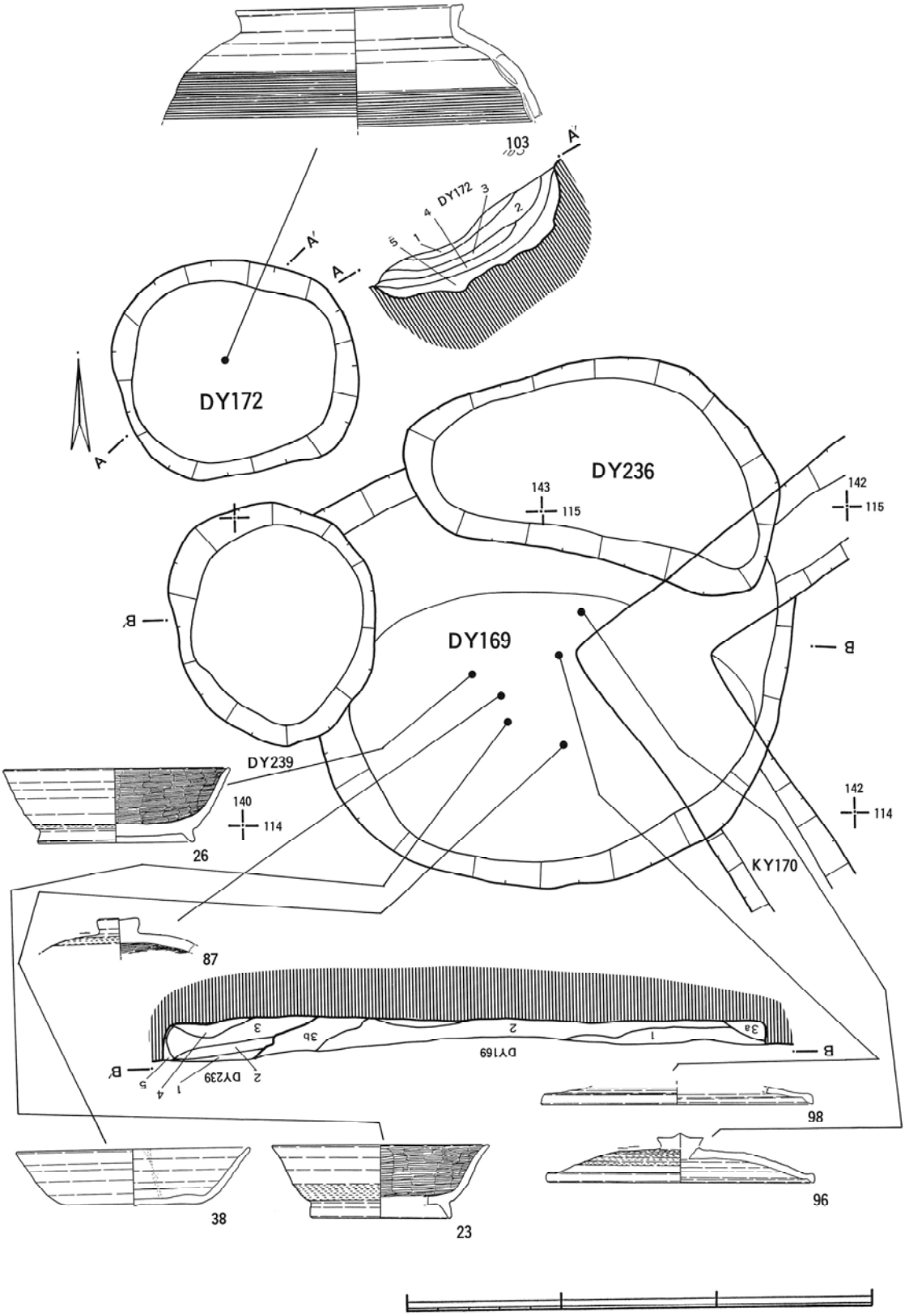
第36図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査KY18・DY168平面図(2)



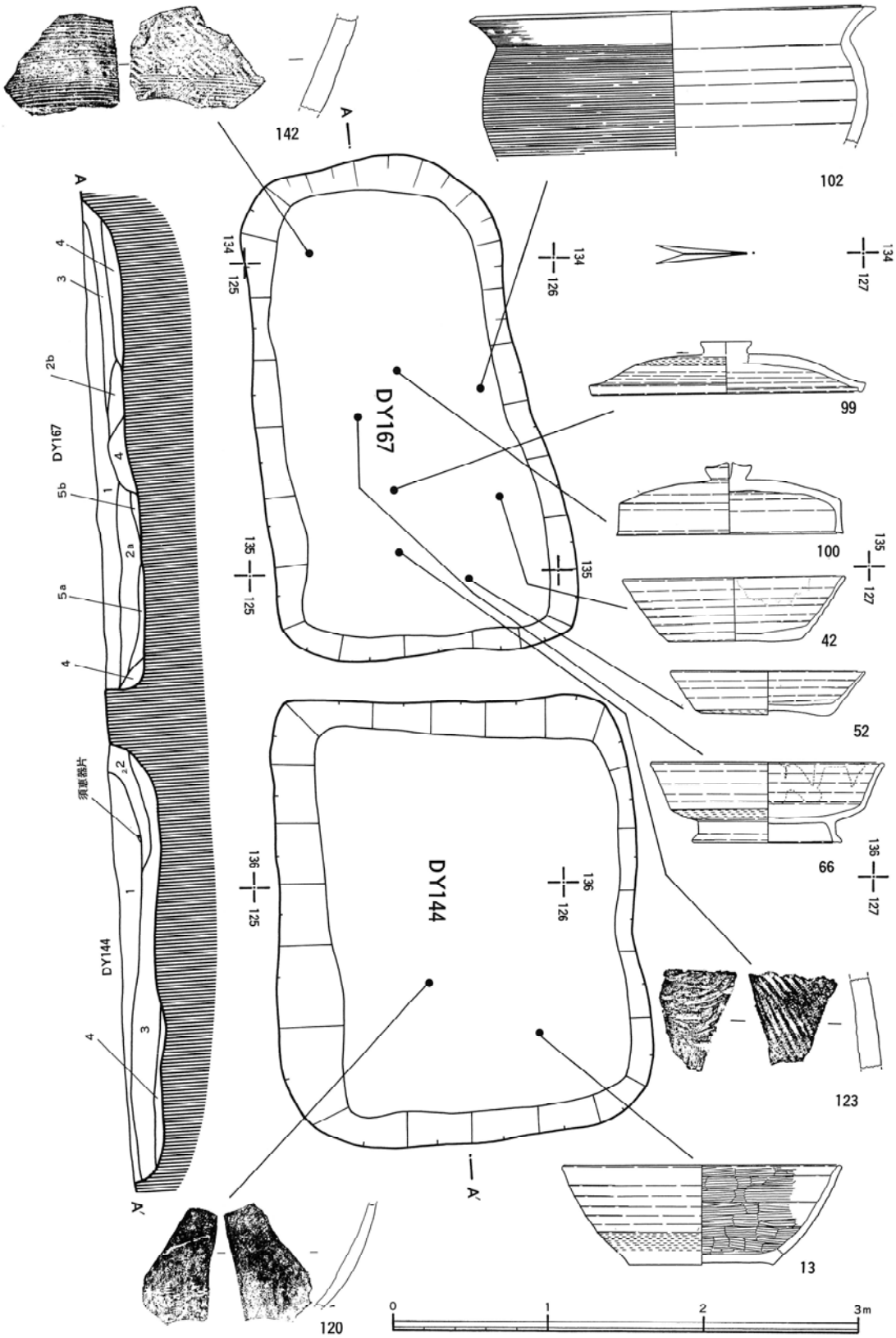
第37図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査AN３・４・DY466・467平面図(3)



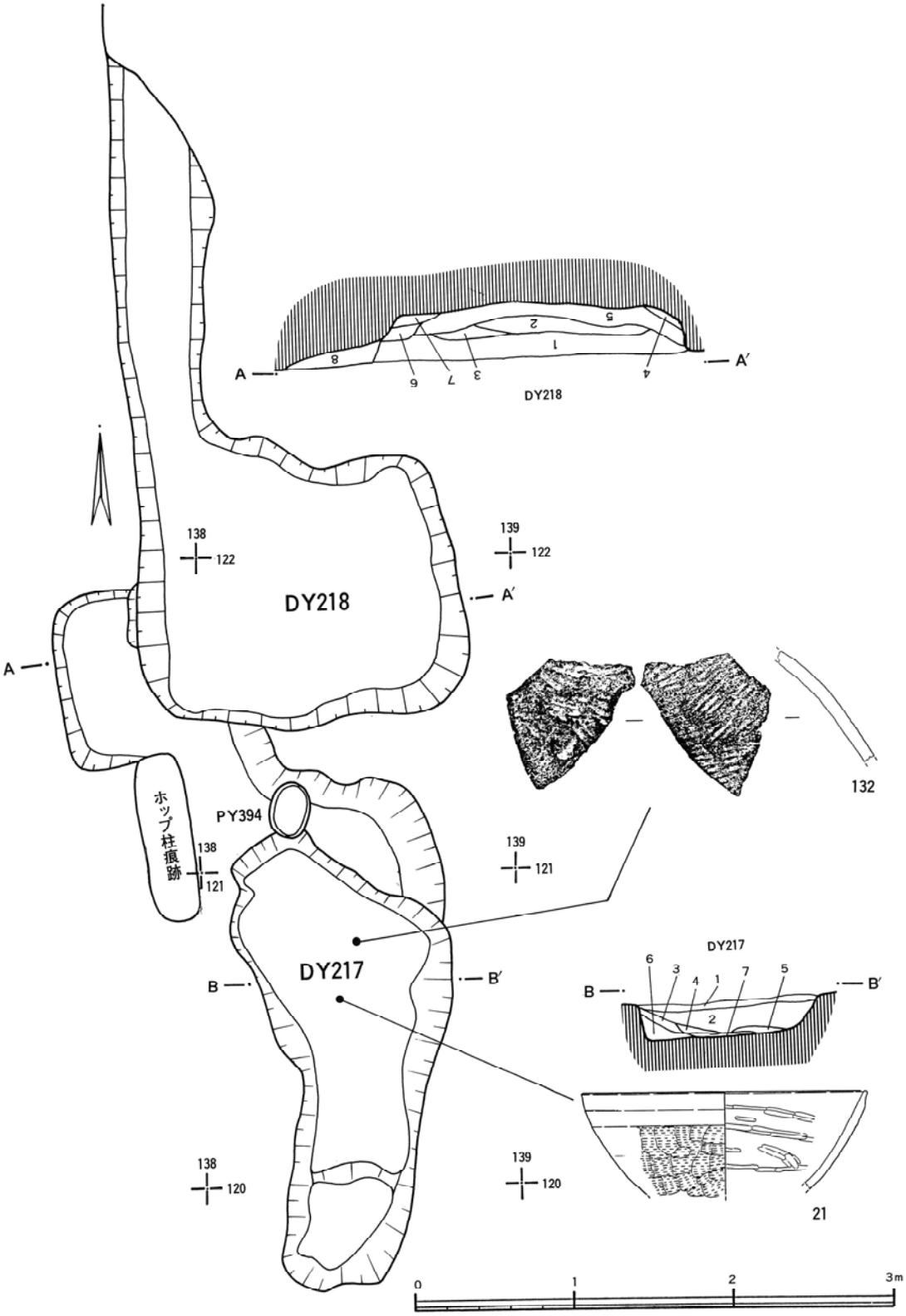
第38図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY146・147平面図(4)



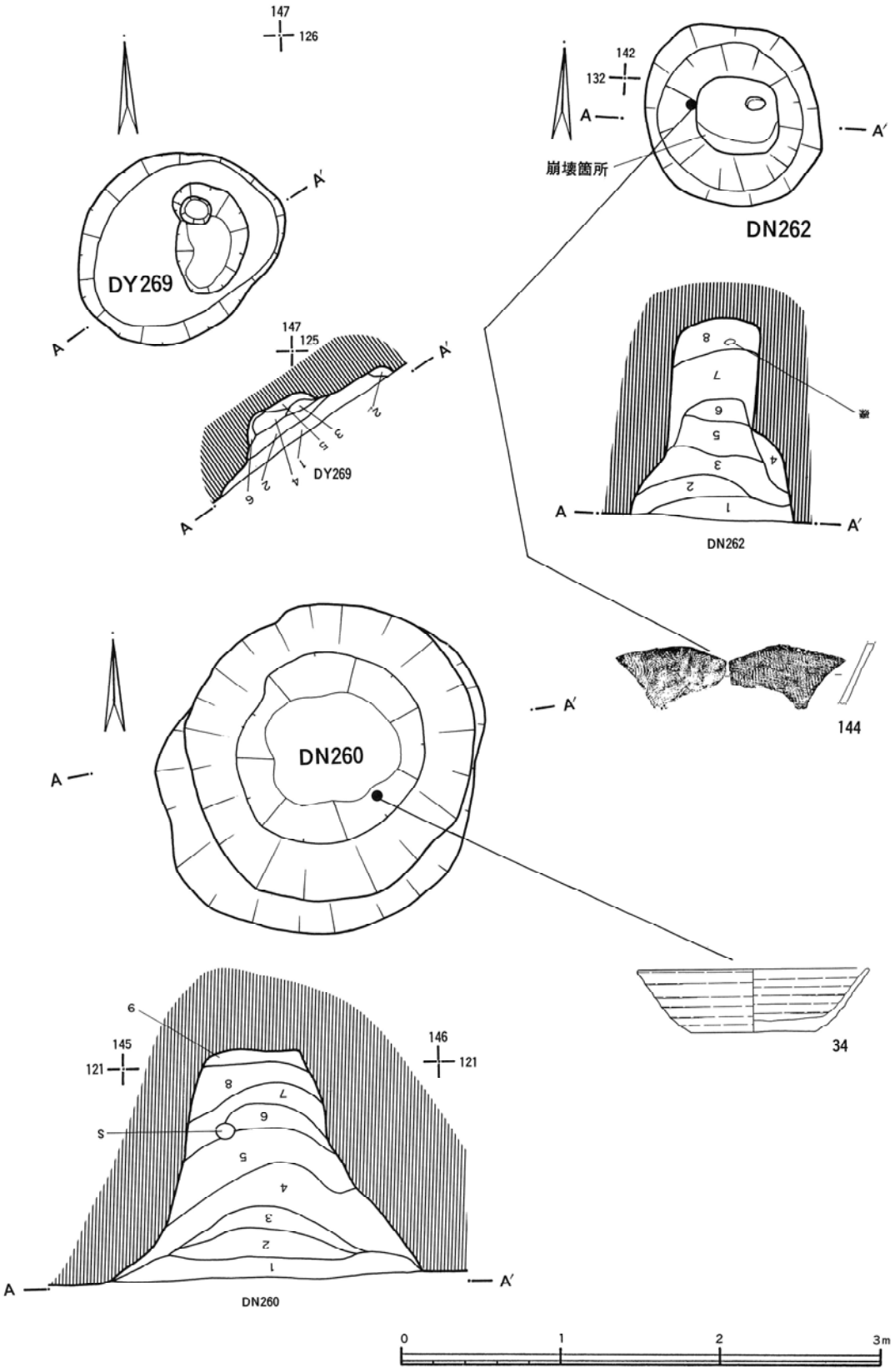
第39図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY169・172・236平面図(5)



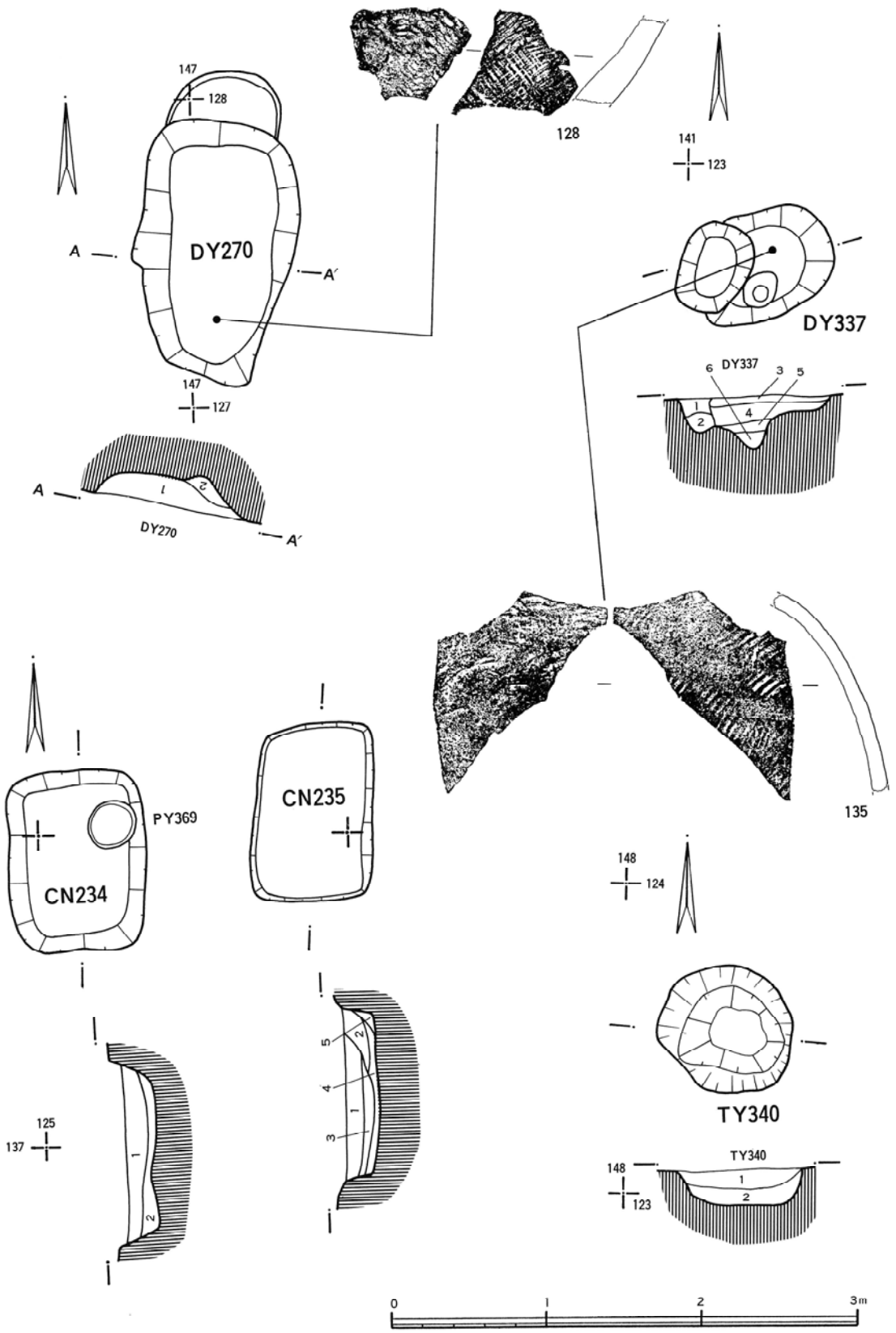
第40図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY144・DY167平面図(6)



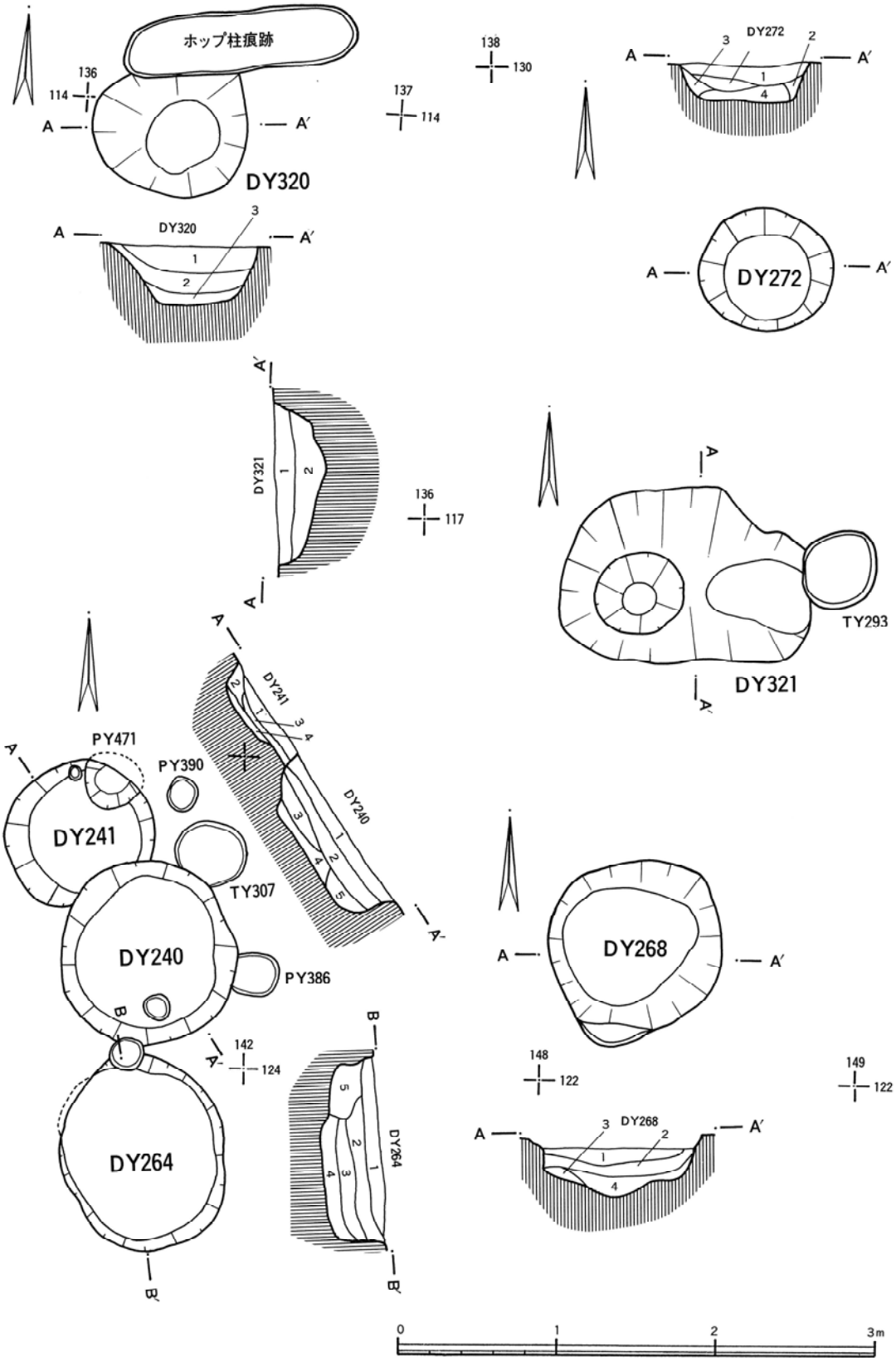
第41図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY217・218平面図(7)



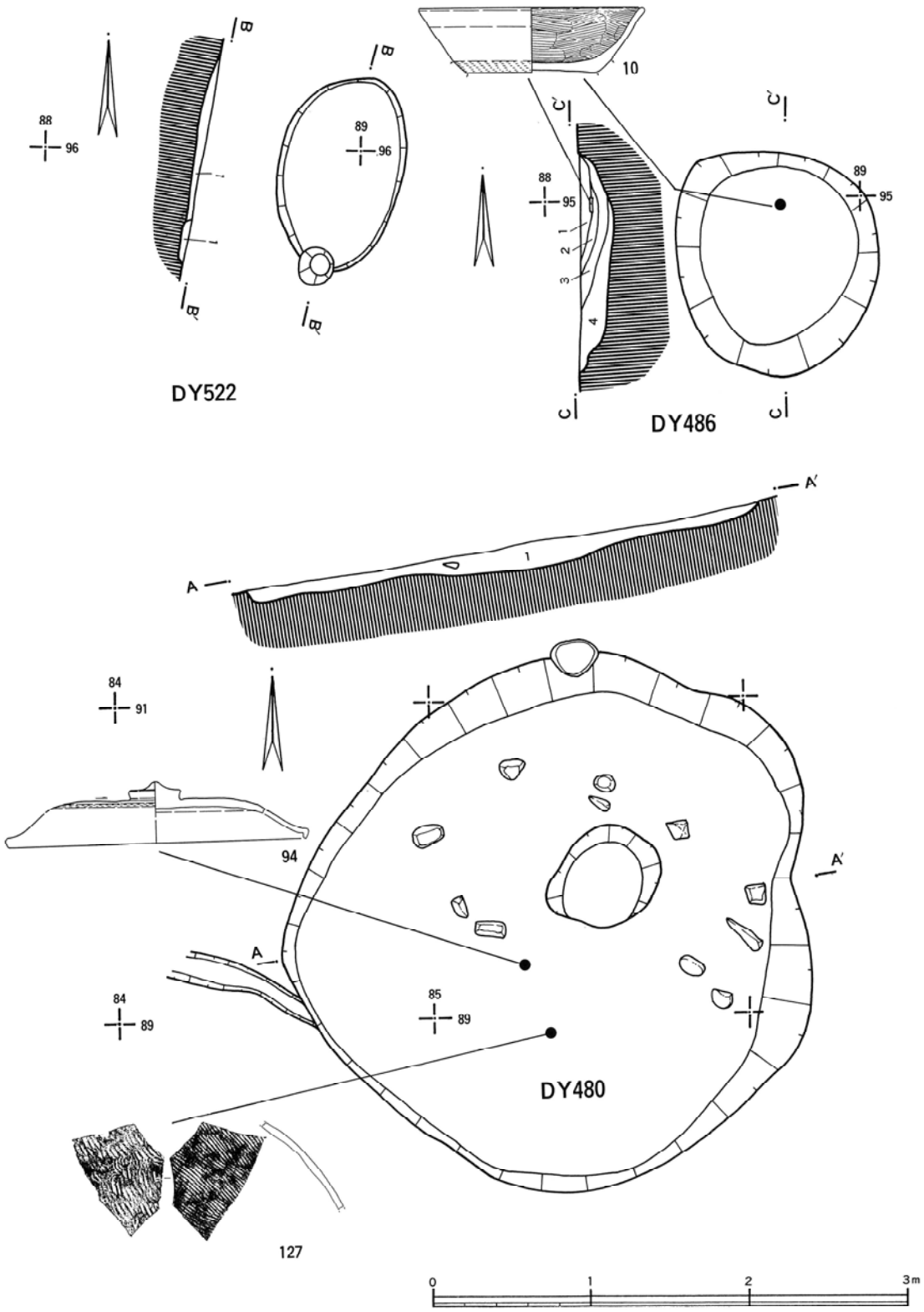
第42図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DN260・262・DY269平面図(8)



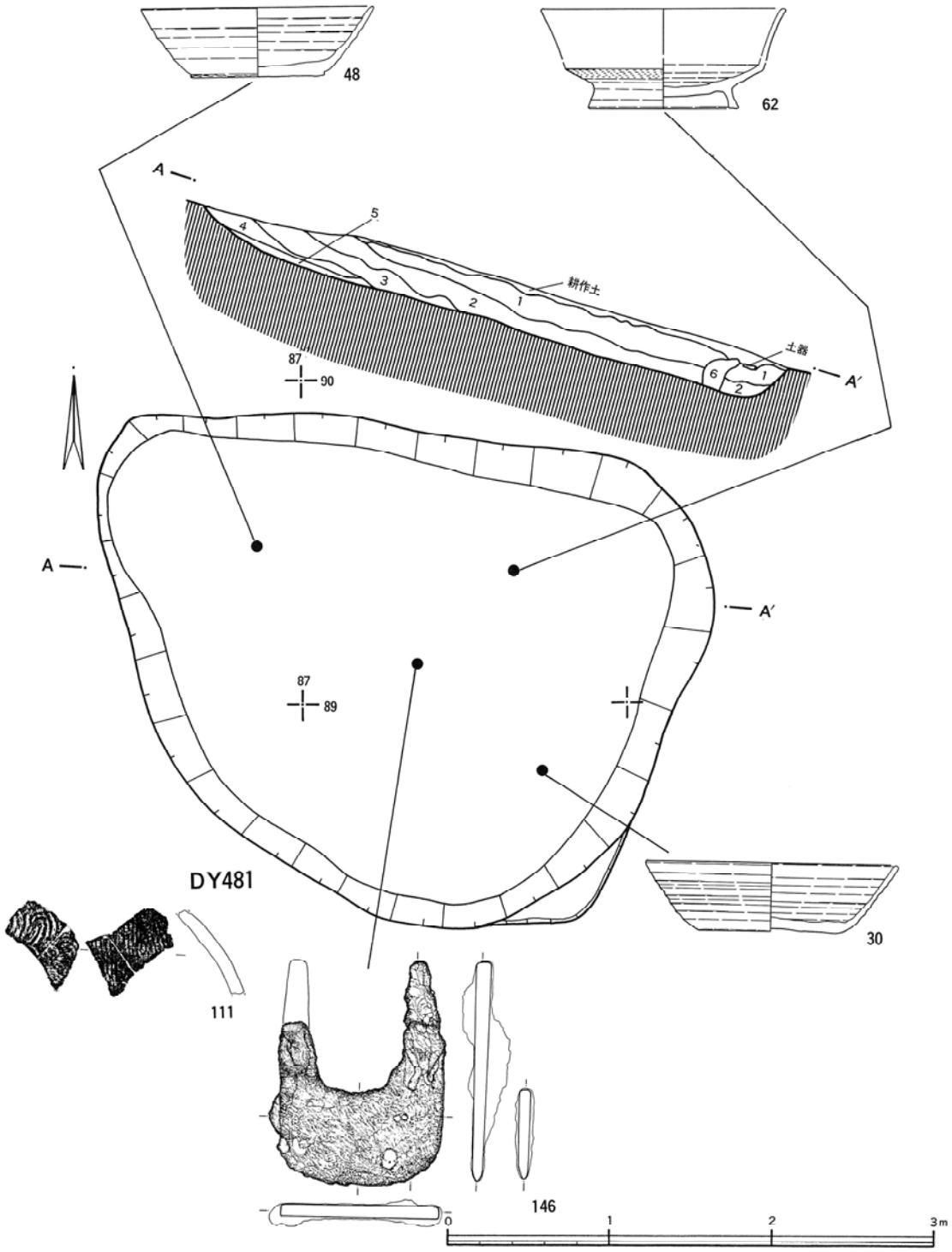
第43図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査CN234·235·DY270·237平面図(9)



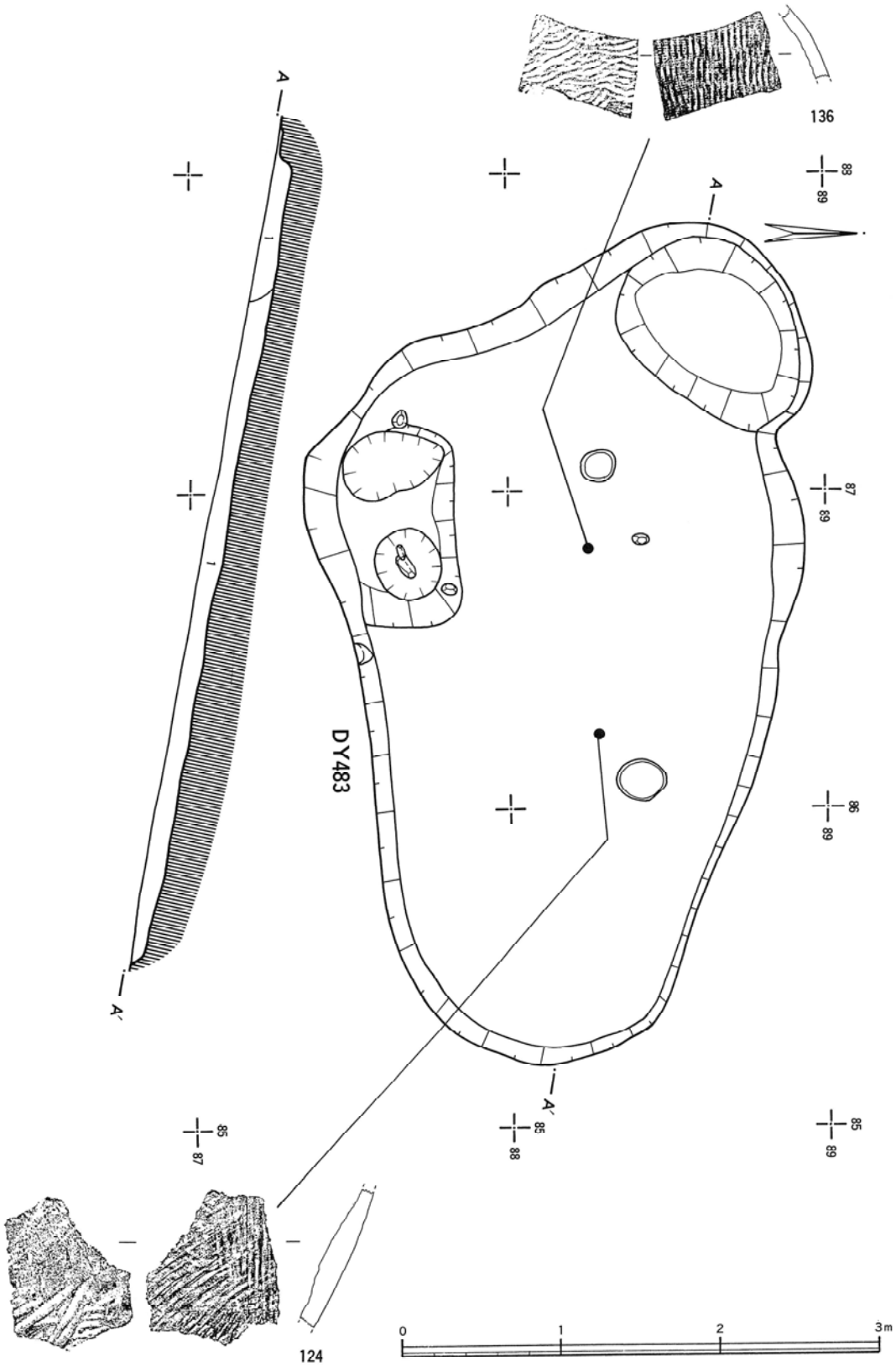
第44図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY240・241・264・268・272・320・321平面図(10)



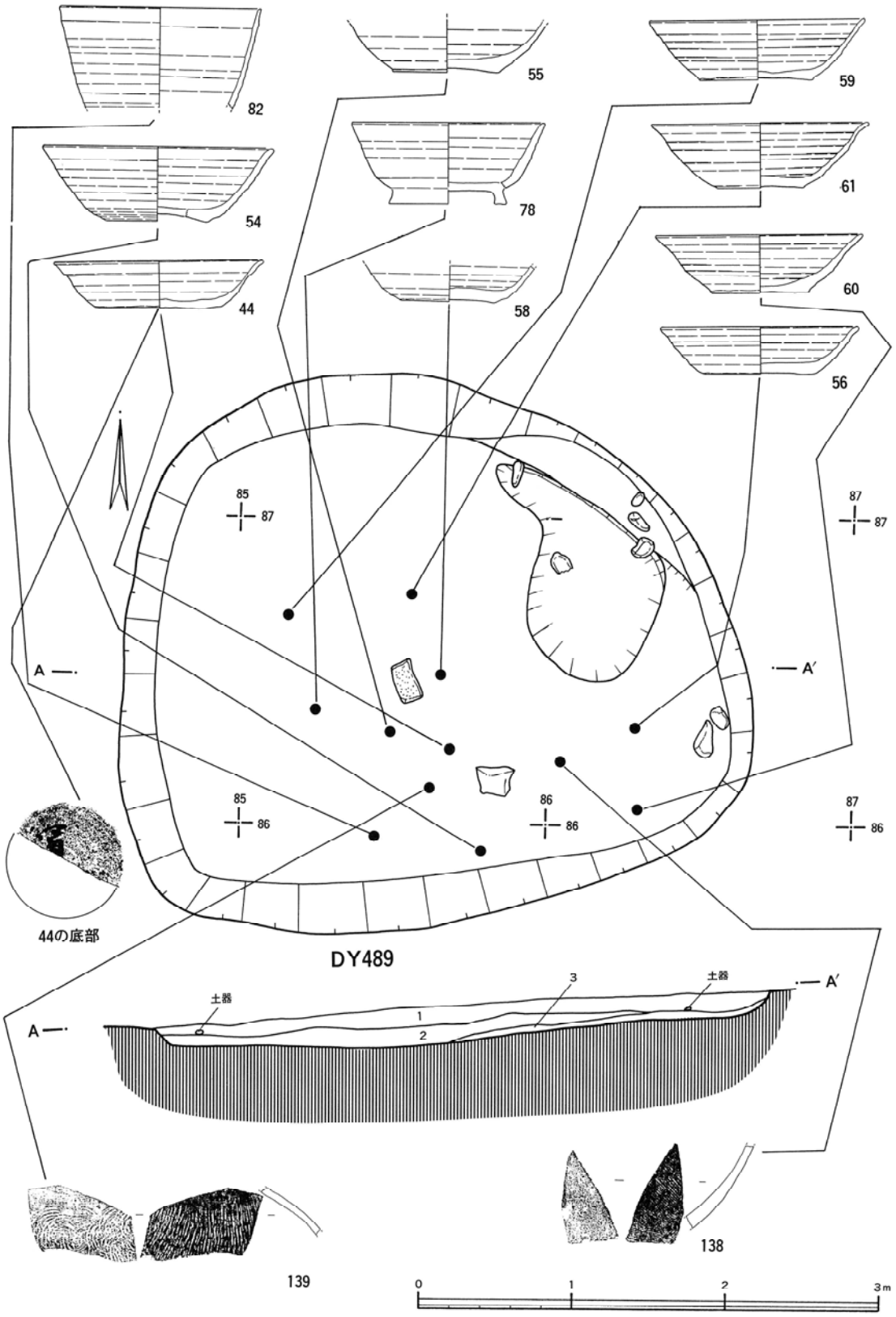
第45図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY480・486・522平面図(11)



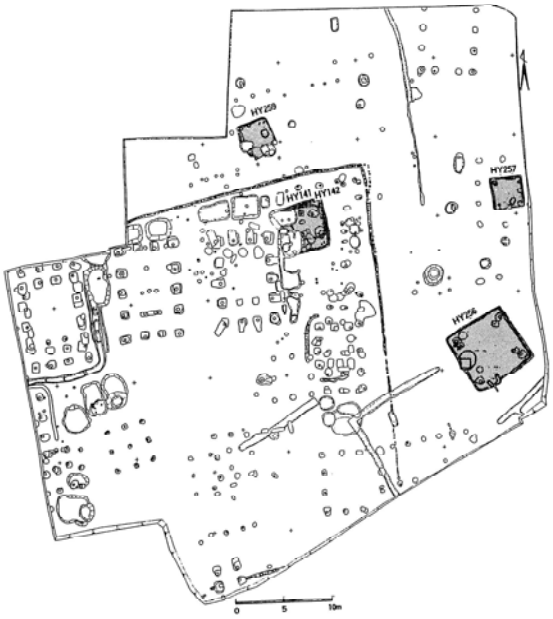
第46図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY481平面図(12)



第47図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY483平面図(13)



第48図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査DY489平面図(14)



大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査Ⅰ期遺構全体図

大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査Ⅱ期遺構全体図

大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査Ⅲ期遺構全体図

大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査Ⅳ期遺構全体図

第49図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査遺構変容図

第Ⅲ節　検出された遺物

第１次調査から第Ⅳ次調査までに検出された遺物は，平成元年・同２年に発掘調査を実施した官衙主要地区を中心にして6,178点が出土している。このうち，石器等の縄文時代に属する遺物23点，奈良～平安期に属する遺物として6,091点，中世から近世にかけての遺物64点と圧倒的に奈良・平安期に係わる遺物が大半を占める。これらの遺物について器種別に概要を記すと以下の様になる。

土師器内黒坏類	693 点	土師器内黒蓋類	140 点	土師器両黒坏類	34 点
土師器両黒蓋類	3 点	土師器坏類	14 点	土師器甕形土器類	4,101 点
須恵器坏類	438 点	須恵器蓋類	111 点	須恵器甕形土器類	387 点
須恵器壺形土器類	96 点	須恵質土器	101 点	陶磁器類	64 点
鉄製品	19 点	漆紙文書	2 点	硯　2 点　石器	23 点

このうち，完形，復元可能土器の実測図と拓影図作成を行なったものが179点である。ここでは図化した遺物を基に述べてみたい。

１．出土土器の分類

土師器と須恵器に大別し，さらに器種ごとに細分した。土器の調整手法の分類は第１表，図化した遺物計測表は第２表，土器の年代は第３表と第70図・第71図に分類している。

Ａ群土器〔２～29〕

土師器の坏類を一括した。器形の特徴と調整手法より12類に分けられる。

○Ａ群１類（２）

底辺付近に稜線状の段を有するもので，内面をミガキa^1～a^3で調整し，底部をケズリで仕上げてある。国分寺下層式に併行すると考えられ，Ⅰ期に加えた。

○Ａ群２類（３・20）

小形の高径比の大きな坏を本類とした。３は内外面ともにミガキを有し，底部を鄭重に磨いていることから切離し技法は不明である。20はロクロ成形によるもので，下半部に回転ヘラケズリを施している。Ⅱ期からⅢ期前半と考えている。

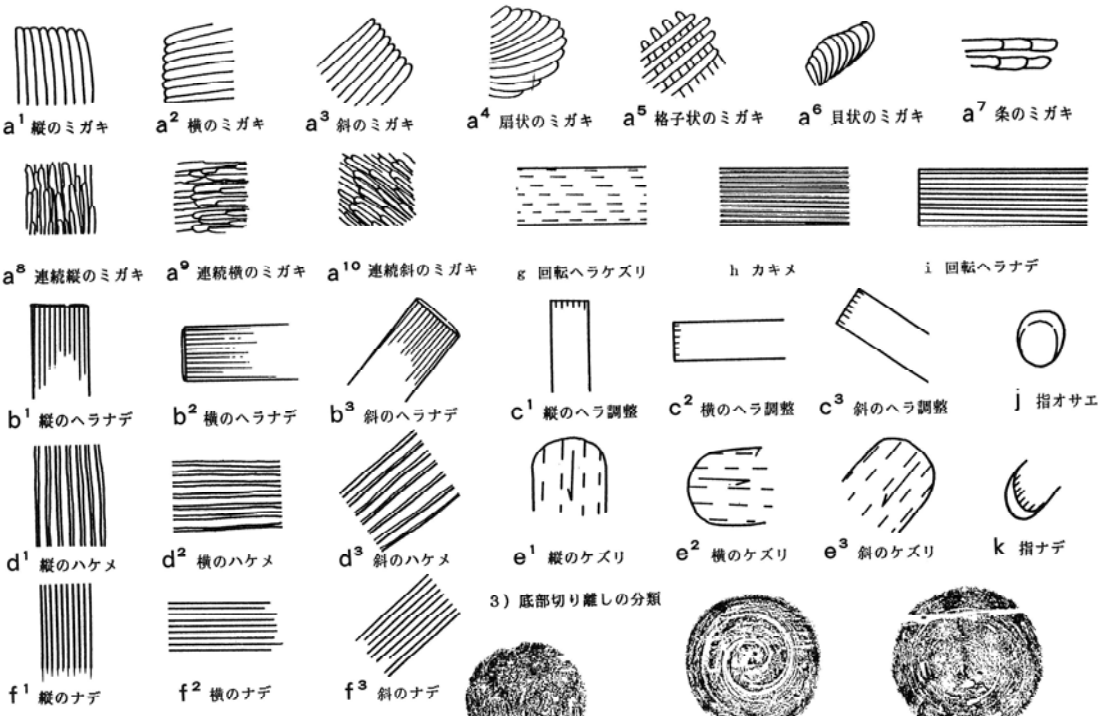
○Ａ群３類（４・５）

内曲気味の口縁部立ち上りを呈する埦形土器で，４は内面ミガキ，５はナデとヘラ調整を加えている。外面は両者ともナデと下胴部を手持ちケズリで調整している。底のの切離しはＣで，Ⅰ期前半としたい。

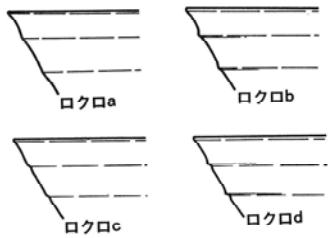
○Ａ群４類（６）

第1表　土器調整手法分類表

1）土器調整の分類

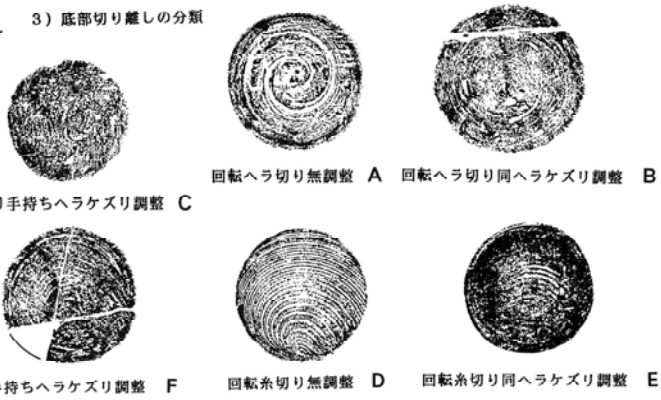


2）ロクロ成形の分類

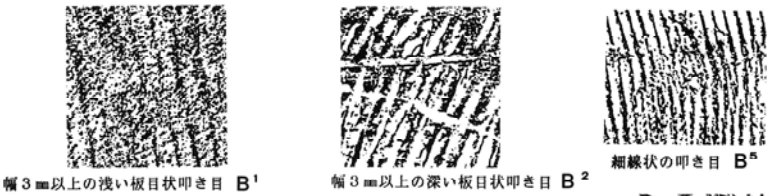


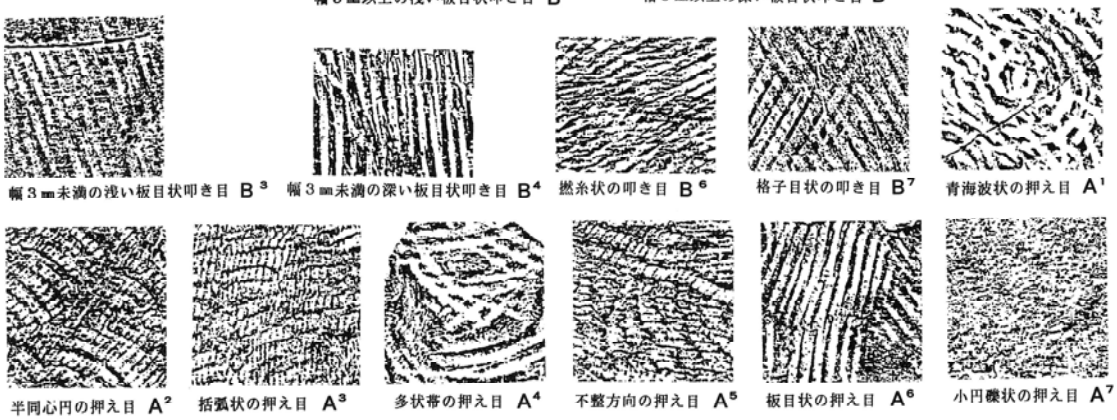
ロクロa　水引ロクロの稜線が1.5㎜未満
ロクロb　水引ロクロの稜線が1.5㎜以上
ロクロc　水引ロクロの凹線が1.5㎜未満
ロクロd　水引ロクロの凹線が1.5㎜以上

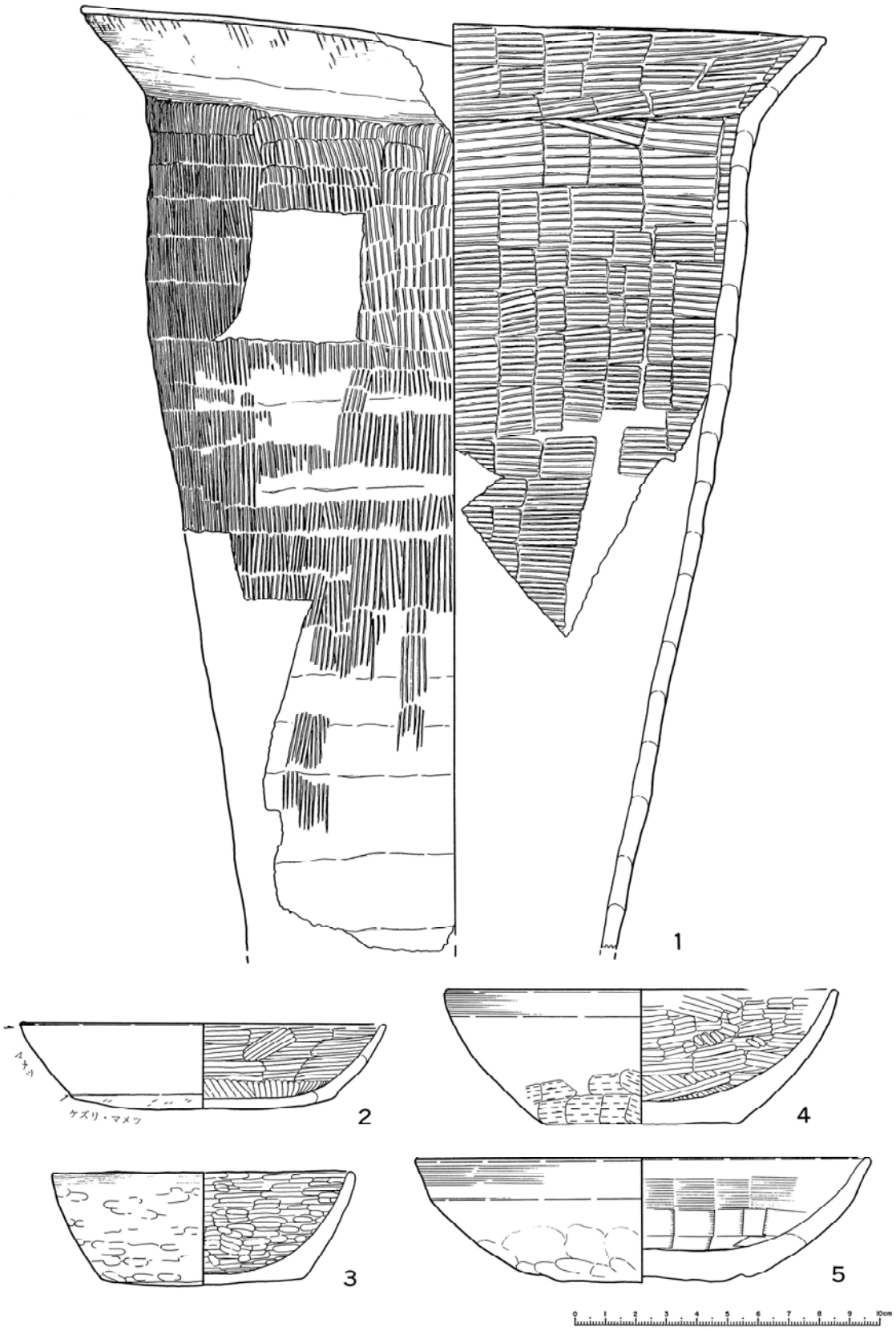
3）底部切り離しの分類



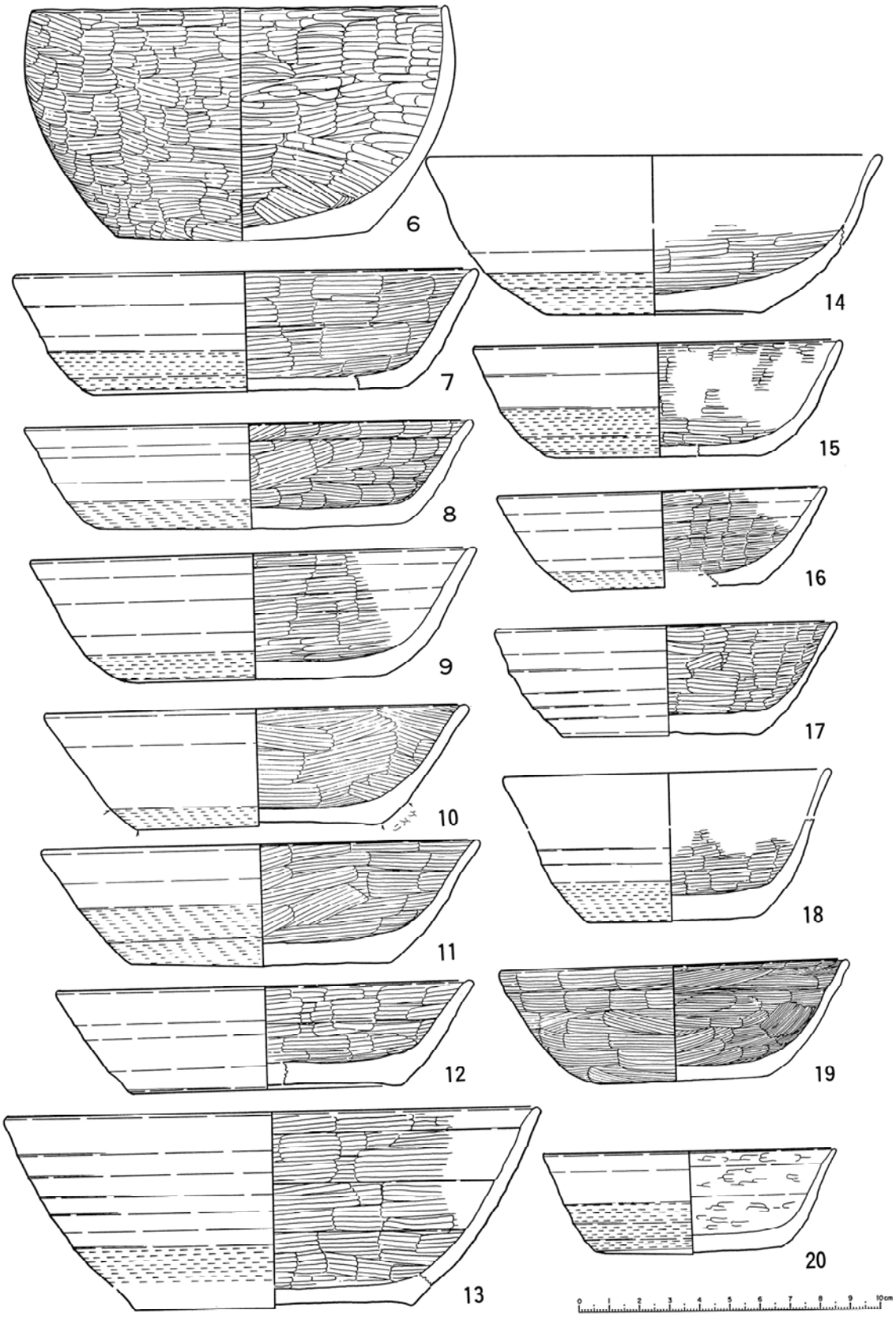
4）叩き目・押え目の分類



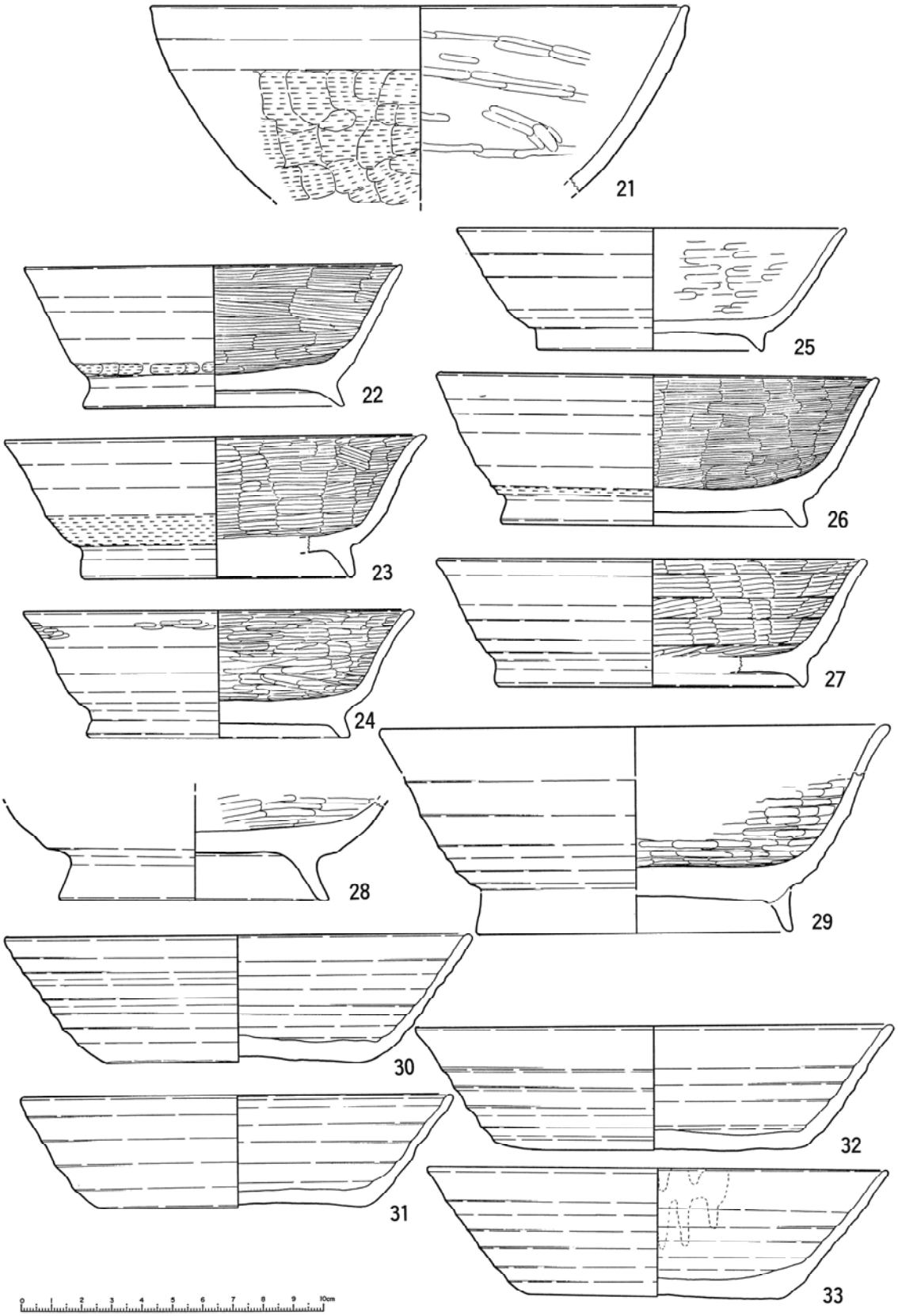




第50図　大浦B遺跡出土遺物実測図(1)



第51図　大浦B遺跡出土遺物実測図(2)



第52図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査

高径高の内反する埦で，内外面とも鄭重なミガキを呈する。Ⅰ期にした。

○Ａ群５類（７～12）

底部が大きく，器形が低いのを特徴としている。内面は横位のミガキ，外面は12を除く他は底辺部を回転ヘラケズリを施している。底部切離しは８がＡ，12がＤ，他はＢであった。中心的計測値は52：14：34で笹原Ａ群２類に併行する。Ⅱ期前半に位置する。

○Ａ群６類（15～17）

底辺からの立ち上りがゆるやかな曲線を描く。高径の比が他の坏に比べ大きいのが特徴である。内面はミガキを主体に外面はロクロ成形後にケズリを加えている。底部切離しはＡとＢで，米沢市横山ｂ遺跡の坏に類似している。Ⅲ期前半から同後半に求められる。

○Ａ群７類（13・14・21）

高径の比が大きい大型の埦形に近いグループである。内面を横長のミガキ，外面を手持及び回転ヘラケズリを用い，先のＡ群４類から発達した坏と考えられる。Ⅱ期とした。

○Ａ群８類（18）

高径の比が大きい小形坏である。内面をミガキa^2，外面の下半部を回転ヘラケズリを加えている。外反気味のこの坏は横山ｂ遺跡出土坏に共通しており，８世紀中葉前半には既に出現するものと言える。従ってⅡ期前半に位置付けたい。

○Ａ群９類（19）

内外面ともに鄭重なミガキを加えた両黒坏で，器形はＡ群６類に共通する。

○Ａ群10類（23・26・27）

やや外反気味の高台坏で，底部が広く高径が低いのを特徴とする。内面調整はミガキを丹念に施し，高台接続部にケズリを伴っていものも存在する。Ⅱ期前半に位置する。

○Ａ群11類（22・24・25）

器形的には先のＡ群10類と同形態であるが，口径の比が少さいことから区別した。笹原遺跡からは10類に共通する坏は出土しているが，本形態を示すものは認められなく，発達した器形として注目したい。よって，Ⅲ期後半（８世紀末から９世紀初頭）とする。

○Ａ群12類（28・29）

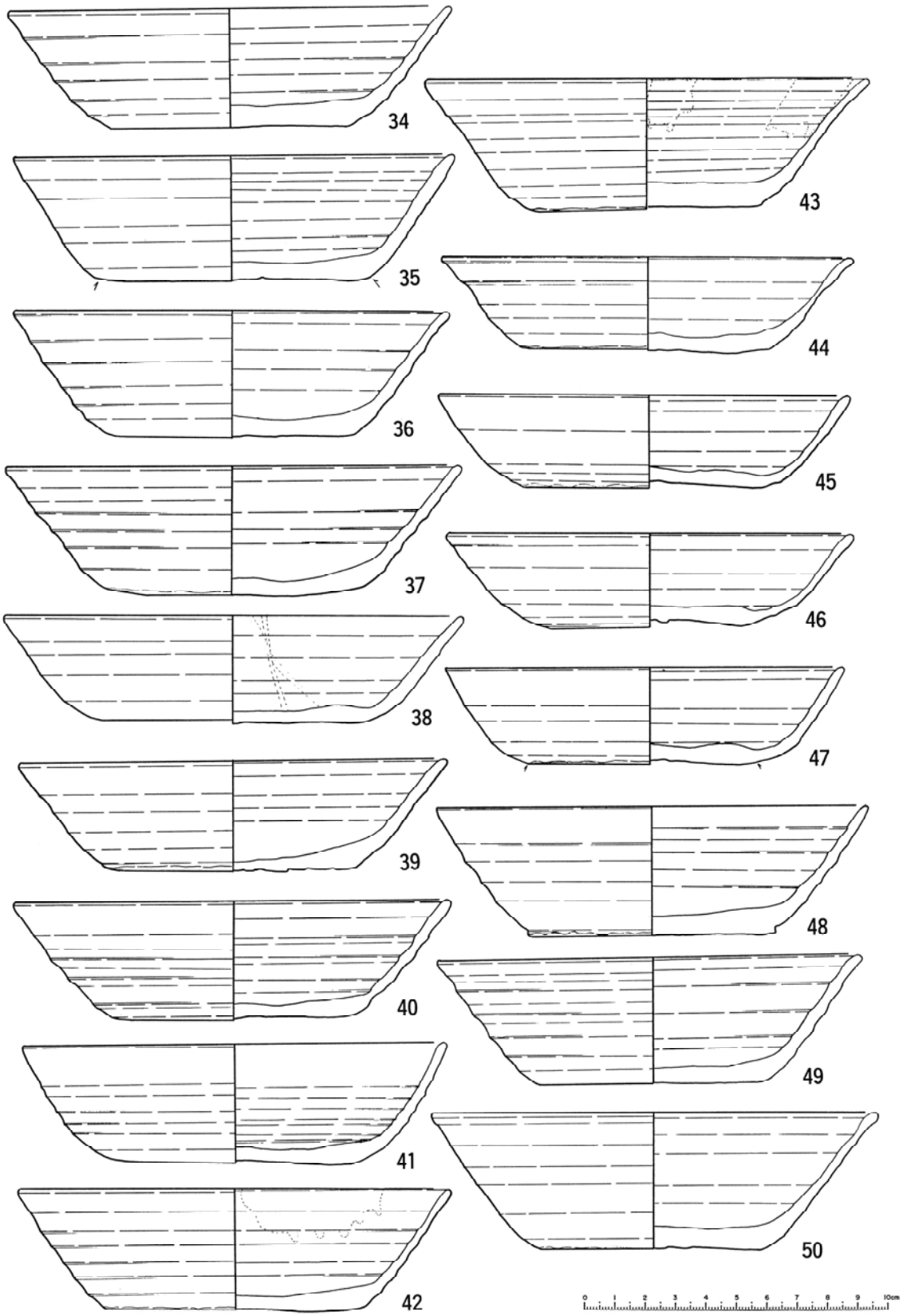
高径の高い高台坏の仲間で，笹原Ａ群８類に先行する坏と推測する。内面は太状のミガキ，外面はロクロｂで，切離しはＡとＤであり古い特徴が残っている。Ⅲ期に位置付けたい。

Ｂ群土器〔30～82〕

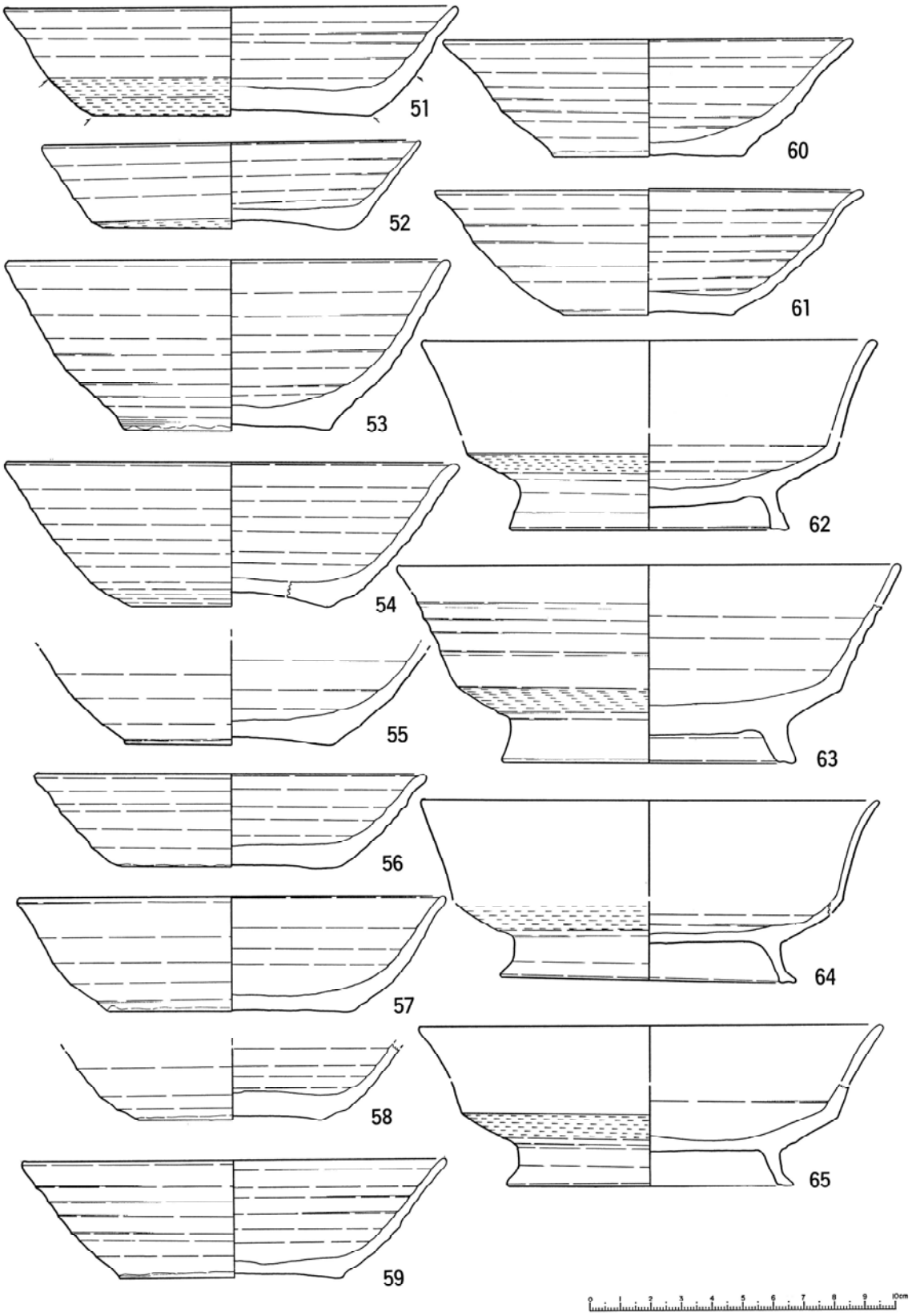
須恵器の坏類を一括した。器形の特徴から14類に分類する。

○Ｂ群１類（30～33・42）

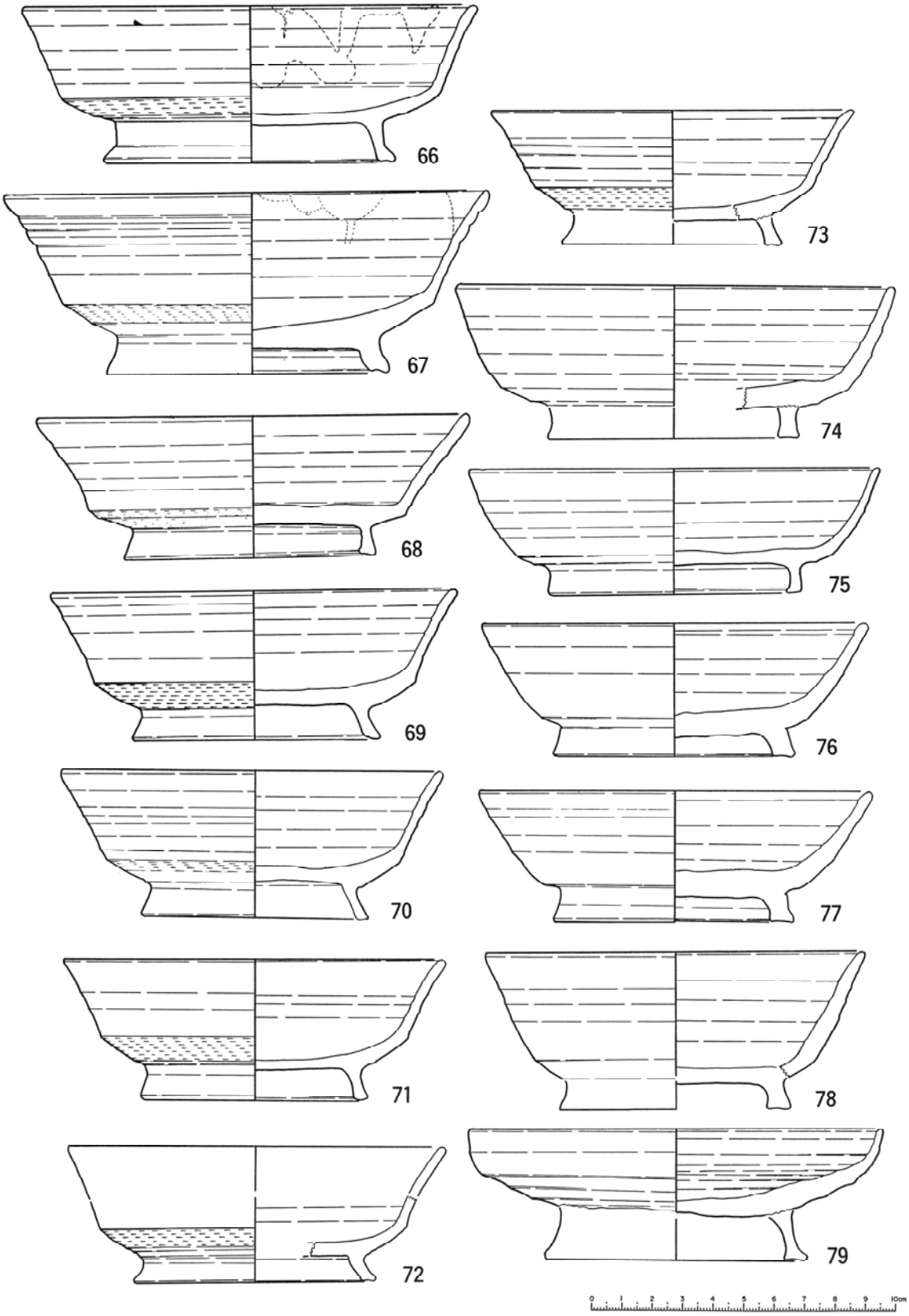
底部切離しがＡを有する坏で，底部から斜に立ち上がるのを特徴としている。計測値が平均で



第53図　大浦B遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査



第54図　大浦B遺跡出土遺物実測図(5)



第55図　大浦B遺跡出土遺物実測図(6)

55：15：30を示しており，笹原のＡ群11類と12類を埋める坏と考えられる。Ⅱ期に位置する。

○Ｂ群２類（34～37・43）

器形的には先の１類と共通するが，底辺が僅に丸味を帯び，口縁部が外反することから区別した。切離しはＡで，Ⅱ期後半に位置するとみたい。

○Ｂ群３類（38～41）

高径の比が少ない坏類で，３類に近い器形を示す。41を除く他は切離しがＡであり，計測値は１類と同様に55：15：30である。Ⅱ期前半から後半に求められる。笹原のＡ群12類に併行する。

○Ｂ群４類（44～47）

ゆるやかに外反し，下胴部にふくらみをもつ高径の低い坏を一括した。計測値は55：12：33であり，47のＢを除く他は切離しはＡである。Ⅱ期に位置する。

○Ｂ群５類（48～50）

高径の比が高い坏を一括した。底部切離しはＡでⅡ期からⅢ期にかけて使用された。

○Ｂ群６類（51）

外反し，胴部が僅に曲する坏で，底部が厚いのが特徴である。底辺部付近にヘラケズリを伴っている。Ⅰ期に近いⅡ期とみられる。

○Ｂ群７類（52・56）

口径が13cm前後の小形坏である。52は底辺部にケズリを有する切離しＢであるが，56は切離しＤである。よって前者の52はⅡ期，後者の56はⅢ期に求められる。

○Ｂ群８類（53～55）

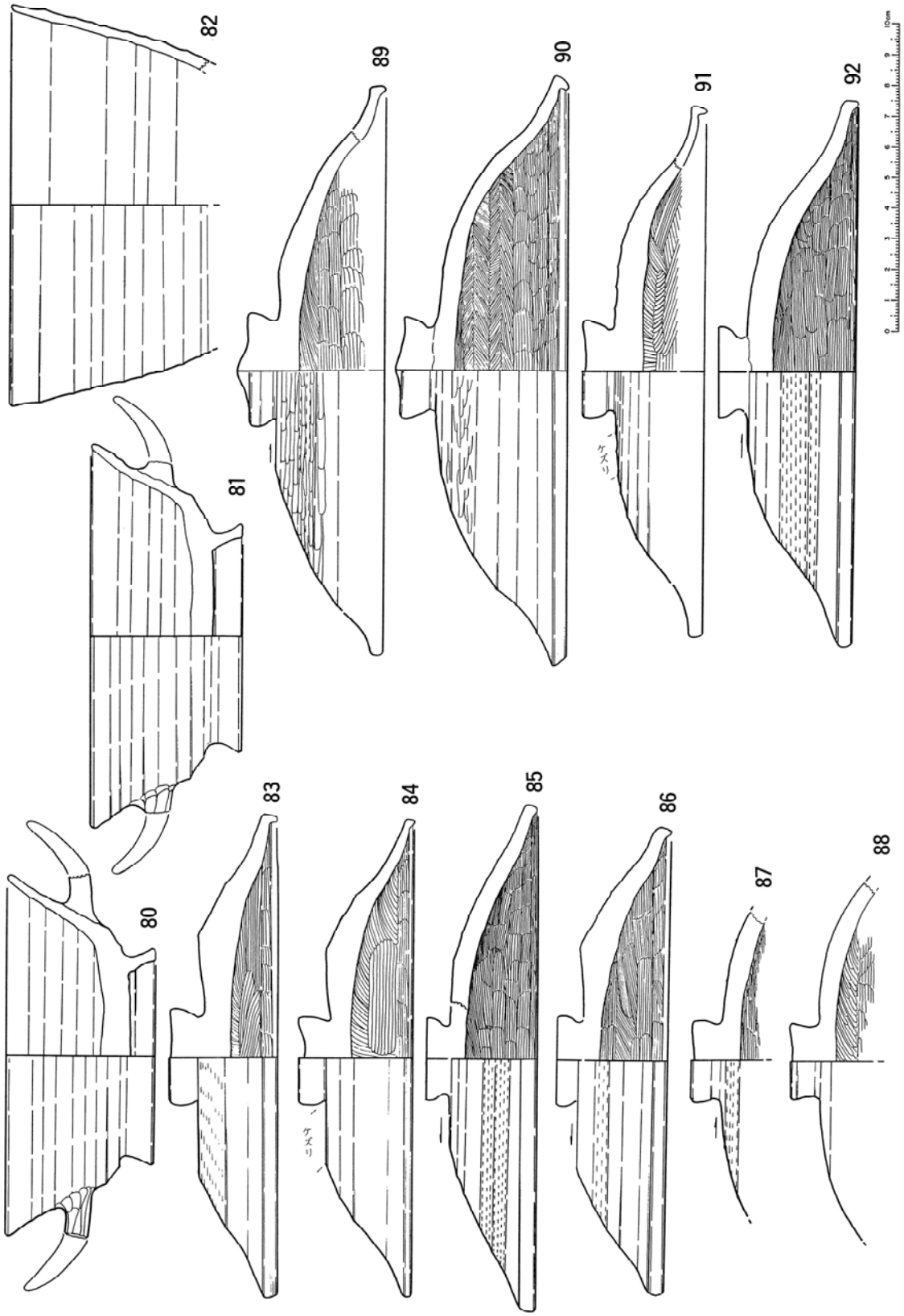
切離しがすべて糸切のＤの坏で，高径の比が大きく底部が僅に凹むのが特徴である。酸化焔焼成を受けた所謂「須系土器」，「赤焼土器」等の仲間で，地域差も考慮し，ここでは須恵質土器としておく。笹原のＡ群16類に併行することからⅣ期と考えられる。

○Ｂ群９類（57～61）

底部が小さく，胴部からゆるやかに曲線をもちながら口縁部で外反するのを基本形態としている。切離はＤで，笹原のＡ群16・17に共通する。Ⅴ期に位置付けられる。

○Ｂ群10類（62～73）

下胴部に回転ヘラケズリによって成形した稜線を有するのが特徴で，一般に「稜埦」と呼ばれる高台坏を一括した。稜埦も細かな特徴から66・67の様な低器高10ａ類，大型の67・63の10ｂ類，71～73の高径の比が高い小形坏の10Ｃ類に細分することも可能である。10ａ類は笹原遺跡，上浅川ａ遺跡などから検出されており，Ⅱ期の前半，もしくはⅠ期後半に出現したものとみられ，一方，10ｂ類はⅡ期からⅢ期にかけて認められる。笹原遺跡，道伝遺跡がある。10ｃ類はⅢ期に位置するもので，道伝遺跡，壇山窯跡，大明神窯跡，笹原遺跡から出土している。



第56図　大浦B遺跡出土遺物実測図(7)

○Ｂ群11類（74～78）

高台坏を一括した。器形的には大型で坏部の高径が低い74・75，11ａ類，高径の比が大きい76～78の11ｂ類と分けることも可能である。前者はⅢ期，後者は78を除くとⅣ期に位置する。

○Ｂ群12類（79）

坏部が皿状の浅い高台坏で，高畠町大在家遺跡に類例がある。Ⅱ期後半に想当する。

○Ｂ群13類（80・81）

取手付高台坏である。Ⅲ期に位置付けられる。

○Ｂ群14類（82）

底部からの立ち上りが急な高台坏と考えられ，笹原のＡ群22類に併行すると考えられる。

Ｃ群土器〔83～92〕

土師器の蓋を一括したもので，４類に分けられる。内面を鄭重なミガキを施した内黒を示す。

Ｃ群１類（83・84・86）

鈕部分から肩にかけて内傾するグループで肩部が「へ」の字状に張るのを特徴としている。

Ｃ群２類（85・87・88）

肩の部分がゆるやかな丸味を帯びるのが特徴で口辺の返しが僅かである。Ⅲ期に属する。

Ｃ群３類（89・90）

宝珠型の鈕を有するもので，器高が高く半円形状を示している。外面を横のミガキを肩部から鈕接合部にかけて調整している。Ⅰ期後半からⅡ期前半に位置するものであろう。

Ｃ群４類（91・92）

Ｃ群２類と３類の中間的な形状を示し，肩部がゆるやかで口辺にかけ内曲気味に外反するのを特徴としている。Ⅲ期に位置付けられる。

Ｄ群土器〔93～101〕

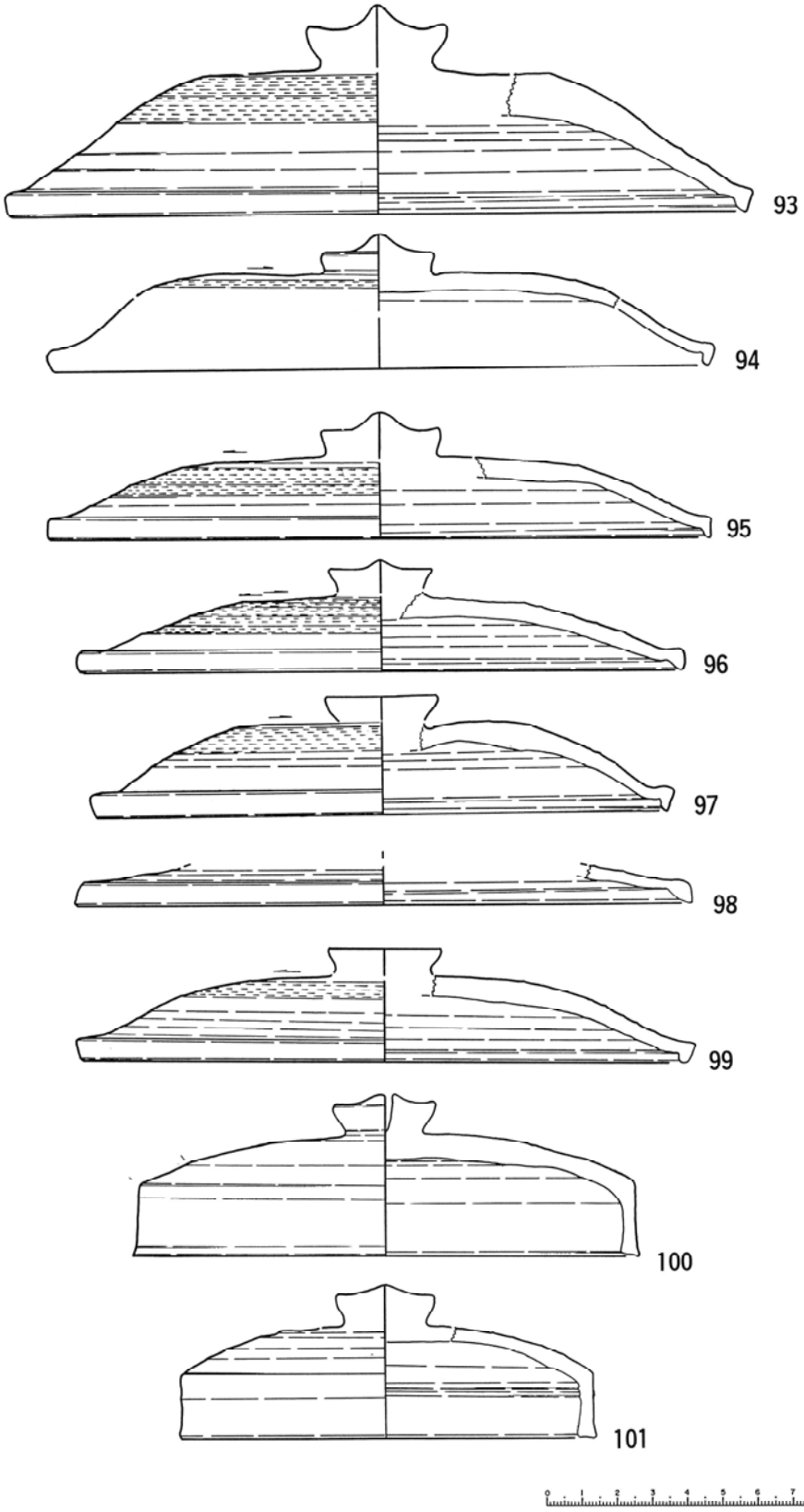
須恵器の蓋類を一括する。形態から宝珠型の鈕を有し，器高の高い93・94のＤ群１類。極端に器高が低い95・96・98のＤ群２類。肩が張るタイプの97・99のＤ群３類。宝珠型の鈕を呈し，肩部から直角に口縁部にかけて屈折する100・101のＤ群４類の４グループに分けられる。調整はロクロａ(回転速度の遅い）を主体に外面の肩部から鈕部にかけて回転ヘラケズリ調整を加えている。この中でＣ群４類土器は暗緑色を示す灰釉陶器であり，搬入須恵器と考えられる。年代は１類がⅡ期前半，２類がⅡ期後半，３類がⅢ期，４類がⅡ期に位置付けられる。

Ｅ群土器〔１〕

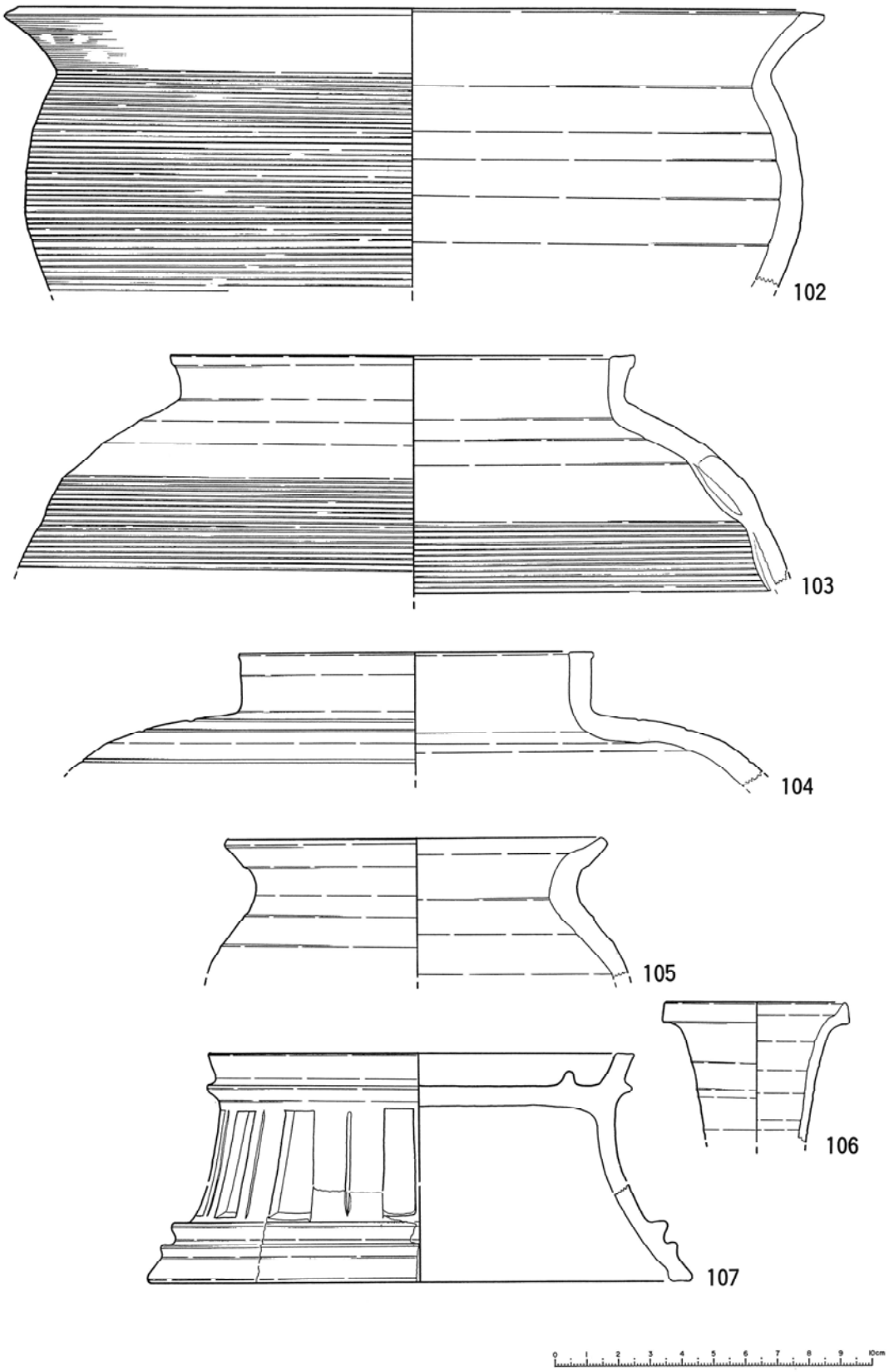
土師器甕形土器で１点を図化した。外面をハケメｄ^1，内面をハケメｄ^{2}で仕上げている。

Ｆ群土器〔109～114・116～145・178・179〕

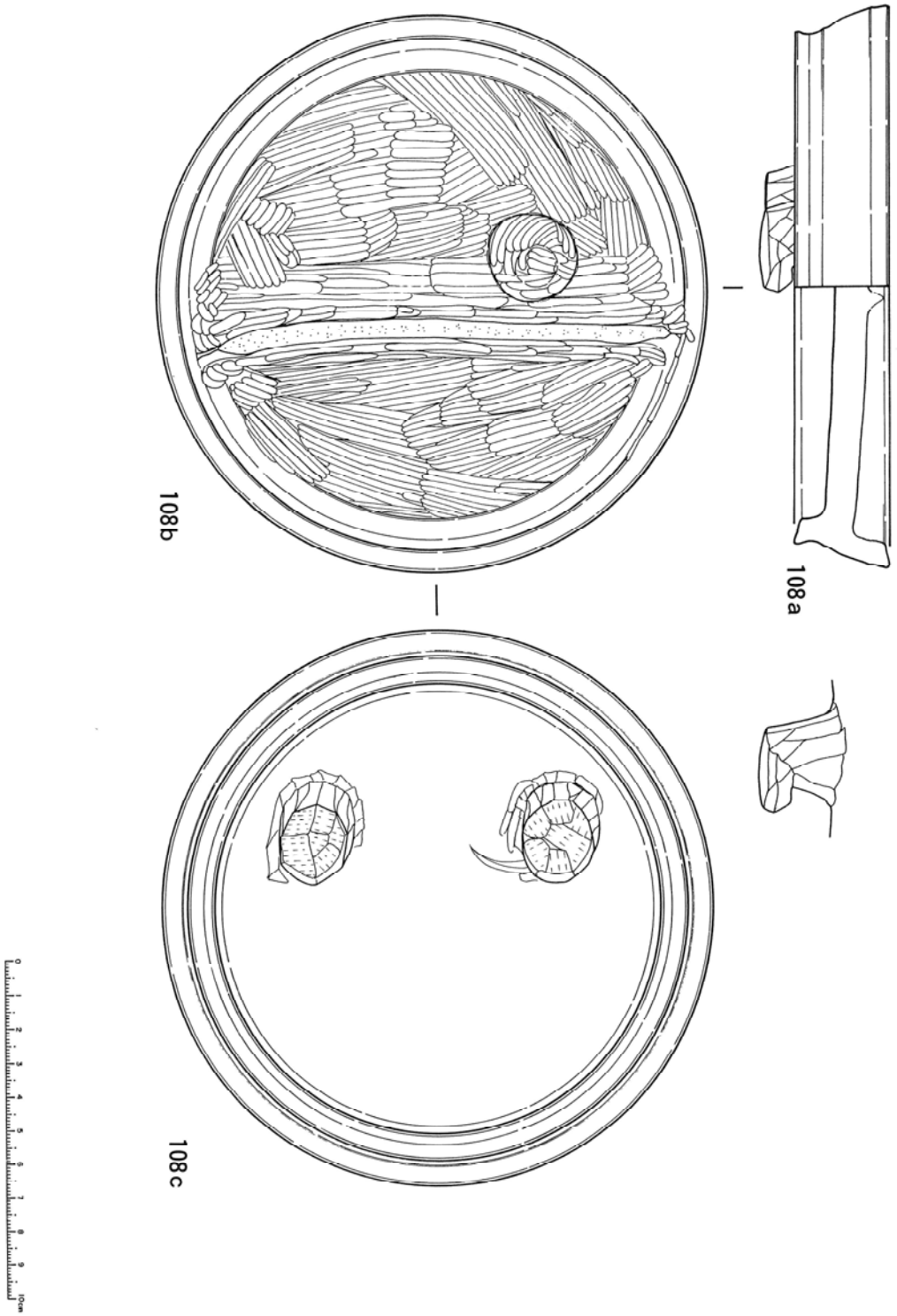
須恵器の甕形土器を一括した。この類はすべて破片によるものであり，調整手法で分類するこ



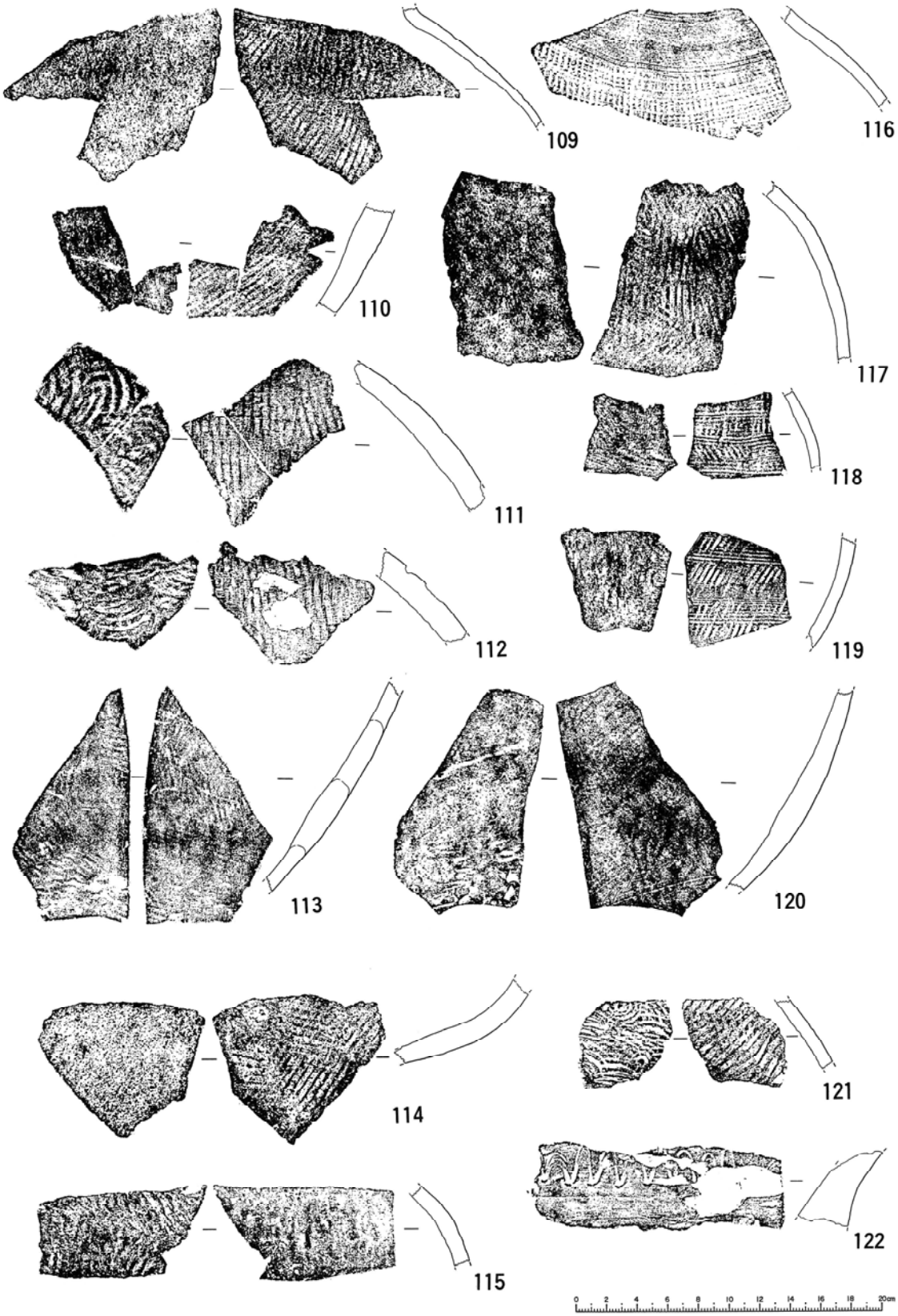
第57図　大浦B遺跡出土遺物実測図(8)



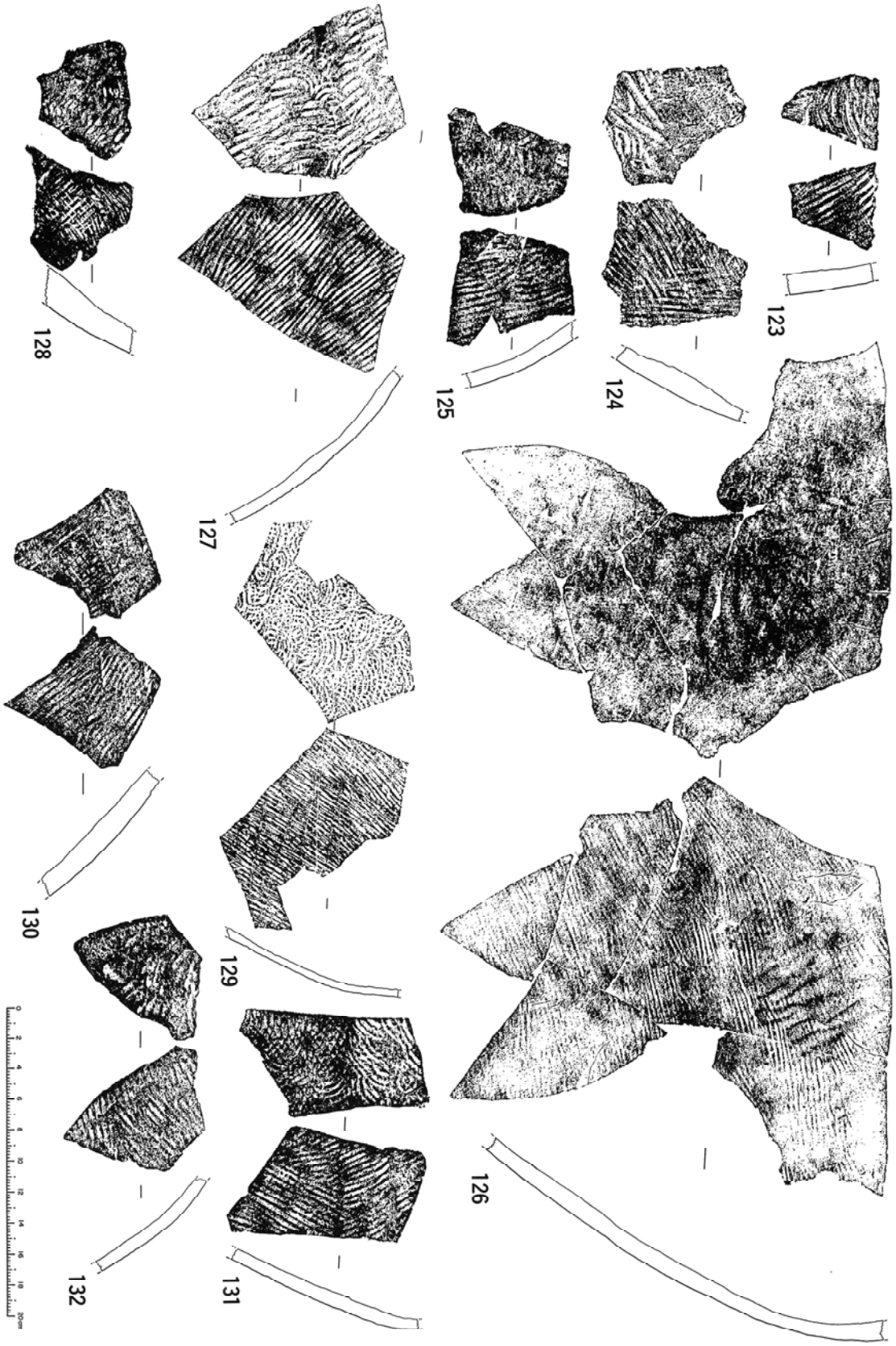
第58図　大浦B遺跡出土遺物実測図(9)



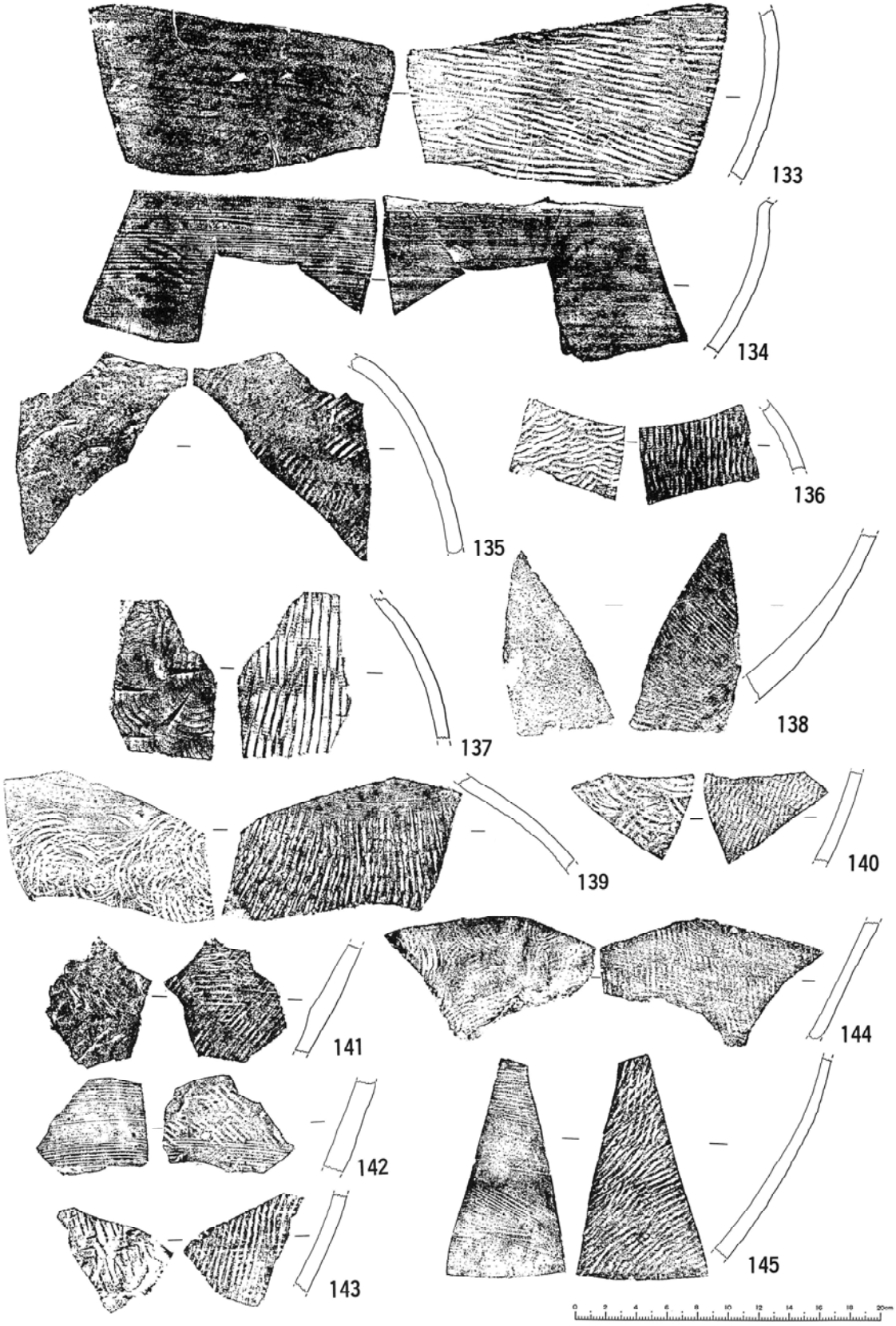
第59図　大浦B遺跡出土遺物実測図(10)



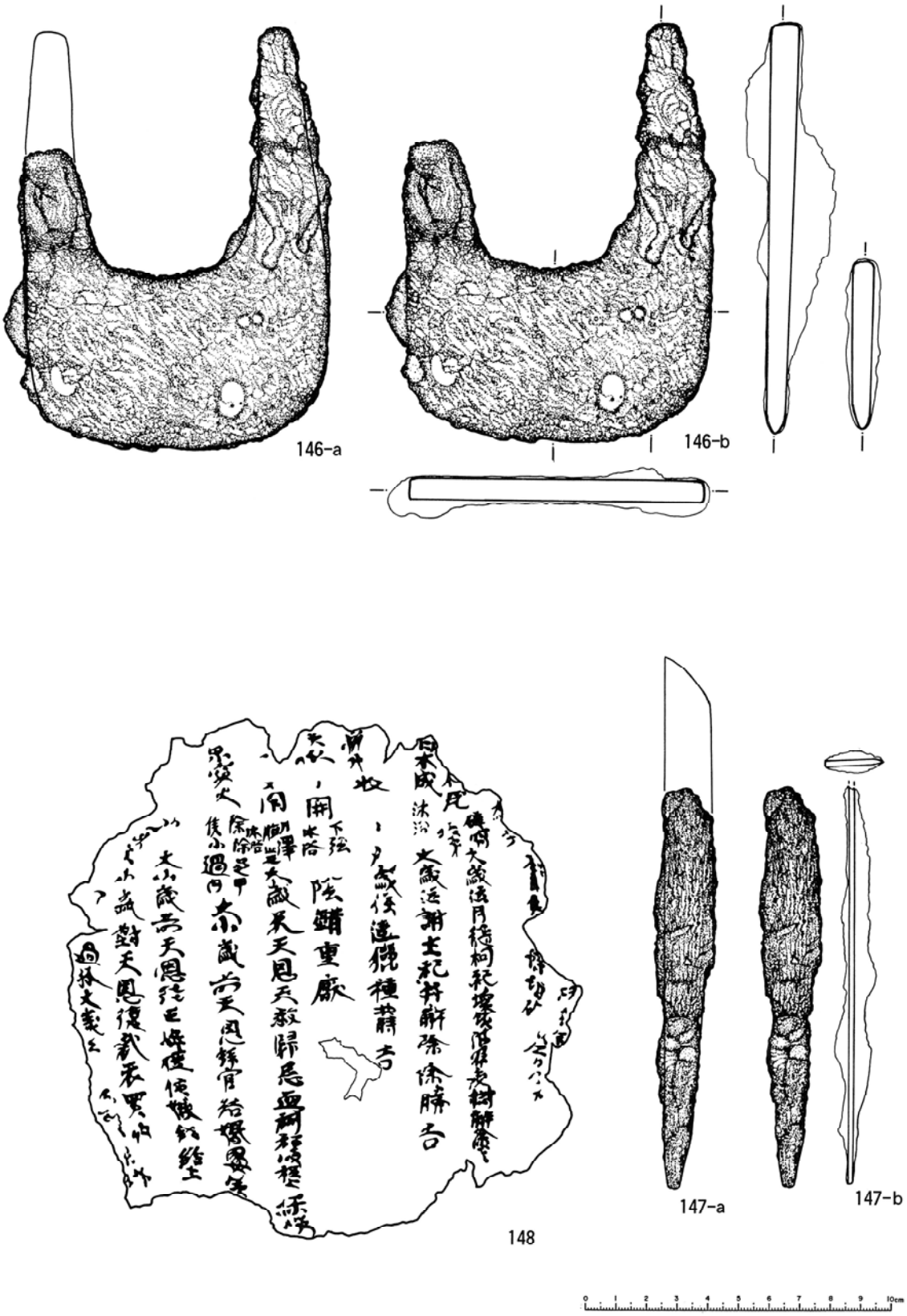
第60図　大浦B遺跡出土須恵器拓影図(1)



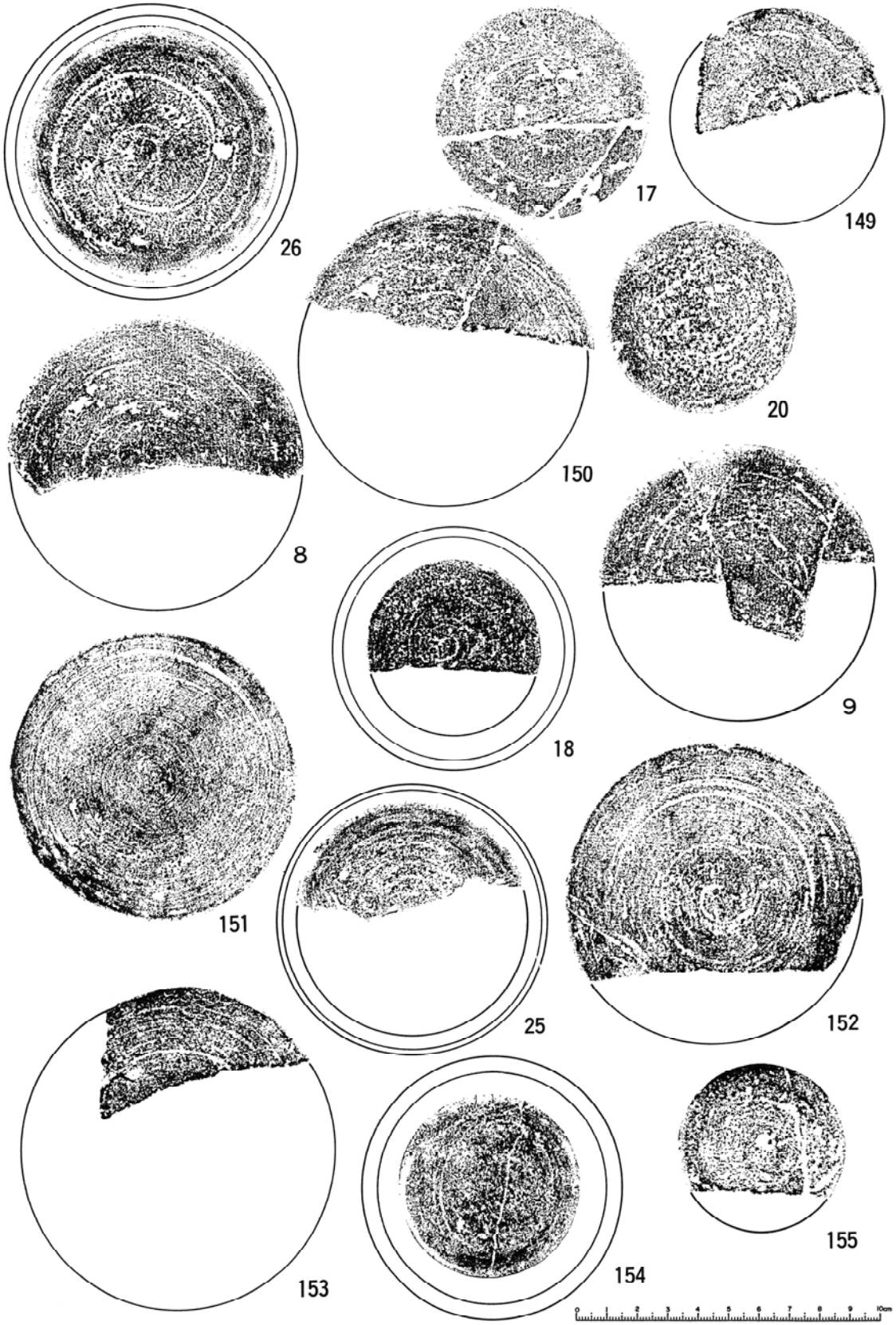
第61図　大浦B遺跡出土須恵器拓影図(2)



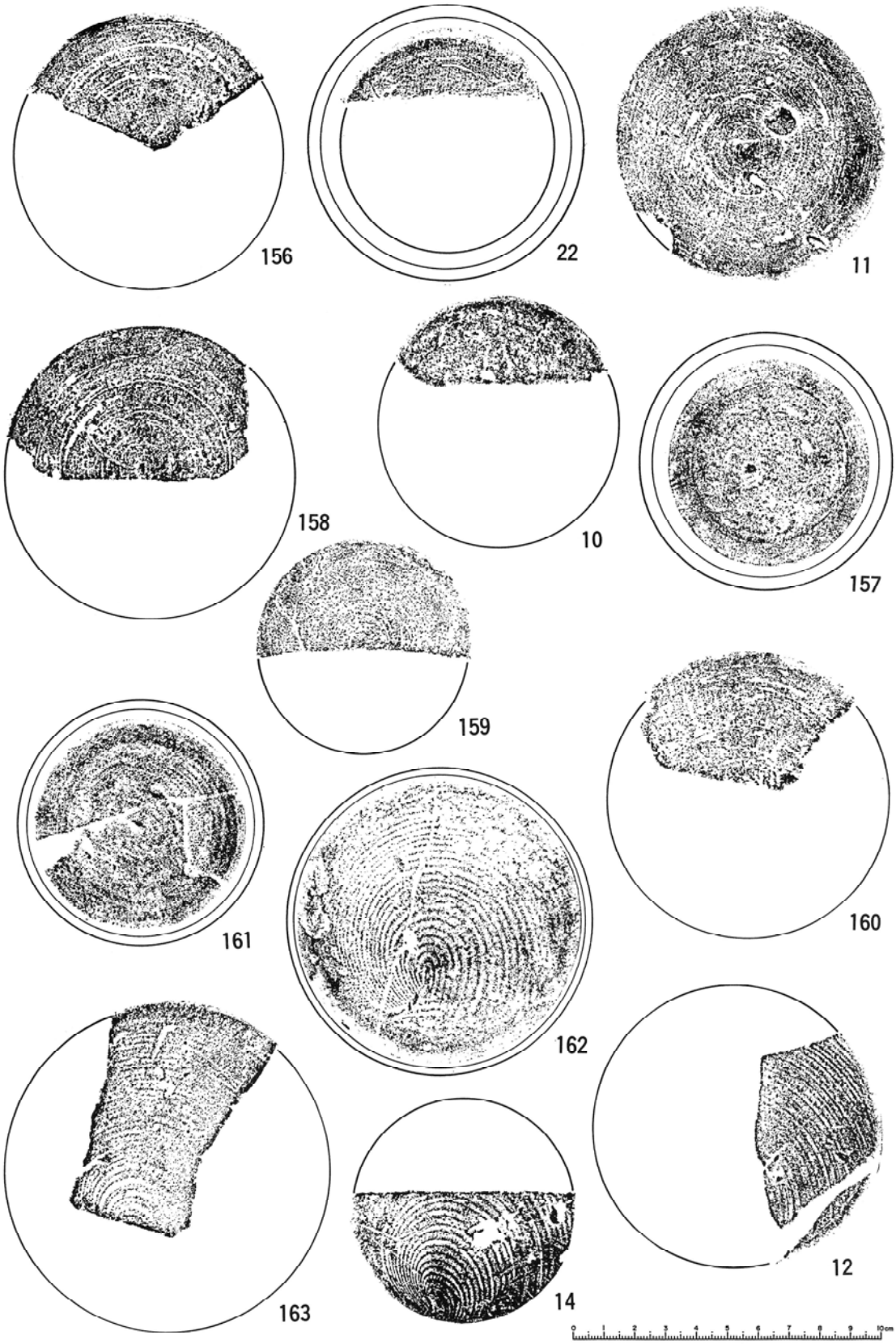
第62図　大浦B遺跡出土須恵器拓影図(3)



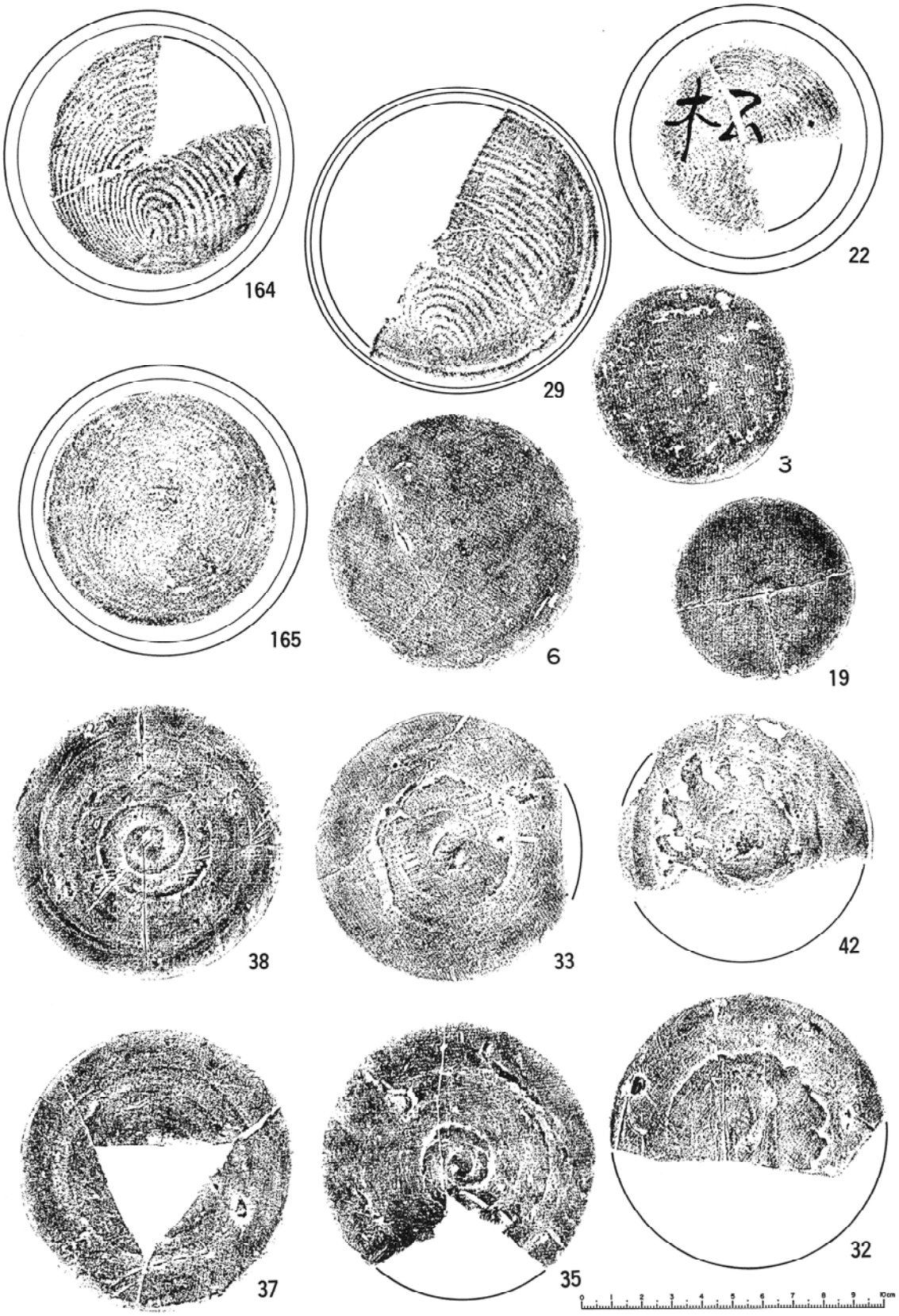
第63図　大浦B遺跡出土遺物実測図(11)



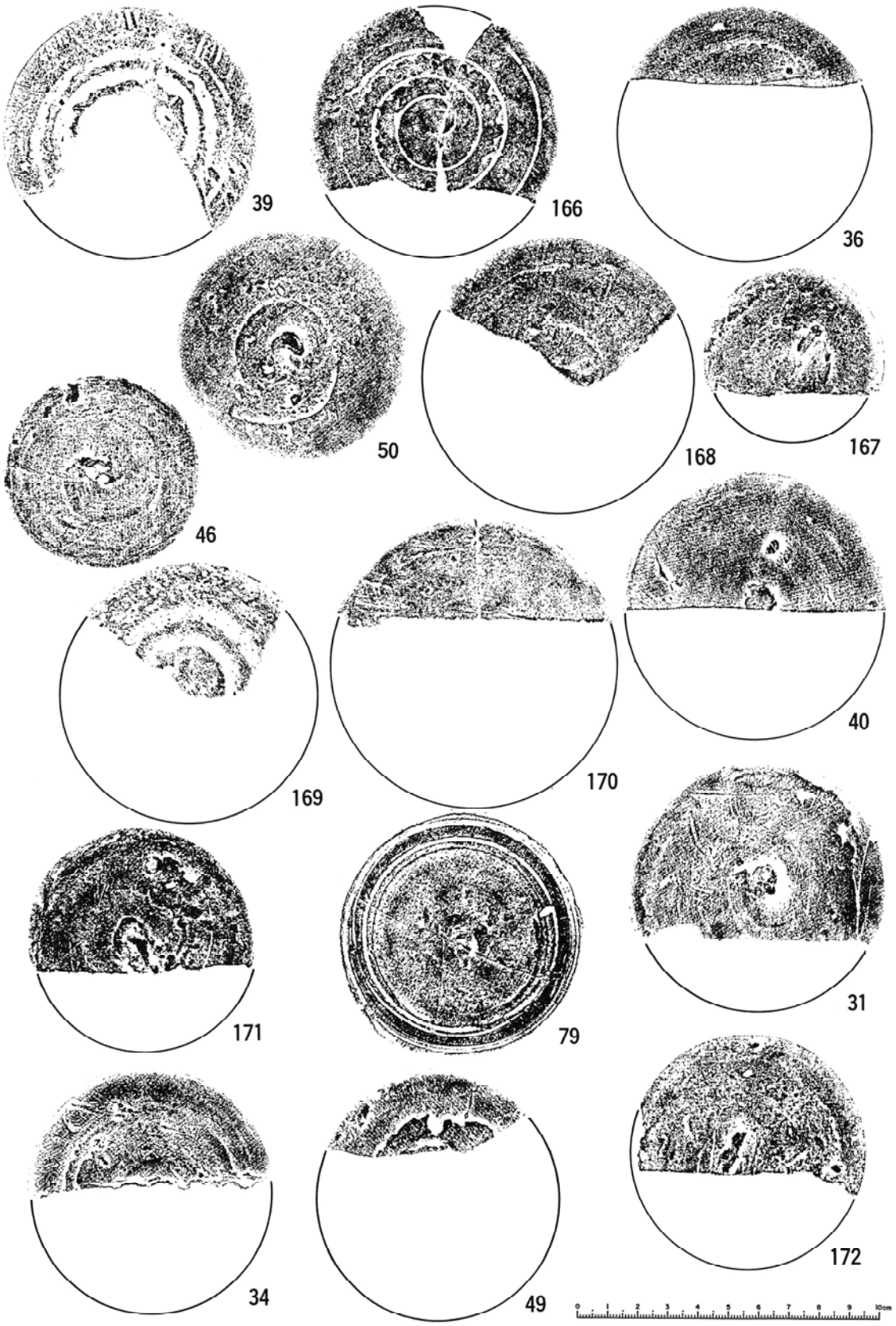
第64図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(1)



第65図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(2)



第66図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(3)



第67図　大浦B遺跡出土坏底部拓影図(4)